

人文科学研究

—第 16 号—

目次

◆2018 年度修了者修士論文題目.....	1
◆2018 年度修了者修士論文要旨.....	2
半実在論を擁護する——それはどのような点で有望か—— Seeking an Effective Pedagogy of English Perfectives: To Teach English Perfectives A Cognitive Linguistic Approach to Progressives Leading to a Better Education for Japanese EFL Learners	
◆2018 年度修了者修士論文.....	6
半実在論を擁護する——それはどのような点で有望か—— 羅洪先の思想変遷について Seeking an Effective Pedagogy of English Perfectives: To Teach English Perfectives A Cognitive Linguistic Approach to Progressives Leading to a Better Education for Japanese EFL Learners 『変身物語』研究	
◆院生会組織	199
◆2018 年度院生会活動記.....	200

平成 30 年度信州大学人文科学研究科 修士論文題目

【地域文化専攻】

半実在論を擁護する——それはどのような点で有望か——

17LA001J 對馬康平

羅洪先の思想変遷について

17LA002G LIU XINYI

【言語文化専攻】

Seeking an Effective Pedagogy of English Perfectives: To Teach English Perfectives

15LA105A 藤澤翔

A Cognitive Linguistic Approach to Progressives Leading to a Better Education for Japanese EFL Learners

16LA104F 佐野克明

「字鏡集」の基礎的研究

17LA101E 伊藤智弘

『変身物語』研究

17LA105H 南英明

半実在論を擁護する——それはどのような点で有望か——

對馬 康平

本論文の目的は、科学的実在論（以下、実在論、科学的反実在論を反実在論と記す）、その中でも A・チャクラヴァティの提案する半実在論（semirealism）を擁護することである。

実在論とは、直接観察できないものを含めた世界のありようを、私たちは科学によって知ることができる、と主張する立場である。反対に、反実在論は、科学は観察可能な領域の現象について、十全な説明を与えることを目的とする、と主張する立場だ。両者の論争を、科学的実在論論争と呼ぶ。

私は、実在論が科学に対する態度としてある種の望ましさを持っており、そのため、反実在論よりも選択するに値するものであると考える。まず実在論は反実在論に比べ、私たちが日常的に持っている科学に対する印象とよく合致している。また、世界観としてよりシンプルである。さらに実在論は反実在論に比べ、科学によって私たちがより多くを知りうることを肯定する立場である。とくにこの三つ目の望ましさゆえに、私は実在論の側に立つことを選ぶ。

実在論と反実在論は様々な観点において対立し、その主張を洗練させてきた。私が擁護したいと考える半実在論は、批判に対処するだけでなく、実在論の欠点を解消することを試みている。また、これまでの論争は、我々は何を知りうるのか、という認識論の範疇で行われてきた。これに対し、チャクラヴァティは認識論にとどまらず、実在論そのものにとってどのような存在論が必要であるか、という問題を提起し、実際に実在論のための存在論の構築に取り組んでいる。私は、これら二つの点において、他の実在論と比べて彼の半実在論は優れており、そのことから、半実在論を擁護するべきだと考える。

本論文の構成は以下の通りである。

1 章では、実在論と反実在論の基本的な主張、実在論を選択すべき理由、そして実在論の中でも半実在論が特に擁護に値する理由の三つが示される。

2 章では、半実在論を理解するために、これまでの論争が概観される。奇跡論法、悲観的帰納法、対象実在論、構造実在論が取り扱われる。

3 章では、半実在論の概要とその意義が明らかにされる。はじめに 2 章で紹介した二つの実在論の問題が確認され、両実在論の統合によってそれらの問題を解決しようとするのが半実在論であることが示される。

4 章では、チャクラヴァティの提案する形而上学——実在論を支える存在論——の全体像とその意義が明らかにされる。

5 章では、チャクラヴァティの形而上学に対して S・シロスが行った二つの批判が検討される。それらに応じる手立てとして、ここでは、エリスのいわゆる「最も基礎的な傾向性」に着目することが提案される。

Seeking an Effective Pedagogy of English Perfectives: To Teach English Perfectives

藤澤 翔

本論文は、英語の完了形において、副詞句がついたとき、特に2つの副詞句がついたときの用法と副詞句がないときに、完了・結果、継続、経験のどの用法であるかの考察を行い、その知見を英語教育に応用する。現在完了形は、英語教育において副詞句がこの4用法を分類するとされている。just や already などの直近の過去を表す副詞句が共起すると完了用法、for+期間や since+期間などの期間を表す副詞句が共起すると継続用法、once, twice や before などの回数などを表す副詞句が共起すると経験用法になるとされている。(Dual Scope 2017) しかしながら (i) before が経験用法で使われる理由や just now が実際に現在完了形で使われる理由、(ii) 副詞句が2つ共起したときの用法、(iii) 副詞句が全く共起しないときの用法に関する記述はなく、それらについて詳しく教えられないことはない。よって、英語学習者はどんな状況で完了形を使ったらいいか理解できずにいる。

完了形の先行研究においては、一つの副詞句がついたときの用法や、ある副詞句と現在完了形が共起した場合どんな用法になるのかといった研究が多くなされてきた。これらは上記の (i) (ii) (iii) に関してどれも説明がなされていなく、欠点としてあげることができる。

本論文では、先行研究で欠点とされている以上の点について考察を行い、完了形の用法に関して考察を行った。本論文は3つの枠組み理論、すなわち、①ベンドラーの動詞の4分類、②①で分類した動詞のテリシティーに関して、③語彙概念構造(LCS)を用いることで、上記の (i) (ii) (iii) の問題の解決をしたものである。すなわち、(i) については before は「直近の過去(完了)」や「現在まで動作の状態が続いている(継続)」(Quirk et al.(1985:193)) には合致せず、「現在までの動作の経験(経験)」(Ibid.:193)に合うため、経験用法として使われ、just now は Fujisawa et al.(2017)で述べた通り、③によって活動動詞以外の動詞で使用可能と論じてきた。次に(ii) に関しては2つ以上の副詞句が共起する場合は経験用法の解釈が最も優先され、次に継続用法、そして完了用法といった優先順位が分かった。これは副詞句の影響によりこの優先順位で解釈できることが分かった。継続か経験かは、継続用法が現在まで動作が続いているという定義から考えると、動詞の状態が現在まで続くというのが、once などのこれまでの経験を表すことにのみ使える副詞句によって打ち消され、経験用法が優先されるということを明らかにした。(iii) は②のテリシティーで説明ができ、テリシティーのない活動動詞は経験用法になり、テリシティーのある到達・達成動詞は完了用法になると結論づけた。さらに活動動詞は完了の読みが、到達・達成動詞でも経験の読みが可能なのは、主語や目的語の特性、もしくは動詞が活動なら到達・達成動詞化、到達・達成動詞なら活動動詞化していることが、オーバーライドする要因であることを論じた。

最後に、本論文は、この主張を英語教育に応用する方法について考察を行った。すなわ

ちまず完了形を教える以前に動詞の種類、特にテリシティーについて丁寧に教え、それを
基に3用法に関して詳しい解説をすることが、学習者の完了形の理解を深めると結論づけ
た。

A Cognitive Linguistic Approach to Progressives Leading to a Better Education for Japanese EFL Learners

佐野 克明

本論文は、英語の進行形について考察を行い、その知見を英語教育に応用する。進行形の中の一つの形である現在進行形は、学校文法に於いて、目の前の出来事を表すものであり、過去・未来を含むものではないと説明されることが多い(Vision Quest 2018)。しかしながら、現在進行形は、(i)一時的な出来事の中の今であり、(ii)目の前の出来事のみを表す場合には **right now** などの副詞と共に用いる必要がある。よって、進行形の学習に於いて、今だけの出来事を表す表現であると教えられるものの例文を見ていくと今だけの出来事という説明では充分ではなく、また、意味解釈も多様であるように見えることから学習者が混乱をきたすことがある。

進行形の先行研究は、大きく分けて二つのカテゴリーに分類することができる。すなわち、①現在形と比較して現在形は恒久的な出来事、進行形は一時的な出来事であるという説明と②一時的な出来事という解釈にもいくつかあるという説明である。

しかしながら、これらの先行研究のどれもが、進行形とは何かに対する一貫した説明が十分なされているとは言いがたい。すなわち、(i)進行形の持つ解釈は一つなのか、それとも複数あるのか、(ii)解釈が複数あると考えられる場合、それは(a)動詞の種類によるものなのか、(b)副詞によるものなのか、という2点である。

本論文では、上記の先行研究が課題としている上記2点について考察を行い、様々な進行形を分析することにより、それぞれに差異があるのか、それとも一貫した特徴があるのかについて考察を行った。本論文は、日本人学習者が進行形を学ぶ際に混乱を起ししやすい点とその要因についても分析し、英語と日本語の差異を踏まえてより良い教育法とは何かについて考察を行った。考察を行う上で学習者コーパス（日本人英語学習者と英語母語話者が書いた英作文を収録）を用いた。

本論文は大きく分けて2つの要素、すなわち、①様々な進行形を分析し、進行形に対する一貫した説明を出来るか考察する②日本語と英語の差異に焦点を当て、日本人英語学習者に向けたより良い指導法の考察から成り立っている。本論文ではイメージスキーマを用いて進行形に対する一貫した説明をしようと試みた。この新たな進行形に対する説明が学習者の進行形とは何かに対するイメージを掴む手助けとなると期待される。

さらに、本研究は、得られた知見を用いて、英語学習者にとってより分かりやすい進行形の教授法を考案した。英語の進行形を日本語に訳す際に「～ている」と解釈されるが、「～ている」は英語の進行形・現在形・現在完了形に当たる。具体的に進行形と現在形・現在完了形を区別する為の方法論として何が適切なのか考察した。その結果、本研究を基にした新たな教授法(テイルを文中に入れて識別する)を発見した。

平成 30 年度 修士論文

半実在論を擁護する
——それはどのような点で有望か——

信州大学大学院人文科学研究科地域文化専攻

17LA001J 對馬康平

目次

はじめに.....	9
1. なぜ科学的实在論を擁護するのか.....	10
1.1. 科学的实在論とは何か、科学的反实在論とは何か、その争点.....	10
1.2. 实在論をとることの望ましさ.....	12
1.3. なぜ半实在論を擁護するのか.....	13
1.4. 以降の概略.....	13
2. 科学的实在論論争を振り返る.....	15
2.1. 奇跡論法 (miracle argument)	15
2.2. 悲観的帰納法 (pessimistic induction)	15
2.3. 奇跡論法と悲観的帰納法が示唆すること：選択的な实在論へ.....	16
2.3.1. 対象实在論 (entity realism)	17
2.3.2. 構造实在論 (structural realism)	17
3. 「半实在論」(semirealism) とは.....	19
3.1. 対象实在論 (entity realism) の問題.....	19
3.1.1. 対象实在論の問題①：対象の知識は理論から分離できるか.....	19
3.1.2. 対象实在論の問題②：異なる理論間で対象が同一であるといえるのか.....	20
3.2. 構造实在論 (structural realism) の問題.....	20
3.2.1. 認識的構造实在論 (epistemic structural realism) : ESR.....	21
3.2.2. ESR の問題①ニューマン型の批判.....	22
3.2.3. ESR の問題②悲観的帰納法に真に抵抗できるのか.....	22
3.3. 「半实在論」(semirealism) とは.....	23
3.3.1. 半实在論①因果的介入が構造に質を与える.....	23
3.3.2. 半实在論②検出性質と補助性質の区別によって悲観的帰納法に対抗する.....	24
3.3.3. 半实在論③対象实在論の問題を解決する.....	24
3.4. 二つの实在論の「いいとこどり」.....	25
4. 半实在論の形而上学的な基礎づけについて.....	26
4.1. 伝統的な因果实在論：出来事間の関係因果.....	26
4.1.1. 接触の問題 (the contiguity objection)	27
4.1.2. 退行の問題 (the regress objection)	28
4.1.3. 因果の仕組みの問題 (the demand for causal mechanism)	28
4.2. 出来事の関係からプロセスへ.....	28
4.3. 傾向性によって性質を同定する.....	29
4.3.1. 傾向性による因果的性質同定テーゼ (dispositional identity thesis) : DIT.....	29
4.3.2. DIT のメリット①因果的必然性に納得のいく説明を与える.....	30
4.3.3. DIT のメリット②DTA よりも DIT のほうが優れている.....	31

4.3.4. DIT のメリット③対象に関する知識と構造に関する知識の統合に寄与する	32
4.3.5. DIT のメリット④矛盾したモデルについて説明を与えるために役立つ.....	32
4.3.6. DIT のメリット⑤CTP より優れている.....	33
4.4. チャクラヴァティの形而上学の意義.....	33
5. シロスの批判に応える.....	34
5.1. 全体論的な性質は同定できない.....	34
5.2. 二重基準の問題.....	34
5.3. 傾向性本質主義の導入.....	35
5.4. シロスの批判に応える.....	36
おわりに.....	38
文献目録.....	39

はじめに

本論文の目的は、科学的实在論（以下、实在論、科学的反实在論を反实在論と記す）、その中でも A・チャクラヴァティの提案する半实在論（semirealism）を擁護することである。

实在論とは、直接観察できないものを含めた世界のありようを、私たちは科学によって知ることができる、と主張する立場である。他方、反实在論は、科学は観察可能な現象について十全な予測と説明を与えることを目的とする、と主張する。両者の争点は観察不可能な対象の扱いに関するものだ。両者の論争を科学的实在論論争と呼ぶ。

私は、实在論が科学に対する態度としてある種の望ましさを持っており、それゆえ、反实在論よりも選択に値するものであると考える。まず、实在論は、私たちが普段持っている科学に対する印象ともよく合致する。また实在論は、科学理論の解釈としてシンプルでもある。しかし何よりも、实在論は反实在論に比べて、私たちが科学によって、はるかに多くを知りうるということを含意する。とりわけこの三つ目の望ましさゆえに、实在論は擁護を試みられるべきであると私は考える。

实在論と反实在論は様々な観点において対立し、その主張を互いに洗練させてきた。私が擁護したいと考える半实在論は、批判に対処するだけでなく、实在論側の欠点を解消することを試みている。また、これまでの論争は観察不可能な対象の扱いを中心的なテーマとしており、認識論の範疇で行われてきた。これに対し、半实在論は实在論にとってどのような存在論が必要であるか、という問題を提起し、その存在論の構築に取り組んでいる。以上の二点から、私は他の实在論と比べて半实在論が優れており、擁護すべきだと考える。また本論文では、半实在論を擁護するという観点から、論争全体というよりは、实在論内部の議論に特に焦点を当てる。

1. なぜ科学的実在論を擁護するのか

本論文の目的は、科学的実在論、とりわけ A・チャクラヴァティによる「半実在論」(semirealism) を擁護することだ。本章では、なぜ半実在論を擁護するのか、という問いにあらかじめ答えておきたい。

1.1. 科学的実在論とは何か、科学的反実在論とは何か、その争点

科学的実在論¹とはいかなる立場なのか。ここでは、ボルタ電池による電球の点灯を例に用いてそれを確認しよう。ボルタ電池は次のような仕組みからなる。希硫酸 H_2SO_4 の溶液中に銅板と亜鉛板を対置させておくと、亜鉛 Zn は銅 Cu よりもイオン化傾向が強いので、最外殻電子 ($2e^-$) を極板に残して、イオン化し、 Zn^{2+} となって溶液中に溶け込む。このため、亜鉛板は負に帯電する。希硫酸は $\text{H}_2\text{SO}_4 \rightarrow 2\text{H}^+ + \text{SO}_4^-$ のようにイオン化しているから、水素イオン (2H^+) は銅板に移動し、銅板の電子 ($2e^-$) と水素イオンが結合して銅板の表面に水素ガスが付着する。このため、銅板は正に帯電する。このようにして、亜鉛板は負極、銅板は正極となり、この間に約 1.1V の起電力が生じて電池になる。このとき、両極を導線でつなぐと電流が流れ、電球が点灯する。

これは典型的な科学的説明であり、科学がふつう扱う三つの対象が現れている。一つ目は、銅、亜鉛、希硫酸といった肉眼で見る、手で触れる、匂いを嗅ぐなどによって知られる対象だ。これらは「観察可能な対象」と呼ばれる。二つ目は、電子や水素イオン H^+ 、亜鉛イオン Zn^{2+} などである。こちらは肉眼で見ることができず、手で触れることもできない。これらは「観察不可能な対象」と呼ばれる。三つ目は、電流のような対象だ。ボルタ電池では、負極から正極へと自由電子が移動することによって電力が発生する。定義上、電流とは正電位から負電位への流れるものであり、実際には存在しない²。電流は電圧と抵抗の除法から求められ、計算のために用いられている。これらは *abstracta* とか *illata* と呼ばれる³。電流は実際には存在しないものの、科学においては重要な役割を果たしている。

このような科学的説明を私たちは文字通りに受け入れている。つまり、電解液の中に金属板を入れると、そのイオン化傾向によって、電子が溶液中に溶けだし、電子が移動することによって電力が発生する、という説明を受け入れている。それだけでなく観察不可能な対象を含んだ様々な現象に関して、私たちは同様の説明を受容している⁴。

¹ 以下、科学的実在論を実在論、科学的反実在論を反実在論と記す。

² 広義の意味で電子の移動は存在しているが、負電位から正電位への移動であり、電流の定義である正から負への流れは存在しない。

³ この区別はライヘンバッハに由来している。厳密に言うと、*abstracta* と *illata* は微妙に異なるものを指している。両者はともに物理的な対象と対照的に取り上げられる。だが、*abstracta* は物理学の観点から定義されるものであり、例えば重心などを指す。一方で *illata* は単に推論上の対象を指す。

⁴ 例えば、典型的な金属元素であるハロゲン族は、一価の陰イオンになりやすいという性質を持っている。このことは元素の構造から説明される。ハロゲンは 7 個の最外殻電子を持つため、外部から電子を取

実在論は以上の三つの対象のうち、観察可能な対象と観察不可能な対象が実在することを主張する立場だ⁵。同時にこの主張は科学の能力（科学ができること）に関する主張でもある。すなわち、科学は観察可能な現象を説明することができるだけでなく、観察不可能な対象に関しても知識をもたらすことができる、と実在論は主張する。科学的な説明を私たちはふつう受け入れており、それゆえ科学の能力に関しても実在論的な見方を持っている。言い換えれば、科学的な説明——科学が指定する対象は、目に見えなくても、世界に存在し、観察可能な対象はそれによって構成されており、またその性質や働きによって、観察可能な現象を引き起こしているという考え方——を受け入れるとき、私たちは実在論者である。

以上のような科学的実在論の主張はおおむね次のテーゼにまとめられる⁶。

T1：文字通りに解釈された科学理論は少なくとも近似的に真である。

T2：文字通りに解釈された科学理論は本当に指示対象を持つ。

T3：成熟した科学理論は真理へと連続的に前進する。

T4：私たちの思考とは独立に世界が存在する。

反実在論は、実在論に対する「反」の立場であり、観察不可能な対象が存在するかどうかを私たちは知りえない、という認識に関する懐疑から始まっている⁷。電池の例で言えば、銅板や亜鉛板、希硫酸などの観察可能な対象については、反実在論も実在論と同様にその存在を認める。しかし、電子や各種イオンなどの観察不可能な対象については、それらが存在するかどうかを私たちは知りえない、と主張する（それらは存在しないと主張するわけではない）。したがって反実在論は、T2を（否定はしないまでも）認めない。

また、そのため反実在論は、観察不可能な対象を含む科学理論に関しても、真であるかどうかを私たちは知りえない、と主張することになる。すなわち反実在論は、T1に対しても（否定しないまでも）認めない、という立場をとるのである。

T3は科学の能力と目的に関わるテーゼだ。実在論は科学がいずれは真理に到達すると考え、それこそが科学の目的だとする。これに対して反実在論は、科学がいずれは真理に到達するとは考えない（T1より）。反実在論の考える科学の目的とは、観察可能な現象に対して可能な限りの予測と説明を与えること——現象を救うこと——である。

T4について両者は一致する。反実在論は観念論ではない。反実在論の懐疑はあくまで私

り入れやすく、それゆえ一価の陰イオンになりやすい。化学以外の分野についても同様に直接観察できない対象を指定した理論がある。

⁵ 観察可能と不可能に本当に区別を付けることができるのか、という問題は科学哲学において非常に重要である。本論文で取り上げるチャクラヴァティは、科学に登場する存在者を観察可能（肉眼で見える、匂いを嗅ぐ、手で触れる）と観察不可能（観察可能な仕方で観察できないもの）に分けたうえで、さらに観察不可能な対象を検出可能（何らかの機器を使って観測できるもの）と検出不可能（機器を使っても検出できないもの）に分けている。そして彼は、観察可能な対象と検出可能な対象について、その実在を主張している。Chakravartty (2007) pp.13-17

⁶ 野内 (2008) p.82 一部改変

⁷ この懐疑はおそらくマッハに由来している。マッハは肉眼で観察できないものの存在を認めず、直接観察できるものだけを認めるべきだとしている。(cf. 戸田山 2005, pp61-62)

たちの認識能力に関するものであり、この世界そのものへ向けられたものではない。

以上を踏まえて反実在論を構成するテーゼを書き直すと、次のようになるだろう。

AT1：文字通りに解釈された科学理論は真であるかもしれないが、仮にそうだととしてもそのことを私たちは知りえない。

AT2：文字通りに解釈された科学理論が本当に指示対象を持つかどうかは私たちには知りえない。

AT3：成熟した科学理論が真理へと連続的に前進するかどうかは私たちには知りえない、それゆえ科学の目的は、現象を救うことである。

T4：私たちの思考とは独立に世界が存在する。

AT1、AT2 からわかるように、反実在論は基本的には懐疑論の形を取っている。懐疑論を直接論駁することは難しい。にもかかわらず実在論が放棄されることがないのは、その望ましさゆえであると思われる。

1.2. 実在論をとることの望ましさ

では、実在論をとることにはどのような望ましさがあるのだろうか。

一つは、実在論が常識的な立場であるということだ。先述した通り、科学の能力に関して、私たちのふつうの理解の仕方が実在論であり、それと合致していることにはある種の望ましさがある。もっとも、反実在論が科学の能力に関する見方として間違っているというわけではない。反実在論は、私たちの認識に対する謙虚な姿勢であり、科学の能力をより慎重に見積もっている。それゆえ、反実在論もある種の望ましさを持っており、常識とよく合致しているということだけで実在論を選択すべきとは言い難い。

二つ目は、実在論は理論のシンプルな解釈だということである。例えば原子論について、実在論はそれを文字通りに解釈する。すなわち、あらゆる物質は原子から構成されている、ということを実在論とする。これに対して反実在論は回りくどい仕方で原子論を解釈する。すなわち、「あらゆる物質が原子から構成されている」と考えることには利点がある、という仕方で原子論を解釈するのである。反実在論をとるならば、観察不可能な対象を含んでいるあらゆる理論について、このような保留付きの読み方をしなければならない。とはいうものの、これは反実在論が根本的に間違っているということの証左にはならない。反実在論は理論解釈に関しても慎重なだけであり、慎重さを美德とする人は反実在論の方が望ましいと思うだろう。

三つ目は、科学という営みに対する態度に関するものだ。科学はこれまでの歴史上、他の知的な営みと比べて、目覚ましい成功を収めてきた。科学という営みに対して、あえて懐疑的であることにも一定の価値はあると思われる。しかし、実在論をとることで、私たちは自身の認識的な営みと知識についてより多くを認めることができる。より多くを私たちは知りうると認めることを、何らかの仕方で正当化できるならば、それに越したことはない。私

としては、何よりもこの三つ目の望ましきゆえに、实在論を擁護したい。

1.3. なぜ半实在論を擁護するのか

上述の通り、私は、科学に対する態度として、实在論のほうが反实在論よりも望ましいと考えている。ただ实在論は、これまでの論争で様々な形に分かれている。そうした数ある实在論の中でも、私は、A・チャクラヴァティの半实在論が实在論として最も洗練されており、擁護すべきものだと考える。それは次の二つの理由による。

一つは、半实在論がこれまでの議論の成果を受け継いでいるということだ。様々な批判や歴史的な経緯を考慮したうえで、もし实在論を主張しようとするならば、半实在論という仕方にならざるを得ないと私は考える。

もう一つは、チャクラヴァティが科学を中心に据えた存在論に整合的な説明を与えるというプロジェクトに取り組んでいることだ。これまでの論争は、基本的には認識論の範囲で争われてきた。すなわち、私たちは科学によってどこまでを知りうるのか、ということが問題となってきた。しかし、彼は真に实在論を主張するためには、認識論を下支えする存在論を作る必要があると主張する。現在私たちが持っている存在論は、多かれ少なかれ科学という営みから影響を受けている。この存在論をより整合的なものにしよう、というのが彼の目論見である。先行きはどうかあれ、これは確かに試みるべき企図であり、その意味で半实在論は現状において擁護に値するものであると私は考える。

1.4. 以降の概略

本論文の以降の構成について述べる。

まず 2 章では、半实在論の登場に先立つ科学的实在論論争の歴史を振り返る。主として取りあげるのは、实在論が用いる奇跡論法、それへの反論として反实在論が用いる悲観的帰納法、そして悲観的帰納法への対抗を可能にするものとして生まれた二つの实在論——対象实在論と構造实在論——である。

続く 3 章では、半实在論を概観し、その意義を明らかにする。ただし論述は、対象实在論と構造实在論が抱える問題を紹介することから始める。というのも、半实在論は、これら二つの实在論を統合することによって、それぞれの問題を解決するというかたちをとるからだ。半实在論は、こうした巧みな仕方で实在論論争の閉塞状況を打開するものであり、私の見るところ、实在論の完成形として高い評価に値する。

4 章では、チャクラヴァティの提案する形而上学——实在論を支える存在論——の全体像を描き、その意義を明らかにする。ここでは次の二つを取り扱う。一つは半实在論が依拠する介入概念の前提となる因果性についての新たな实在論だ。そこでは彼が「因果的性質」と呼ぶ物理的諸性質が要となる。もう一つは、この因果的性質は傾向性を通じて同定されるとす

る彼のテーゼ、すなわち DIT (dispositional identity thesis)である。こうした彼の形而上学の構想は、私が見るところ、科学を中心とする私たちの世界観をより統合的なものへと更新しようとするものであるという点で、極めて有意義である。

最後に 5 章では、半実在論への批判を検討する。ここでは代表的な論者として S・シロスを取り扱う。彼の批判は二つある。一つは DIT による性質同定の実効性に関するものであり、もう一つは DIT 導入の正当化に関わっている。これら二つの批判に応じる手立てとして、私のここで、エリスのいわゆる「最も基礎的な傾向性」への着目を提案している。

以降の構成は上記の通りである。では、科学的実在論論争を確認することから始めよう。

2. 科学的事実論論争を振り返る

私が本論文で擁護したいと考える半実在論は、これまでの科学的事実論論争から様々な成果を引き継いでいる。そこで本章では、半実在論を理解するという観点から、科学的事実論論争を振り返る。取りあげるのは、奇跡論法、悲観的帰納法、そして二つの選択的事実論——対象実在論と構造実在論——である。

2.1. 奇跡論法 (miracle argument)

奇跡論法の原型はパトナムによって提案され⁸、その後、多くの論者によって洗練されてきた。戸田山は次のように奇跡論法を特徴づける。

広く受容された科学理論はさまざまな意味で成功している。その成功は、理論が（近似的に）真であることによって最もよく説明できる。したがって、その科学理論は（近似的に）真であるだろう⁹。

例えば、電子についての理論から導かれた予言はよく当たっている。電子についての実験も、電子なるものが実在し、その電子なるものについて実験したかのように同じ結果が得られる。また、電子についての理論から、LED が作られ、私たちが照らしている。理論が電子について完全に誤りである、もしくは電子そのものが実在しないとしたら、電子理論によって、様々なことが説明されることや、LED が今光っていることが全くの奇跡となってしまうように思われる¹⁰。奇跡として科学的成功を説明するよりは、実在論によって説明した方がよいというのは明らかである。つまり、奇跡論法とは科学の成功を奇跡にしない論法というわけだ。

奇跡論法はいわゆるアブダクションを用いている。アブダクションは、特定の経験的データに対して説明がつくような仮説を導入する推論だ。例えば、友人 A はお洒落に気を遣いはじめた。またお金が必要になったのか急にバイトを始めたもしている。休日になると、遊びの誘いも断りどこかへ出かけるようだ。こうした A の行動は、A に彼女ができたと考えたと説明がつく。そこで私はどうやら A に彼女ができたらしいぞ、と結論する。言い換えると、A に彼女ができたと考えることが、A の行動（経験的データ）を最もよく説明してくれる、というわけだ。奇跡論法は、科学的な予言の的中や実験の成功という経験的データを実在論によって説明する、というアブダクションを行っている。

2.2. 悲観的帰納法 (pessimistic induction)

⁸ Putnam (1975)

⁹ 戸田山 (2015) p.56

¹⁰ この例は戸田山を参考にした。同上, p.56

科学の成功という経験的データを説明するために実在論に訴える、というのが奇跡論法だ。奇跡論法は説得的な議論であり、うまくいっているように思われる。しかし奇跡論法には悲観的帰納法という強力なライバルが存在し、それによって奇跡論法は窮地に追い込まれることになる。

悲観的帰納法を提起したのはラウダンだが¹¹、レディマンは、それを次のようにまとめている¹²。

- 1 科学の歴史においては、その後拒絶されたにもかかわらず、[略] 経験的には成功していた多くの理論があった。
- 2 私たちの現在の最高の理論は、それらの放棄された理論と種類は変わらないので、それらと同じように撤回されることはないと考えべき理由はない。

例えば、カロリック説¹³やエーテル理論¹⁴は、歴史的にみるとある時点ではよく成功していた。しかし、どちらも後には完全に否定された。科学史とは、こうしたことの繰り返しである。それゆえ帰納的に考えると、現在、経験的に成功している理論も未来においては根本的に間違いであることが示される可能性を排除できない、というわけである。

奇跡論法は、ある理論が現在成功しているのはその理論が（近似的に）真であったためである、と主張するものだった。しかし、悲観的帰納法によって理論の成功とその理論が（近似的に）真であることが切り離され、奇跡論法は危機に陥る。

2.3. 奇跡論法と悲観的帰納法が示唆すること：選択的な実在論へ

悲観的帰納法に対して実在論側がとる戦略は、理論によってもたらされる種々の成功と理論が全体として（近似的に）真であることを結び付けるのをやめることだ。こうした戦略をとる実在論をチャクラヴァティは選択的実在論と呼ぶ¹⁵。選択的実在論は、理論のどの部分が世界を捉えているとみなすかについて選択を行う。すなわち、理論が誤りとされるとき、その理論全体が誤りなのではなく、間違いとして捨てられる部分とそうでない部分を分けるのである。もしこれが成功するならば、奇跡論法を窮地から救い出し、実在論を擁護することができる。理論内でその成功と結びついていて、かつ間違いとして捨てられない部分があることが確かめられるならば、そこから再び奇跡論法を展開できるからだ。

¹¹ Laudan (1981)

¹² Ladyman (2014)

¹³ カロリックとは、熱を媒介するものとして想定されていた観察できない対象のこと。熱が何かを伝わって移動していることから、18世紀ごろに流体として想定され、19世紀初めまでは信じられていた。

¹⁴ エーテルとは光の媒質として想定されていた観察できない対象のこと。古代ギリシアでは、4元素（地水火空気）に加え、天上を形作る元素として考えられていた。19世紀になって電磁波の存在が予言されるようになり、宇宙全体を満たしているものとして想定されるようになる。しかし、1887年のマイケルソン＝モーリーの実験によって、エーテルは完全に否定された。マイケルソン＝モーリーの実験は、エーテルを観測するために行われたが実際には何も観測されなかった。

¹⁵ Chakravartty (2007) p.29-30

選択的実在論は対象実在論と構造実在論の二種類に大別される¹⁶。以下ではそれぞれの代表的な論者としてハッキングとウォラルの主張を確認する。

2.3.1. 対象実在論 (entity realism)

対象実在論の主張は、「あなたが電子を吹きかけるならば、それは実在する。」¹⁷という一文で示される。例として、ハッキングが用いた電子銃の組み立てをもとに理解を進めよう¹⁸。彼が取り上げるのは、電子銃から電子を発射し素粒子を破壊する、という事例である。電子銃は、電子についての様々な理論や知識によって設計され組み立てられる。そして、設計通りに機能し、電子は素粒子に命中する。このとき、電子は私たちの思い通りに操作されている。すなわち、「自然のより仮説的な他の部分に介入するために、電子のよく理解された様々な性質を利用する新しい種類の装置を組み立てることに適切に着手する——そしてしばしば組み立てにまずまず成功する——ときに、われわれは電子の実在性について完全に確信するのである」¹⁹というわけだ。つまりハッキングは、より仮説的な対象とそうでないものを分け、前者を後者によって操作することで、後者についてのコミットメントが確保されとされているわけだ²⁰。対象実在論は、理論の中からその成功と結びついている部分として、他への介入のために操作可能な部分を分離する。こうして理論全体から成功と結びつく部分を分離することができたので、対象実在論は奇跡論法を再び展開することができる。

2.3.2. 構造実在論 (structural realism)

構造実在論の主張は、「科学理論はそもそも世界の構造について語るものであり、その構造についての正しい記述を目的とする。そして、それに程度の差はあれ成功している」²¹というものだ。構造実在論は、理論が刷新されるとき、変化する部分と保存される部分があり、そのうち保存される部分だけを分離し、理論の成功は保存される部分に由来するものだ、と主張する。このように主張することで、構造実在論は奇跡論法を維持し悲観的帰納法に抵抗する。

構造実在論にはいくつかのバージョンがあるが²²、チャクラヴァティが取りあげるのはウ

¹⁶ より細かく分けると、構造実在論はウォラルの ESR とレディマン、フレンチらの OSR に分かれる。

¹⁷ ハッキング (2015) p.64

¹⁸ 同上, pp.506-519

¹⁹ 同上, pp.505-506

²⁰ 同上, pp.517-518

一方で、ハッキングはより仮説的な対象がいずれは私たちに操作可能なものになりうることを認めている。

²¹ 戸田山 (2015) p.194

²² 構造実在論は、ウォラルの認知的構造実在論：ESR とレディマン、フレンチによる存在論的構造実在論：OSR に分かれる。野内 (2009) によると、両者の違いは、OSR が存在論の領域に踏み込んでいることにある。ESR は世界の構造だけが知られうるものであり、その本性は隠されているとする。これに対して OSR は、構造そのものが世界であると主張する。野内 (2009) pp.9-10

オラルによるものである²³。ウォラルは、フレネルの光学からマクスウェルの電磁気学への理論の更新を取り上げる。二つの理論はどちらも光に関する理論だ。彼によると、マクスウェル方程式は、フレネルの方程式とは全く異なった前提の下で示されたものだ。だが同時にマクスウェル方程式は異なった前提を有しているにもかかわらず、フレネルの方程式を含意している²⁴。フレネルの光学はエーテルという存在者を前提している。エーテルは光がどのように進むのか、ということへの説明として導入されたものだ。水中で波が伝わるように、光がエーテルの中を波として伝わっていく、というのがフレネルの考えていた光についての前提である。他方、マクスウェルは電場と磁場を想定し、光を場の振動と考えていた。このとき、マクスウェルはエーテルの存在を全く前提していない。ウォラルが指摘するのは、全く違う理論間で方程式が変換可能であるということだ。フレネル＝マクスウェル間で方程式が変換可能であるということは、古い理論から新しい理論へと方程式がかたちを変えて保存されているということを示している。ここでは、ある種の構造が保存されていることが示されている。

チャクラヴァティによると、この意味での構造（方程式）は二つの方法で理論変化を乗り越える²⁵。一つは、理論変化には全く影響を受けずにそのままの形で保存されるものだ。これは、フレネル＝マクスウェル間の理論の変化が具体例となる。これらの方程式は互いに完全に変換可能であるため、理論の変化に影響を受けていない。もう一つは、古い方程式がより新しい方程式を制限するという仕方である。こちらは、ニュートン＝アインシュタイン間の運動に関する方程式がその例にあげられる。ニュートン方程式と相対性理論は、速度が光速に比してきわめて小さいとき、ほとんど同じ形となる。このとき、古い方（ニュートン）が新しい方（アインシュタイン）を制限している²⁶。

上述したように、ある種の構造が理論変化を生き延び、新しい理論の中で残ることが示されるならば、構造実在論は悲観的帰納法に耐性を持つ。なぜなら、理論の中で保存される数学的方程式によってあらわされる構造が、その理論の成功と結びついているのであり、その理論が誤りであったのは、それ以外の部分が誤りだったからであるとして、奇跡論法を展開できるからだ。

²³ Chakravartty (1998) pp.395-396

本論文では、以降で取り上げる半実在論の説明をスムーズに行うために Chakravartty (1998) によるウォラルの分析を用いる。

²⁴ フレネルの公式は異なる境界面に光が入射したとき、光の屈折、透過などを導く公式のこと。光は電磁波であるので、マクスウェル方程式は電場の境界条件からフレネルの公式を導くことができる。詳しい変形に関しては省略する。詳しくは江馬 (2010) 4章を参照。

²⁵ Chakravartty (1998) pp.398-399

²⁶ 小野 (1993) pp.395-397 を参照。

3. 「半実在論」(semirealism) とは

対象実在論と構造実在論は、いずれも、悲観的帰納法に抵抗し、奇跡論法を維持するという課題に取り組むものだった。対象実在論は、私たちが操作することができる対象は実在する、と主張する。一方、構造実在論は、理論変化を超えてある種の構造は保存される、と主張する。二つの実在論は、科学におけるどの側面が世界を捉えているのか、ということに関して根本的に相容れない。両者の対立は実在論にとって深刻な問題である。しかも、対象実在論、構造実在論をそれぞれ単独で見たときにも問題がある。

チャクラヴァティは両者の対立を調停し、それぞれの問題を克服した新しい形の実在論として、「半実在論」(semirealism) を提案する。以下では、Chakravartty (2007) pp.27-57、pp.58-85 に沿って議論を進める²⁷。まずは、対象実在論、構造実在論の主張と問題点をそれぞれ確認することから始める。

3.1. 対象実在論 (entity realism) の問題

対象実在論は「介入」という概念を導入することで、理論の記述から独立して、介入に用いられる対象は実在する、と主張する。一方で、これらの対象を記述する理論の内容に関しては懐疑的な態度をとる。選択的な態度をとることで、対象実在論は悲観的帰納法に耐性を持ち、奇跡論法を維持している。

対象実在論は単独で見れば非常にうまくいっているように見える。しかしチャクラヴァティによれば、対象実在論には二つ問題が存在するという²⁸。

3.1.1. 対象実在論の問題①：対象の知識は理論から分離できるか

一つ目は、対象の知識を理論から分離できるか、という問題だ。ハッキングの例が示していたのは、より仮説的な対象の反応を引き出すために用いられることで、別の対象の存在が確かめられるということだった。例えば、素粒子のある種の反応を引き起こすために、電子を使っているとき、その電子は素粒子に比べて疑いないものになる。しかし、電子を使うためには電子に関する様々な理論が必要だ。なぜなら、電子に関する理論に基づいて実験機器が組み立てられ、観測の仕方が設定されなければ、電子を用いた実験は成功しないからだ。このことは、電子を用いて様々な実験や観測を成功させるためには電子がどのようなものかを知らなければならない、ということ私たちに教えてくれる。すなわち、電子が実在するという主張は、電子についての様々な知識——電子に関する種々の理論——と不可分である。

²⁷ チャクラヴァティが最初に半実在論を提案したのは、Chakravartty (1998)であると思われる。その後、Chakravartty (2005)で、因果実在論の新しい見方を提案され、これらの成果を踏まえ、Chakravartty (2007)で本格的に彼の主張が展開されている。

²⁸ Chakravartty (2007) pp.27-33

とすると、もし私たちが対象実在論の主張をとるならば、少なくとも理論のいくつかの側面に関しては実在論者であるべきだ、とチャクラヴァティは指摘する²⁹。

3.1.2. 対象実在論の問題②：異なる理論間で対象が同一であるといえるのか

もう一つの問題は対象の同一性に関わるものだ。例えば、「電子」と呼ばれるものは、様々な時代のいろいろな科学者たちによって扱われてきた。たとえばトムソン(1858-1940)³⁰、ミリカン(1856-1953)³¹、ラザフォード(1871-1937)³²は、いずれも「電子」とされるものを扱っている³³。しかしながら、三者の理論ではそれぞれ異なる仕方で「電子」が特徴づけられている。違った仕方で特徴づけられた「電子」は、本当に同一の対象なのだろうか。様々な理論で同一の対象が指示され続けるとしたら、それはいかにしてか。対象実在論の「介入」だけでは、この問いに答えることはできそうにない。これをチャクラヴァティは、対象実在論は荒すぎる (too crude) と表現する³⁴。彼によれば、この問題に答えるためには、対象実在論は対象の実在だけでなく、その性質や関係についても (部分的には) コミットメントを持たなければならない。

3.2. 構造実在論 (structural realism) の問題

構造実在論は、科学理論によって予測や実験がうまくいくことを、理論が世界の構造を写し取っているからだ、という仕方で説明する。ただし、「世界の構造を写し取る」とはどのようなことかに関して、構造実在論はさらに二つの立場に分かれる。一つは、世界を構成する要素の性質は私たちには知りえないが、性質間の関係 (すなわち構造) は知りうる、と主張する認識的構造実在論 (epistemic structural realism) : ESR である。もう一つは、要素的な物理的对象は存在せず、世界にはその構造だけがまさに存在しており、理論はそれを写し取っているのだと主張する存在論的構造実在論 (ontic structural realism) : OSR だ³⁵。

チャクラヴァティは構造実在論のうち、とりわけウォラルによる ESR を問題とする。チャクラヴァティは二つ問題を指摘する。一つは、ESR の提案する構造では「世界の構造」は写し取れないということ、もう一つは、ESR は実質的には悲観的帰納法に抵抗できていない、ということである。

²⁹ Ibid.,p.32

³⁰ トムソンは陰極線管の実験を行い、電子が極めて小さな質量を有していることを示した。トムソンは、正電荷のスープの中に負電荷の粒子が散らばっているというようなモデル (ブドウパンモデル) を考えていた。

³¹ ミリカンは油滴を用いた実験を行い、電気素量 (単一の電子の電荷量) を測定した。ミリカンの実験によって、電荷が量子化された量であることが示された。

³² ラザフォードは原子の内部構造に関するモデルとして、惑星型モデルを提案した。

³³ とりわけトムソンとラザフォードは電子について全く異なるモデルを提案している。

³⁴ Ibid.,p.32

³⁵ 注 22 を参照。

3.2.1. 認知的構造実在論 (epistemic structural realism) : ESR

ESR は、私たちは観察不可能な対象そのものについては知りえない、私たちが知りうるのはそれらが織り成す構造だけである、と主張する。この主張が実質を持つために、ESR は要素的な対象に言及することなしにそれらが置かれている構造だけを記述できるのでなければならない。ESR はそこで、ラッセルによる構造の同一性定義³⁶とラムジー文³⁷による理論の書き換えを提案する。ラッセルの定義とは次のようなものだ³⁸。

構造の同一性定義

関係 R を有するクラス α と関係 S を有するクラス β が同じ構造を持つ $\Leftrightarrow\alpha$ のどの要素についても何らかの β の要素が対応し、逆も成り立ち、かつ α の二つの要素が関係 R にあるなら、 β におけるその対応物同士も関係 S を持ち、また逆も成り立つ。

ここで重要なのは、クラス α と β において、関係 R と S が互いに質的に類似する必要が無いという点だ³⁹。ラッセルの定義において、同じ構造を有するという事は、要素の関係同士の間に対応があるだけでよい。ラッセルの定義を使うことで、クラス α (たとえば世界を構成する要素のクラス) とクラス β (たとえば方程式を構成する要素のクラス) の構造が同一であることが説明できる。

ラッセルの定義を用いることで構造の同定はできるとしても、まだ要素に言及することなく構造を記述するという課題は残っている。なぜなら、ラッセルの定義では、それぞれのクラスの中にある要素への言及が残っているからだ。ここで役立つのがラムジー文である。ラムジー文は G・マクスウェルによって科学哲学に導入された概念装置だ。ラムジー文によって理論を書き換えることで、対象への言及を欠いたまま構造を提示できる。通常書き方をされた科学理論とそれをラムジー文で書き換えたものを確認しよう⁴⁰。

通常理論 : $\Pi (O_1, \dots, O_m, T_1, \dots, T_n)$

ラムジー文理論 : $\exists t_1 \dots \exists t_n \Pi (O_1, \dots, O_m, t_1, \dots, t_n)$

O_1, \dots, O_m は観察語 T_1, \dots, T_n は理論語であり、これらは一階の述語である。通常理論は形式的には、 O_1, \dots, O_m および T_1, \dots, T_n とそれらに関係づける高階の述語 Π によって構成されていると見なすことができる。これに対して、ラムジー文で書き換えられた理論は、観察語

³⁶ ラッセルの定義自体は科学哲学の文脈で登場したものではなく、認識論的な問題において用いられていたものである。

³⁷ シロスによると、ラムジー自身は理論における明示的定義に関する問題からこのような概念装置が必要だと考えていた。Psillos (2006) pp.68-70

³⁸ Chakravartty (2007), p.36

³⁹ Ibid., p.37

⁴⁰ Ibid., pp.37-38

この書き換えは戸田山 (2013) pp.198-199 や Ladyman (2014) を参考にした。Chakravartty (2007) で具体的な書き換えがなされているわけではない。

O_1, \dots, O_m はそのままであるが、理論語 T_1, \dots, T_n は述語変項 t_1, \dots, t_n に置き換えられたうえで存在量化されている。これはラムジー文で書き換えられた理論においては、理論語による指示がなされていないということに他ならない。したがって、ラムジー文理論は、要素に言及することなくその関係だけを語っていることになる。

以上のように、ラムジー文で科学理論を書き換えることで、ESR は構造だけを述べることができるようになった。しかしながら、ラムジー文で科学理論を書き換える試みには、古典的な批判がある。それはニューマン型の批判と呼ばれるものだ。

3.2.2. ESR の問題①ニューマン型の批判

ニューマン型の批判とは、次のようなものである⁴¹。世界において、特定の理論 T がカバーする全要素の集合 D があるとす。このとき、要素の数が適切でありさえすれば、それだけで D には既に膨大な関係が存在する。というのも、関係は一般に全要素の集合における部分集合の集合として定義され、かつ、集合 D が存在するということは、それだけで、 D のあらゆる部分集合の集合が既に存在するということだからだ（べき集合の公理より）。すると、 T において、その観察語だけを含む帰結がすべて真である限り、 T に対応するラムジー文はかならず真になる。なぜなら、ラムジー文の存在量化を満たすような関係が必ず D に存在しているからだ。こうして、特定の構造的性質を満たす関係の存在は容易に保証されてしまう。ラッセル＝ラムジー型で構造を捉える限り、理論からわかることは、それがカバーする領域の集合としての濃度と観察語による経験的な記述だけになる。これは観察不可能なものについて何も語っていないことになり、ESR はほとんど実在論とは呼べないものになってしまう。

3.2.3. ESR の問題②悲観的帰納法に真に抵抗できるのか

ESR にはニューマン型の批判のほかにも問題がある。それは ESR が真の意味で悲観的帰納法に抵抗できていないのではないかと、ということだ。これは、ESR のみならず構造実在論全般が抱える問題だ。そもそも構造実在論は、事例研究から出発している。すなわち、先述したように、たとえばフレネルの光学とマクスウェルの電磁気学の間で方程式が保存される（相互変換可能である）、ということから悲観的帰納法に抵抗しようとするのが構造実在論の戦略だった。この戦略には、明らかに一つ欠点がある。それは、事例研究をもとにしていて、構造実在論は次の問いに答えることができないということだ——「過去から現在にかけて、理論におけるある構造が保存されたといえるかもしれない。では、現在から未

⁴¹ Chakravartty (2007) pp.37-39

理解のためにこの点に関してはチャクラヴァティの議論にかなりの変更を加えている。なお、ニューマン型と称されるこうした批判は、もともとはラッセルによる構造の同一性定義に向けられたものである。

来にかけてはどのような構造が保存されるのか」。

この問いに答えるために、理論の中で構造として「仕事をしている」(do the work) 部分を分けようと様々な試みがなされてきた⁴²。だがチャクラヴァティは、それらの試みのうちでうまくいっているものはないと結論付けている⁴³。

3.3. 「半実在論」(semirealism) とは

以上に見たように、対象実在論と構造実在論は、いずれも解決しがたい問題を抱えている。チャクラヴァティはこれらの問題を解決すべく、またより洗練された実在論として、「半実在論」(semirealism) を提案する。

3.3.1. 半実在論①因果的介入が構造に質を与える

構造実在論(ESR)の一つ目の問題は、対象に言及することなしで構造を説明しようとする、実在に関する主張としてほとんど意味をなさない、ということだった。このことは、構造を具体的な質を持った形で捉えなおす、すなわち、対象への言及を持った形で構造を記述する、という道が探られねばならないことを示唆している。

チャクラヴァティは、構造を質的なものとして、すなわち具体的構造として捉えなおす。そもそも何かしらの構造を明らかにするということは、その要素を列挙し、それらの関係を記述するということである。これがチャクラヴァティの考える具体的構造だ。すなわち、特定の種類の関係項(relata)とそれら同士の関係が具体的構造なのである。科学的な文脈では、関係項は質量、電荷、体積などの量的な性質である。具体的構造とは、質量や電荷といった量的性質同士の関係だ、ということになる。

具体的構造を導入することで、ニューマン型の批判を免れることができる。このときに力を発揮するのが、対象実在論の持つ介入概念だ。質量にしても体積にしても電荷にしても、私たちの因果的な介入によって知られる性質である。そして具体的構造は、こうした性質同士の相互関係として構成されている。したがって、具体的構造は私たちとの因果的なつながりという質を保持しており、ある集合が与えられるだけで存在してしまうようなものではない。

このように、構造を具体的構造として捉えなおすことで、構造実在論はニューマン型の批判を免れるものとなる。そしてそのとき、構造実在論は上述のとおり、対象実在論から介入という概念を借り受けている。

⁴² チャクラヴァティは Psillos (1999) などを取り上げている。Chakravartty (2007) pp.45-46

⁴³ Ibid., p.46

3.3.2. 半実在論②検出性質と補助性質の区別によって悲観的帰納法に対抗する

二つ目の問題は、悲観的帰納法に対抗することができていないという構造実在論全般が抱える致命的な難点だった。将来に向けてどのような構造が保存されていくのか、という問いに構造実在論単体では答えられない。この難点を解消するために、チャクラヴァティは対象実在論から再び「介入」概念を借りることで、性質に関する区別を導入する。それは、検出性質 (detection property) と補助性質 (auxiliary property) の区別だ。

検出性質は「人が検出することができ、それらは通常の私たちの検出子 (detector) のふるまいと因果的に結びついている」⁴⁴というものだ。先述したフレネル＝マクスウェルの例で言うと、光の入射角、反射角などがこれにあたる。一方、補助性質は「理論によってものに帰属させられる他の推定的な性質」⁴⁵を指す。同様にフレネル＝マクスウェルの例では、光の媒質であるということをはじめとする、エーテルに帰属される諸性質がこれにあたる。

上述のとおり、検出性質と私たちは因果的なつながりを有しており、それゆえ私たちはそれを有する対象の存在を信じる。同時に、検出性質は典型的には方程式で表される。方程式の一つのパラメーターが変化すると、方程式は関数なので、それに伴って他のパラメーターも変化する。これは、方程式によって記述されている構造がそこにあるということにほかならない。つまり検出性質は、方程式によって記述される限り、常になんらかの構造を伴うのである。

検出性質は、方程式として表現される構造のもとで捉えられ、かつ因果的に介入できることによって実在の根拠を有する。一方、補助性質は理論の背景として説明に用いられるだけのものであり、私たちと因果的なつながりを持っていないため、エーテルがそうだったようにおそらく在ると推定されはしても、本格的に在ると認められることはない。

そして、方程式が捉える構造の存在を、検出性質に対する私たちの因果的なつながりによって根拠づけることで、理論改訂を通じて特定の構造だけが保存されていくということに、説明が与えられる。なぜなら、具体的構造は、理論そのものとは別個に性質の検出によって確かめられるからだ。このように、ここでも構造実在論は、対象実在論を取り込むことで強化され、それによって悲観的帰納法に対抗できるようになる。

3.3.3. 半実在論③対象実在論の問題を解決する

対象実在論の抱える問題は、対象の知識を理論から分離できないという問題と、理論変化を通じて指示される対象はたして同一だといえるのかという問題だった。実のところ、構造を具体的構造として捉えなおすことによって、すでにこれらの問題についての解決策は半ば明らかになっている。

⁴⁴ Ibid., p.47

⁴⁵ Ibid., p.47

既に見た通り、対象の検出可能な性質があつてこそ具体的構造は成立する。しかし同時に、後ほど 4.3. で詳しく見る通り、私たちは、ある対象がどのような性質のものであるかを、それが置かれている具体的構造——すなわち、他の対象との関わりの中でその対象がどのようにふるまうか——を通じて知る。つまり、対象について語るということはそれが置かれている構造について述べるということであり、科学的知識において、対象と構造はそもそも不可分なのである⁴⁶。

また、二つ目の問題も構造への着目によって解消される。対象と構造は不可分なので、理論の改訂を通じて構造が保存されるということは、理論の改訂を通じて同じ対象への指示が維持されるということでもあるからだ。

3.4. 二つの実在論の「いいとこどり」

このように、対象実在論から介入概念を借りることで、構造実在論の問題を解消することができ、構造実在論から構造の概念を借りることで、対象実在論の問題を解消することができる。すなわちここでは、二つの実在論の効用がうまくミックスされることで、両者の抱えていた問題が解消されている。このミックスされた立場が、半実在論に他ならない。つまり半実在論は、対象実在論と構造実在論を巧みに統合することで、それぞれの効用を残しながら、同時にそれぞれの問題を解決するという、まさに「いいとこどり」の実在論なのだ。科学的実在論を主張するならば、このような形以外にはありえないと私は考える。

⁴⁶ Ibid., p.59

4. 半実在論の形而上学的な基礎づけについて

チャクラヴァティが提案する半実在論は実在論の決定版とも言えるものだった。彼はその半実在論をより強固なものとするために、実在論内部の問題を解決するにとどまらず、形而上学に関する問題にも取り組んでいる。先述した通り、対象実在論を受け継いでいる半実在論にとって「因果」は非常に重要な概念である。本章では、「因果」観を改訂しようとする彼の提案、すなわち彼流の新たな因果実在論と、その核心をなす傾向性についての見方を取り扱う。

あらかじめ、本章の流れを記しておこう。

4.1.～4.2.では、Chakravartty (2007) Chapter4 に沿って、チャクラヴァティ流の因果実在論を概観する⁴⁷。彼はまず伝統的な因果実在論が直面する三つの問題を指摘する。続いてそれらの問題が、伝統的因果観——因果とは出来事間の関係である——を保ったままでは回避できないということを示す。そこで彼は因果についての見方を変更することを提案する。彼の提案は、因果をプロセスとして考えるということだ。

4.3.では、Chakravartty (2007) Chapter5 を中心に、前半で述べたプロセス因果への基礎づけを素描する。チャクラヴァティは、彼のいわゆる「因果的性質」を中心に置き、それによってもたらされる傾向性がプロセス因果を成り立たせると考えている。彼によれば因果的性質は、それがもたらす傾向性によって同定されるものであるという（傾向性による性質同定テーゼ (dispositional identity thesis) : DIT)。

最後に 4.4.で、チャクラヴァティのこうした形而上学的探求が有する意義について、私の所見を述べる。

4.1. 伝統的な因果実在論：出来事間の関係因果

基本的に因果実在論は、次の二つを満たすものと考えられている⁴⁸。一つは、因果は客観的なものでなければならない、ということだ。これは、因果が観念的なものでなく、世界に属するものでなければならない、ということの意味する⁴⁹。客観的因果には、ヒュームに由来する懐疑が向けられているが、チャクラヴァティはこれを、科学的実在論はそもそも客観的な因果を前提する立場であるとして退ける⁵⁰。もう一つは、因果は原因と結果に関してある種の必然性を備えていなければならない、ということだ。この必然性は、世界における必

⁴⁷ チャクラヴァティの提案が、全ての因果実在論者が納得するものであるかどうかは明らかではない。しかし、彼がここで問題としているのは介入概念を支えるための因果的なつながりであり、その因果的なつながりを整合的な仕方でも説明しよう、というのが彼の目論見である。

⁴⁸ Chakravartty (2007)p.93

⁴⁹ Ibid., p.93

⁵⁰ Ibid., pp.94-95

これは論点先取かもしれない。しかしチャクラヴァティにとって重要なのは、因果的なつながりを保証することで半実在論を確かなものとするところである。それゆえここでの問題は、ありうる因果実在論の形式を検討すること、すなわち、もし因果実在論があるならばどれが最善であるか、ということだ。

然性、すなわち事象様相の必然性 (de re necessity) であるとされる⁵¹。そして伝統的に、この事象様相の必然性は、出来事の間になり立つ関係として理解されてきた。つまり、「出来事間の特定の関係が、因果と呼ばれる客観的な心から独立した事象を構成する」⁵²というのが、伝統的な因果実在論なのである。

さて、この伝統的な因果実在論には三つの問題がある⁵³。

4.1.1. 接触の問題 (the contiguity objection)

最初の問題は、接触 (contiguity) の問題だ。接触の問題は帰謬法を用いて示される。

A が B を他の出来事によって媒介されることなく、直接的に引き起こすためには、A と B が時間的に接触している必要がある。しかし、A と B は接触することはできない。なぜなら時間は密 (dense)⁵⁴ であるからだ。言い換えれば、どの二つの時点の間であっても、A が終わり、B が始まるというときには、その間に常に更なる時点が存在する。それゆえ、継起する出来事が時間的に接触することは不可能である。したがって、A は B を引き起こすことができない⁵⁵。

「スイッチを入れると照明が点く」という例で考えてみよう。このとき、「スイッチを入れる」という出来事と「照明が点く」という出来事は時間的に連続して生じる。だが、この場合、「スイッチを入れる」という出来事と「照明が点く」という出来事の間には、時間的に無限の分割がありうる。したがって、これら二つの出来事の直接的接触は不可能だ、ということになるわけである。

こうした接触の問題には二つの前提がある。一つは、出来事が別の出来事を引き起こすためには、時間的に接触している必要があるということ、もう一つは時間が離散的ではない、ということだ⁵⁶。これらの前提はよく確立されたものであり、抵抗することが難しい。とりわけ後者を放棄した場合、ゼノンのパラドックスを回避できなくなる⁵⁷。

⁵¹ Ibid., p.93

de re necessity とは、ふつう、de dicto necessity と対比される形で取り上げられる必然性のことだ。「独身者は結婚していない」というのは、必然的な関係を表している。このような述べられた関係についての必然性を de dicto necessity と呼ぶ。これに対して、出来事の関係のようなものについて成り立っている必然性を de re necessity という。

⁵² Ibid., p.105

⁵³ Ibid., pp.96-97

⁵⁴ 時間が dense である、というのは時間が離散的でなく、連続的であることを意味する。

⁵⁵ Ibid., p.97

⁵⁶ Ibid., p.97

⁵⁷ Ibid., pp.98-99

ゼノンのパラドックスとは次のようなものだ。例えば、矢が飛んでいるとしよう。この矢は、いつの時点でもその瞬間は止まっている。いつの時点でもその瞬間は止まっているならば、いつも止まっているので、したがって、矢は止まっていて動かない。しかし、実際に矢は飛んでいるのでパラドックスが生じる。時間が連続的でないとする、どのようにして矢が進むのか、を説明することができなくなる。時間に関する前提を捨てると、パラドックスを解消することができなくなる。よって、時間は連続的なものという前提は維持すべきである。

4.1.2. 退行の問題 (the regress objection)

二つ目の問題は、退行 (regress) に関するものだ。この問題は接触の問題が仮に解消されたとしても生じる。退行の問題も帰謬法を用いて示される。原因と目される出来事を A、結果と目される出来事を B としよう。この時明らかに、

A の前半部は残りの部分の原因である以上、B の近接 (直接・非媒介) 的な原因としての役割を果たすことはできない。しかしまた、B の近接原因を含むものとして、A の後半部のどのような時間的部分を考えたとしても、今度はその中の前半と後半について同様の問題が生じる。こうして、B の原因としての役割を果たす近接的な出来事に到達しようとする人は、当初原因と目されていた出来事 A を限りなく切り縮めることができてしまう。そして同種の困難は、A の近接結果である B を同定する際にも生じる⁵⁸。

たとえば、私がフルーツを食べておいしいと思った、という出来事を想定してみよう。このとき、「フルーツを食べる」という出来事と、「おいしいと思う」という出来事があり、伝統的な因果実在論では、前者が後者を引き起こしていると考えられている。だが「フルーツを食べる」という出来事は、口に入れ、舌に触れ、味を感じる、と分割できる。そして、最後の「味を感じる」という出来事も——物理現象としては——さらに分割できる。以下同様に、果てしなく退行は続く。「おいしいと思う」という出来事についても、ことは同様である。このように、出来事は無限に分割できるために、原因となる出来事と結果となる出来事を特定するという事は、実は不可能なのである。

4.1.3. 因果の仕組みの問題 (the demand for causal mechanism)

三つ目の問題は、先の二つとは少し趣が異なっている。そもそも、ある出来事が別の出来事を引き起こすというとき、そこではどのような仕組みが働いているのか。このことを、因果実在論者は明らかにしなければならない。すなわち、原因と結果の必然的なつながりをもたらすものは何であるかを明らかにしなければ、因果実在論は空虚なものになってしまうのである⁵⁹。

4.2. 出来事の関係からプロセスへ

チャクラヴァティは、接触、退行の問題を回避し、また因果のメカニズムが示されるようにするため、因果を独立した出来事間の関係ではなく、連続的なプロセスとみなすことを提案する。そのために彼が導入するのが「傾向性」(disposition)、すなわち様々な事物が有す

⁵⁸ Ibid., p.99

⁵⁹ Ibid., p102

る「かくかくの刺激を与えたとき、しかじかの反応を返す」という特性である。彼はガスを例にプロセス因果を説明している。

熱源と接するガスの体積は、温度や圧力といった性質によってその体積にもたらされた傾向性によって増加する。そしてそうすることで、空間の別な領域と接する。この新しい領域に存在する性質の例化はガスと共同で、どのように両者がさらなる影響を受けるのかを決定するだろう⁶⁰。

つまり、ガスが熱を受けることで体積を増加させ、また別のもの（例えば冷たいもの）と接することでその体積を減少させる、というプロセスを因果として考える、というのがチャクラヴァティの提案だ。ここで重要なのは、あるものが有する性質がそのものに傾向性を与え、その傾向性が特定の仕方でものをふるまわせる、というのがプロセス因果だということである。ものに傾向性をもたらす性質を彼は「因果的性質」と呼ぶ。因果的性質とは、具体的には、質量、電荷、体積、加速度などである⁶¹。

では、三つの問題への対処はどのようになされるのか。まず接触の問題は、二つの出来事同士が完全に接触することは不可能だ、というものだった。プロセスとして因果を考えること、すなわち、切れ目のない変化を因果として考えることで、この問題はそもそも消え失せる。というのも、A と B の間にいかなる瞬間が入り込もうとも、ここでは連綿たる変化の流れそのものが因果的プロセスだからだ。退行の問題についても同様である。すなわち、どの出来事も、またそのいかなる部分も、本来は切れ目のない連綿たる変化のプロセスを任意の切り出したものに過ぎないということなり、どれがどれを引き起こしたかという問いは意味を失う。さらに、因果メカニズムについても実質のある説明を与えることができるようになる。プロセス因果によれば、傾向性は特定の仕方でものをふるまわせるという特性であり、後の 4.3.2.に見る通り、それによって因果に求められる必然性が説明されるのである⁶²。

4.3. 傾向性によって性質を同定する

さて、プロセス因果の要をなしているのは因果的性質だが、これは実際、自然界においてどのように同定されるのだろうか。チャクラヴァティはこの点について、傾向性による性質同定テーゼ (dispositional identity thesis) : DIT を提案する。

4.3.1. 傾向性による因果的性質同定テーゼ (dispositional identity thesis) : DIT

DIT は基本的に、

対象が特定の性質を有するとは、特定の状況において、特定の仕方でものをふるまうようにそれが傾向づけ

⁶⁰ Ibid., p.108

⁶¹ Ibid., pp.41-42

⁶² 以上のプロセス因果による三つの問題の対処は、Chakravartty (2007) pp.102-114 からまとめた。

られているということだ⁶³。

とするものであり、さらに

因果的性質は、他の性質との関係あってこそその性質 (it is in virtue of its relation to other properties) として特定されうる⁶⁴。

因果法則が因果的性質間の関係を構成するというだけでなく、そうした法則を知ることが、性質を区別し、同定するということを可能にする⁶⁵。

とされる。つまり DIT によれば、対象の因果的性質は傾向性をもたらし、その傾向性による対象間の規則的な関係が因果法則であり、その因果法則を捉えることで、私たちは対象にもたらされた傾向性を、そして、それをもたらしている因果的性質を、知ることになるのである。ここには一種の循環があり、有害と思われるかもしれない。しかしチャクラヴァティの狙いはむしろ、性質の同定についての見方を変えることにある⁶⁶。彼によれば、およそ(因果的)性質は、こうした全体論的 (holistic) な仕方でのみとらえられるのである。

だが、どうして DIT を導入すべきだといえるのか。チャクラヴァティはここで、以下に記すような、DIT がもたらす様々なメリットを挙げている。砕けた言い方をすれば、DIT を使うことはお買い得である、という仕方で DIT の正当化を図っているわけだ。

4.3.2. DIT のメリット①因果的必然性に納得のいく説明を与える

チャクラヴァティはまず、DIT をとることで、客観的な因果的必然性、すなわち因果法則が納得のいくものになると述べている⁶⁷。

ここで言う必然性は、「自然的必然性」(natural necessity) と呼ばれるものだ⁶⁸。必然性にはレベルがある。最も強力な必然性は、「形而上学的必然性」(metaphysical necessity) である。形而上学的に必然であるということは「全ての可能世界において成立する」ということであり、例えば論理的・数学的必然性がこれにあたる。これに対して自然的必然性は自然現象の必然性であり、「この世界においては例外なく成立する」ということである。形而上学的な意味では自然的必然性は偶然である。

そして、自然的必然性は DIT から自ずと生じる⁶⁹。そもそも傾向性とは、ものをかくかくのときには必ずしかじかの仕方でするまわせるという性質のことだ。そのため、特定の傾向

⁶³ Ibid., p.122

⁶⁴ Ibid., p.123

⁶⁵ Ibid., p.123

⁶⁶ Ibid., pp.140-141

⁶⁷ Ibid., p.126

⁶⁸ Ibid., pp.129-128

このような必然性は「法則的必然性」(nomic necessity)とも呼ばれている。

⁶⁹ Ibid., pp.129-130

性を有するものは、必ずその傾向性にあった仕方である。DIT に従えば、因果的性質はそのふるまい (傾向性) によって同定されるのだった。したがって、因果的性質間の関係は、かくかくのときには必ずしかじかであるという関係になる。すなわち、因果的性質間の関係はそれ以外ではありえないという仕方で一意的に決定されている。このような性質同士の必然的関係を、私たちは因果的必然性、すなわち因果法則と呼んでいるのである。

4.3.3. DIT のメリット②DTA よりも DIT のほうが優れている

前節で述べたように、DIT は因果法則を納得のいくものにする。この点は、同じように因果法則を納得のいくものにする考え方として提案されている DTA⁷⁰と比べてみるとその利点が際立つ。

DTA とは、チャクラヴァティに言わせれば「自然的必然性は、単に、特定の世界におけるもののふるまいが制約される、という観点で理解することができる、なぜなら、それらはその世界にある性質や関係だけを例化するからだ」⁷¹という主張だ。DTA は普遍実在論をとり、性質を具体的なものによって例化された普遍者 (抽象的対象) と見なしている⁷²。

アームストロングの議論から DTA を見ておこう⁷³。例えば、「F ならば G である」という言明があり、F と G がともに普遍者だとする。この言明が自然法則を述べているとすれば、F が現れたときには、かならず G が生じなければならない。だが「F ならば G である」という言明は F と G の必然性について何も述べていない。彼はそのため F と G の間に必然的な結合を仮定し、N と表す。この N もまた普遍者であり、彼によれば、F と G を結び付ける必然的な結合 N は世界に存するものであり、その存在を要請することはアブダクションによって正当化されるという。

チャクラヴァティはルイスの考察を借りて、この普遍者 N に関する問題を指摘する⁷⁴。

[アームストロングは、「必然化」という語を、法則をかたちづくる普遍者 N の名として用いている。たしかに、もし F が G を「必然化」し、かつ a が F を有するなら a は必ず G を持つと聞いて、いったい誰が驚くだろう [誰も変だとは思うまい...訳者挿入]。しかし私に言わせれば、N が「必然化」の名に値するのは、なんらかの仕方、それが実際に、ここで求められている必然的結合に携わっている場合だけだ。ある名を与えられるだけで、それに携わることができるわけではない。それはちょうど、「アームストロング」と呼ばれるだけで強い上腕二頭筋をもつことができるわけではないのと同じ

⁷⁰ F・ドレッツキ、M・トーリー、D・M・アームストロングの頭文字をとってこのように呼ばれる。三人はそれぞれ独立に、またほぼ同じころにこの理論を主張した。

⁷¹ Ibid., p.128

⁷² ここで一つ注意しておくことがある。半実在論はそもそも抽象的な対象にはコミットしてない。したがって DTA は半実在論をとるならば初めから退けられるわけだが、DIT の利点を述べるために、ここではあえて DTA と DIT の比較がなされている。

⁷³ Armstrong 1983, p. 85. アームストロングの議論に関しては植田 (2018) pp.11-12 の説明を参照した。

⁷⁴ Chakravartty (2007) pp.129-130 より孫引き。

ことだ⁷⁵。

チャクラヴァティによれば、こうした DTA に対して、DIT は因果法則についての実質的な説明を与えることができるので、DTA よりも優れている。

4.3.4. DIT のメリット③対象に関する知識と構造に関する知識の統合に寄与する⁷⁶

DIT は科学的知識の統合にも役立つ。科学的知識は、おおむね対象に関する知識と、構造に関する知識に分けられる。科学的実践において用いられる対象は、その性質がもたらすふるまいによって特定される。つまり、傾向性によって特定される。そして傾向性とは、他の傾向性とのかかわりの中で発現するものだった。そのため、対象が有する性質は構造と密接に関連する。つまり、対象は性質を仲介して構造と結びついている。このことをチャクラヴァティは、比喩的に「構造は対象の性質にコード化されている」⁷⁷と表現している。このように DIT によって、対象に関する知識と構造に関する知識が統合される⁷⁸。

4.3.5. DIT のメリット④矛盾したモデルについて説明を与えるために役立つ⁷⁹

科学的実践では、特定の対象について一見すると矛盾したモデルがあてがわれることがある。例えば水は、流体として流れるとき、連続的な非圧縮性の媒体と見なされる。一方で、化合物が水中で溶けるときは、熱運動中の離散的な粒子の集合というモデルが水にあてがわれる。だが、連続的であると同時に、離散的であるという状態はありえない。このことは科学的实在論にとって深刻な問題である。というのも、科学的实在論は観察不可能な対象の实在についてコミットしているのだが、観察可能な水についてすら、矛盾した説明しか与えられないとすると、観察不可能な対象についてはより絶望的なものになるからだ。

チャクラヴァティは、ここで役立つのがまさに DIT であると主張する。傾向性は、様々な状況に応じて発現する。すなわち、水が流れるときは連続的な媒体として、また物を溶かすときは離散的な粒子として、それぞれ水をふるまわせるのが水の傾向性である。DIT はふるまいによって性質を同定するので、それぞれの場合に分けて性質を同定することができる。このような仕方では、科学的実践における一見すると矛盾したモデルを両立させることができる。

⁷⁵ Ibid., p.129

⁷⁶ Chakravartty (2013a) pp.114-118

⁷⁷ Ibid., p.118

⁷⁸ このことは前章までで述べた半实在論の説明と重なる部分がある。この点から私が指摘したいのは、科学的实在論から始まる考察と因果实在論から始まる考察が、同じところに到達しているということである。つまり、別々な方向から進んできたものが同じ終点にたどり着いているということだ。

⁷⁹ Ibid., pp.122-126

4.3.6. DIT のメリット⑤CTP より優れている⁸⁰

チャクラヴァティはさらに、性質の同定の仕方として、定言主義的理論 (categoricalist theory of properties) : CTP と比べて、DIT のほうが優れていると主張する。CTP は、性質がそれら自体の有する本性によって同定される、という主張だ。彼によれば、CTP には二つ問題がある。

一つは、「それら自体の本性」は非常に神秘的な概念であるということだ。このような概念について、私たちは実質的に何も言うことができない。そのため、こうした概念を用いることは避けるに越したことはない。もう一つは、かりに「それら自体の本性」について実質的に語る事ができたとしても生じる。すなわち彼によれば、「性質がそれら自体の本性によって同定される」として、それら自体の本性がそれを有するもののふるまいと独立であるならば、その性質をその性質になすものは、因果プロセスに加わることができない⁸¹。

DIT ではそのような問題はそもそも生じない。DIT は性質をそのふるまいによって同定するため、根本的に神秘的なものに訴えることなく、性質を同定することができる。またそもそも因果プロセスは傾向性によるものであるため、因果プロセスに関する問題は初めから生じない。そのため、DIT の方が CTP よりも優れている。

4.4. チャクラヴァティの形而上学の意義

以上に見たようにチャクラヴァティの展開する因果实在論と DIT による説明は、様々な点で有益であり、採用に値するものと思われる。上に列挙した多くのメリットの中で、最も有益であると私が考えるのは、科学的モデルに整合的な説明を与えるというものだ。そもそも、科学的モデルを十分に解釈できない实在論は、「科学的」实在論として不適格であろう。DIT は一見すると矛盾したモデルを整合的に解釈できるようにしており、この点においてまさに適格であるといえる。

さらに、プロセス因果においては、伝統的な因果实在論へ向けられた批判が該当しないことに加え、具体的な科学的実践をもとにした説明が行われており、その意味でも「科学的」であるといえる。彼の展開する形而上学は、こうした仕方、科学を中心に据えた存在論に整合的な説明を与えており、その点で非常に有益なものであると私は考える。

⁸⁰ Chakravartty (2007)., p.120-121

⁸¹ Ibid., pp.120-121

5. シロスの批判に答える

これまで見てきたように、半実在論は実在論の決定版とも呼べる立場であり、またその形而上学的な基礎づけは、科学を中心に据えた存在論に整合的な説明を与えることに寄与している。しかしながら、半実在論の形而上学には特に厳しい批判が向けられている。ここでは代表的なものとして、S・シロスによる批判を検討したい。彼は二つの問題を指摘する。一つはDITによる性質の同定に関する問題、もう一つは、チャクラヴァティにおけるいわゆる二重基準に関する問題である。

5.1. 全体論的な性質は同定できない

4.3.1.に見たとおり、DITによれば、(因果的)性質は、傾向性を介した他の性質との関係を通じて全体論的に同定される。しかしそもそも、全ての性質の同定がそのようになされねばならないとしたら、循環に陥って、性質の同定を始めることができなくなってしまうのではないだろうか⁸²。

チャクラヴァティとしては、性質と私たちの知覚との関わりに訴えることで、この循環は避けられると考えているようだ⁸³。ふつう、一定の温度があるということや一定の圧力があるということは、それぞれを計測する機器の状態を確認することによって、すなわち、私たちの知覚によって確かめられる。性質が循環的に同定されるということと、その性質が実際に認知されるということは区別できるというわけだ。

しかしシロスによれば、こういう仕方では問題を回避できない⁸⁴。というのも、性質を計器で測定できると認めたとしても問題があるからだ。シロスはその点を次のように述べる。例えば、計器にある反応が生じたとする。計器にその反応をもたらした性質は、たしかに私たちの知覚的状態と因果的に結びついている。だが、それがなぜ(例えば)質量であるといえるのか。質量という性質があらかじめ知られていない限り、計器の反応に関する特定の知覚的状態と質量を結び付けることはできないのではないか。つまりところやはり、独立的に性質が知られない限り、性質を同定することができないのではないか。

5.2. 二重基準の問題

かつて、光の伝播があるからには媒質があるはずだと推定され、それが「エーテル」と呼ばれていた。一方チャクラヴァティは、傾向性(およびそれに基づくものとしての因果的必然性など)に訴えればさまざまなことに説明がつくという理由で、傾向性の存在を認めるべきだと主張する。いずれにおいても、用いられているのは、アブダクションによって何かの

⁸² Psillos (2013) p.31

⁸³ Chakravartty (2007) pp.136-137

⁸⁴ Psillos (2013) p.32

存在を要請するというやり方だ。チャクラヴァティの区別を使って言えば、エーテルは補助性質から検出性質へと昇格できず、ついに在るとは認められなかった、ということになるだろう。これに対して、傾向性が検出性質に昇格する見込みは、その定義からしておそらく無い。3.3.2に見たとおり、検出できない限り本当に在るとは認めないというのが彼の方針なのだから、少なくとも単純に考えると、エーテルがそうであったように、傾向性（や因果的必然性）も在ると認められてはならないはずだ。そこでシロスは次のように指摘する。

検出不可能な対象が、説明的な役割を務めるということに基づいて〔存在すると認めることに関して...訳者挿入〕よしとされるのなら、半実在論の支持者は、自分たちがエーテルについては賛同せず因果的必然性のようなことについては賛同するわけを、私たちに説明しなければならない⁸⁵。

検出できないものの中でも傾向性（や、それに基づく因果的必然性）は別格なのだというのなら、そうした二重基準を許容すべき理由が示されねばならない、というわけである。

5.3. 傾向性本質主義の導入

さて、どうすれば半実在論はこうしたシロスの批判を免れることができるだろうか。おそらく、ある性質の同定に必要な他の性質が限られている場合は、関わりあう性質が一挙に同定されると考えられるので、第一の批判は該当しないだろう。そして、アブダクションを用いずに傾向性を導入することができれば、二重基準の状態を脱するわけではないものの、第二の批判を回避できるはずである。

そこで、まずは第二の批判への対策として私が提案したいのは、半実在論に傾向性本質主義 (Dispositional Essentialism) を組み込むという戦略である。

傾向性はふつう、何らかの定言的性質をその実現基盤として持つ。すなわち、事物はふつう、そうした定言的性質に加えて傾向性をもつわけではない。そのため、傾向性はせいぜい便宜上「存在する」と認めうるものにすぎないとする論者もいる⁸⁶。これに対して B・エリスは、最も基礎的な物理的な対象である素粒子のレベルにおいては、傾向性がものの本質をなしていると主張する⁸⁷。これが傾向性本質主義である。

エリスは電子を例にあげ、次のように説明する⁸⁸。電子はその因果的な力能 (causal power) など⁸⁹によって同定される。すなわち、「ある粒子が電子であるのは、それがまさに電子がなすようなふるまいをするように傾向づけられているとき、かつそのときに限られる」⁹⁰。これ

⁸⁵ Ibid., p.33

⁸⁶ 例えば、Prior, E; Pargetter, R; Jackson, F (1982) などこの点が指摘されている。

⁸⁷ Ellis and Lierse (1994) pp.27-45

エリスとリールセによって提案されたものだが、便宜上、単に「エリス」と記す。また以降のエリスの議論は植田 (2018) pp.5-8 を参考にしている。

⁸⁸ Ellis and Lierse (1994)., pp.32-33

⁸⁹ ほかに能力 (capacities)、性向 (propensities) などを挙げているがこれらは傾向性 (disposition) とひとまとめにできる。

⁹⁰ Ibid., p.33

が、傾向性がものの本質をなすという事態である。電子は素粒子の一種であり、このような電子の傾向性がさらに基礎的な性質に依存しているとは考えづらい。なぜなら、定義上、最も基礎的な物理的対象が内部構造をもつことはなく、それゆえ、その傾向性がさらなる定言的性質に支えられているということはないからだ。このように、最も基礎的な物理的対象のもつ傾向性——「最も基礎的な傾向性」と呼ばれる——は、端的にそれ自体で存在するといわざるをえない。

5.4. シロスの批判に応える

さて、こうした最も基礎的な傾向性の存在に訴えることで、まずはシロスの第二の批判にある程度まで応えることができると思われる。

先に見たとおり、チャクラヴァティは傾向性とエーテルでその存在を認める際の基準を変えている。ただしシロスは、こうした二重基準そのものを咎めているわけではない。5.2の引用にもあるとおり、彼は、二重基準を採るならそれを納得のいくものにする理由が提示されるべきだとしている。チャクラヴァティのまずい点は、傾向性（やそれにもとづく因果的必然性）を導入する際に、エーテルが導入された際と同様のアブダクションしか行っていないということだ。これでは、エーテルなどの補助性質に対して傾向性を別格扱いすることはできない。それに対して、エリスの言うように最も基礎的な傾向性はそれ自体であるとしか考えられないとすれば、チャクラヴァティとしてはその導入に際して、アブダクションに訴える必要は無い。そして、この点において、エーテルの場合とは一線を画しているといえる。加えて言えば、最も基礎的な傾向性が存在するということは、いわば、物理現象の最も基礎的なレベルにおいて対象がある仕方であるという事実そのものであるという点においても、エーテルの場合とは異なるといえるだろう。したがって、二重基準の状態を脱するわけではないが、傾向性を少なくともエリスのいう最も基礎的な傾向性に限定するならば、エーテルなどに対してそれを別格のものとすることは正当化できると思われる。さらに、より高次の傾向性についても、最も基礎的な傾向性から派生しているといえる範囲にあれば、同様の正当化が可能だろう。

さて、では一つ目の批判にはどう応じることができるだろうか。シロスが指摘するのは、チャクラヴァティの全体論的性質観のもとでは、質量であれ温度であれ、何らかの（因果的）性質は、それがもたらす傾向性を通じて関係し合う他の性質が全て知られなければ、その同定を完遂できないはずである、ということだった。

これに対しては、次のような反論が試みられるかもしれない。すなわち、たとえば質量の何たるかが、他の性質とどう関わりあうかを通じて完全に分かること——全体論的な同定が完遂されること——と、質量をその典型的なふるまいによって他の性質から区別することは別であり、理想としては前者が求められるとしても、事実上は後者でこと足りるのではないかと。しかし、一見もつともではあるが、このように反論したとしてもシロスの批判をか

わすことはできないだろう。なぜなら、一般的に言って、ある性質が他の性質からそのふるまいによって区別されたとしても、前者がある範囲で同等のふるまいを示す複数の性質であったことが後に判明するという可能性は、排除できないからだ。

こうしてみると、性質の同定に関するこの問題は、如何ともし難いものと思われるかもしれない。だが、解決不可能ではないと私は考える。解決の糸口を示唆しているのは、ここでもエリスの言う「最も基礎的な傾向性」である。例えば素粒子の一種であるグルーオンは、原子核内で陽子と電子を結び付けるという傾向性、すなわち、いわゆる「強い力」を本質的に有する。こうしたグルーオンの強い力は、陽子および電子との関わりにおいて発揮されるものである。したがって、全体論的性質観のもとでは、強い力をもたらすグルーオンの因果的性質——おそらくそれは「グルーオン性」としか言いようがない——は、たしかシロスの言うとおり、に陽子の陽子性や電子の電子性が余すところなく知られないかぎり、同定できたことにはならない。しかしまた見てのとおり、こうした最も基礎的な傾向性をもたらす因果的性質に関しては、それを同定するために必要な他の性質がごく限られている（グルーオン性については、まさに陽子の陽子性と電子の電子性のみ）。全体論的性質観のもとでも、性質の同定は、そのために知られるべき他の性質がこのようにごく限られていれば、けっして不可能ではないはずである。もっとも、このことを、質量や体積のような、より高次の因果的性質の同定へとどのように繋いでいけるかは、残念ながら現時点では定かではない。

ともあれ、以上のようにシロスの批判のうち一つは少なくとも部分的に退けることができ、もう一つについても問題解決の糸口を見つけることはできたのではないと思われる。最後に、以上を踏まえて半実在論の再定式化を試みたい。

半実在論の再定式化

半実在論は私たちと因果的につながりを有する対象によって構成されている具体的な構造について、その実在を主張する。

その因果的なつながりは、傾向性によって同定される因果的性質によって保証される。

そうした傾向性は、少なくとも最も基礎的な物理的レベルにおいては余すところなく特定されうる。

前述の通り、シロスの批判を退けるという課題を達成するに至っていないものの、半実在論の可能性は、このように最も基礎的な傾向性に着目し、傾向性本質主義を組みこむ方向に開けているものと私は考える。

おわりに

本論文では、実在論および半実在論の望ましさについての私の所見と、半実在論の登場に至る論争の経緯を述べたうえで、(第1章、第2章)、半実在論が実在論の完成形と見られること、そして科学を中心に据えた統合的な存在論を与えようとするものであることを、その高く評価すべき点として指摘した(第3章、第4章)。さらに、最も基礎的な傾向性への着目と傾向性本質主義の導入によって、シロスによる半実在論批判に応えることを試みた(第5章)。

だが依然としていくつかの課題は残っている。まずシロスによる二重基準にまつわる批判への対応については、あくまでも「傾向性本質主義が正しいならば」という条件付きのものであることを認めねばならないし、これに対して完全な解決を与えているわけでもない。さらに、性質の同定に関する批判については、問題解決の糸口を述べるにとどまっている。そのため、本論文で完全に半実在論を擁護することができたとは言えない。しかしながら、第5章において私が提案した試みは、半実在論をより確固たるものにしてゆくための一つの戦略を示唆してはいるものと思われる。

文献目録

- Armstrong, D. M. (1983) *What is a Law of Nature?*, Cambridge University Press.
- Boaz, M. (2016). 'What is Hacking's argument for entity realism?'. *Synthese*, 193(3), pp.991-1006.
- Chakravartty, A. (1998). 'Semirealism'. *Studies in History and Philosophy of Science*, 29, pp.391-408.
- Chakravartty, A. (2005). 'Causal Realism: Events and Processes'. *Erkenntnis*, 63, pp.7-31.
- Chakravartty, A. (2007). *A Metaphysics for Scientific Realism: Knowing the Unobservable*. Cambridge University Press.
- Chakravartty, A. (2013a). 'Dispositions for Scientific Realism'. In R. Groff, & J. Greco (Eds.), *Powers and Capacities in Philosophy: The New Aristotelianism* (pp. 113-127). Routledge.
- Chakravartty, A. (2013b). 'Realism in the Desert and in the Jungle: Reply to French, Ghins, and Psillos'. *Erkenntnis*, 78, pp.39-58.
- Chakravartty, A. (2017). 'Saving the Scientific Phenomena: What Powers Can and Cannot Do'. In J. Jacobs (Ed.), *CAUSAL POWERS* (pp. 24-37). Oxford University Press.
- Chakravartty, A. and Bas C. van Fraassen. (2018). 'What is Scientific Realism?'. *Spontaneous Generations: A Journal for the History and Philosophy of Science*, 9, pp.12-25.
- Chakravartty, A. (2017). 'Scientific Realism'. 参照日: 2018年12月22日, 参照先: The Stanford Encyclopedia of Philosophy: <https://plato.stanford.edu/entries/scientific-realism/>
- Ellis, B.; Lierse, C. (1994). 'Dispositional Essentialism'. *Australian Journal of Philosophy*, 72, pp.27-45.
- French, S. (2013). 'Semi-realism, Sociability and Structure'. *Erkenntnis*, 78(1), pp.1-18.
- Hacking, I. (1983). *Representing and Intervening*. Cambridge University Press. (『表現と介入』、渡辺博訳、ちくま学芸文庫、2015年)
- Ladyman, J. (2014). 'Structural Realism'. Retrieved 12 22, 2018, from The Stanford Encyclopedia of Philosophy: <https://plato.stanford.edu/archives/win2016/entries/structural-realism/>
- Laudan, L. (1981). 'A Confutation of Convergent Realism'. *Philosophy of Science*, 48, pp.19-48.
- Okasha, S. (2002). *Philosophy of Science : A Very Short Introduction*. Oxford University Press. (『科学哲学』、廣瀬覚訳、岩波書店、2008年)

- Prior, E; Pargetter, R; Jackson, F;. (1982). 'Three theses about dispositions'. *American Philosophical Quarterly*, 19(3), pp.251-257.(エリザベス・W・プライア、ロバート・パーゲッター、フランク・ジャクソン「傾向性についての三つのテーゼ」『現代形而上学論文集』、柏端達也他訳、勁草書房、2006年)
- Psillos, S. (1999). *Scientific Realism: How Science Tracks Truth*. Routledge.
- Psillos, S. (2006). 'Ramsey's Ramsey-sentences'. (M. C. Galavotti, Ed.) *Cambridge and Vienna: Frank P Ramsey and the Vienna Circle* (Vienna Circle Institute Yearbook 12), pp.67-90.
- Psillos, S. (2013). 'Semirealism or Neo-Aristotelianism?'. *Erkenntnis*, 78(1), pp.29-38.
- Putnam, H. (1975). *Mathematics, Matter and Method*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 伊勢田哲治. (2005). 「科学的事実論はどこに向かうのか」. 『Nagoya Journal of Philosophy』, 4, 35-50. 参照日: 2018年12月22日, 参照先: http://tiseda.sakura.ne.jp/index_japanese.html
- 植田拳太. (2018). 「自然法則と傾向性--傾向性本質主義を擁護する--」. 『人文科学研究』(14), pp.2-43.
- 宇都宮敏男, 高橋寛, 和泉勲. (2003). 『電気基礎 (上)』. コロナ社.
- 戸田山和久. (2002). 『知識の哲学』(哲学教科書シリーズ). 産業図書.
- 戸田山和久. (2005). 『科学哲学の冒険 サイエンスの目的と方法をさぐる』. NHK出版.
- 戸田山和久. (2015). 『科学的事実論を擁護する』. 名古屋大学出版会.
- 江馬一弘. (2010). 『光物理学の基礎』. 朝倉書店.
- 小野周監修. (1993). 『現代物理学小事典』. 講談社.
- 野内玲. (2008). 「科学的事実論の論争と最良の説明への推論」. 『哲学の探求』, 第35号, pp.81-85.
- 野内玲. (2009). 「存在的構造的事実論の妥当性」. 『科学基礎論研究』, 第37号(1), pp.9-18.

平成 30 年度 修士論文

羅洪先の思想変遷について

信州大学大学院人文科学研究科地域文化専攻

17LA002G LIU XINYI

目次

1.はじめに.....	43
1.1 研究動機.....	43
1.2 先行研究.....	44
2.「現成」思想に対する羅洪先の受容状況.....	47
2.1 考察の意義.....	47
2.2 「現成」思想の受容状況.....	49
2.2.1 早期（25歳～36歳）——王畿との出会いから「冬遊記」まで.....	49
2.2.2 中期（36歳～47歳）——「現成説」への疑いと批判.....	52
2.2.3 晩期（47歳以後）——「未発・已発」に関する争論.....	55
3.羅洪先主静思想の展開.....	58
3.1 考察の意義.....	58
3.2.1 早期（23歳～32歳）——「主静思想」に関する初歩的な受容.....	59
3.2.2 中期（32歳～50歳）——「静坐」の実践と「主静」の挫折.....	60
3.2.3 晩期（51歳以後）——動静貫通の「収摂保聚」.....	69
4.「収摂保聚」の内実.....	71
5. 総括.....	74
引用文献.....	75
参考文献.....	75

1.はじめに

1.1 研究動機

羅洪先（1504年-1564年）は、明代江西地域の有名な思想家であり、聶双江と共に「帰寂派」⁹¹として扱われてきた。羅洪先の弟子の胡直によって、彼の学問と文章は三度変わったと言われる⁹²。このように彼の一生で、その思想は何回も形を変えていたが、この思想は独創性があるかどうかについて、研究者の意見が異なっている。⁹³私は、彼の思想を解釈するだけでなく、そこにたどり着くまでの「思想変遷」にも重点を置いて分析を行う。

その理由は三つである。一つには、羅洪先の思想変遷を理解すれば、彼の思想を全体的に把握できるからである。二つには、当時の陽明学者が、非常に活発に学問交流をし、講学を通じて自分の学問を作っていたからである。これは、明中晩期陽明学の一つの特徴だと考えられる。羅洪先の思想も、陽明門下の交流を通して形成されていったものであった。三つには、明代思想史理解のためである。表面的に見れば、羅洪先の思想変遷は、「主静思想」に戻っていく過程であり、「帰寂説」は、多くの研究者によって「逆流」「後退」と見なされてきた⁹⁴。どうして羅洪先は、時代の「逆流」を選択したのか。また、羅洪先の「主静思想」はほんとうに「逆流」であるのか。また、もしこの考え方が正しいければ、なぜ後世の思想家や研究者たちは、羅洪先の思想を高く評価したのか。羅洪先の思想変遷を究明すれば、「主静思想」の魅力も分かるかもしれない。

⁹¹ 陽明の門人の思想について、岡田武彦氏は「陽明の高弟、王竜谿のいうところによれば、当時すでに帰寂・修証・已発・現成・体用・終始の六つの良知説があったようであるが、（王竜谿全集一、撫州擬硯台会語）大別すれば現成・帰寂・修証の三説になるであろう。」と述べる。その中、帰寂派の思想について、岡田氏は、「陽明のいう良知には虚寂の体と感発の用との別があり、陽明がわが致良知は、根本を培養して生意を枝葉に達すること、すなわち立体達用が陽明の致良知の本旨であるとし、これによって始めて程子のいわゆる体用一源、顕微無間の主旨にも契合することができると考えた。」と捉えた。岡田（2004）p. 162

⁹² 羅洪先の学問は、彼の門人胡直によれば、三つの段階がある。第一段階は、当時の良知説に迷っていて、自分の学説がまだ確立していない段階である。「乃ち気機を良知の流行とした。先生は当初この思想に迷い込んでいた。」（其次則或認識解氣機爲良知之流行。先生始嘗惑之。）第二段階は、主静無欲について良知を實踐する段階である。「ゆえに壮年以後、その学説が一に無欲を主とするものとなり、主静歸寂に関して数千言もの問答を行ったが、その宗旨は「無欲」の範囲を出なかった。」（故既壯之後、其學一主無欲、所舉主静歸寂、辨答數千言、要皆不踰其旨。）第三段階は、自分の学説を完成する段階である。「真剣に二十年以上（自分の学説を）実践したら、廓然大悟の状態になった。完全に（良知説を）理解し、（自分の良知説について）迷わず自信をもつようになった。」（力踐之二十餘年、然後廓然大悟、沛然真得、始自信於不惑之地。）（『羅洪先集』p. 1406「念庵羅先生文集序」）

⁹³ たとえば、張衛紅氏は聶豹と羅洪先の思想を評価するときに、「自成一格」という言葉を使う。私は、この言葉から、張氏が羅洪先の思想に独創性を認めていると推測した。張（2009）p. 530を参考。

⁹⁴ 「帰寂派がこのような劇しい論難を受けたのも、要はその説が動に立脚した明学（王学）の展開する方向に逆流するものであったからであろう。」岡田（2004）p. 38 また、荒木見悟氏も1984年出版される「羅念菴の思想」『陽明学の展開と仏教』一文で、「個人と社会、現実と理想との対決観稀薄な帰寂思想は、結局歴史の構造をあるがままに容認することに終わらざるを得ぬのではないか。そこに陽明学の後退は発生し、いわゆる帰寂派が時流に先かけ得なかった原因があるのではないかと思われる」と評価する。あとの文章では、「聶双江における陽明学の後退」（『陽明学の展開と仏教』所収）を荒木見悟（1984a）と表記する。同じ本に収められている「羅念菴の思想」（初出：哲学年報 / 九州大学大学院人文科学研究院 編（通号 33）1974.03.00 pp. 1~34）を荒木見悟（1984b）と表記する

1.2 先行研究

今までの先行研究において、羅洪先の思想変遷を描いたものが多いであり、学者たちはそれぞれの意見を持っている。次に、表を作って、代表的な先行研究を紹介する。

学者／分類	福田殖 ⁹⁵	呉震 ⁹⁶	張衛紅 ⁹⁷
第一期	<p>初期思想は、23歳（嘉靖5年、1526年）～40歳（嘉靖15年、1543年）の間である。</p> <p>理由： ①この時期、彼は、李中に師事して、濂洛（周濂溪と二程）の学の影響を受けた。 ②王龍溪の現成良知説と鄒守益の良知修正説の影響を受けた。</p>	<p>最初は、「思想」がまだ形成されない段階である。すなわち、李中を師事して10年になるまでである。時間は、23歳（嘉靖5年、1526年）から33歳（嘉靖15年、1536年）までである。</p> <p>理由：羅洪先の弟子である胡廬山は「盖先生自丁酉（嘉靖16年、1537年）后、凡数悟」と言い、双江も念菴の「早年の学」について「このような学問が十年間に続けている。」（p.184）また、聶豹は、羅洪先が楊簡の影</p>	<p>羅洪先思想の第一の段階は、少年時代から、科挙の時（嘉靖8年、1529年、羅洪先25歳）に陽明学者たちに会う時期までである。すなわち、ふるさとにいた間である。</p> <p>理由：上京するまえに、羅洪先の先生である李中（谷平）は、彼の学術に影響を与えた。特に李中が提唱している濂洛の学は、羅洪先にとって大切な学問である。</p>

⁹⁵ 福田（1973）p. 350

⁹⁶ 呉（2001）『聶豹・羅洪先評伝』に基づいてまとめる。

⁹⁷ 張（2009）『羅念菴的生命歷程与思想世界』に基づいてまとめる。

		響を受け入れたと指摘した。 (p.189)	
第二期	中期は、40 歳（嘉靖 22 年 1543 年）から、52 歳（嘉靖 34 年、1555 年）までである。 理由：①この時期、前期に受け入れた影響を徐々に脱却し、聶豹の帰寂説に服していく。	1537(嘉靖 16 年 34 歳) 年から、彼は、徐々に「主静思想」に偏っていった。早期思想は、16 世紀 30 年代末から、40 年代の初期までである。これは彼の早期思想である。 根拠：①「主静無欲」を提出する具体的な時間はわからないが、1537 年から、徐々に「主静無欲」を提唱するようになる。 ⁹⁸ ②1537 年、羅洪先は聶豹に出会った。そのあと書いた書簡において彼が双江の影響をうけていたことは明白である。	彼は、陽明学者と出会った（嘉靖 8 年、1529 年、25 歳）のちに、徐々に現成良知説に服する。これは第二段階である。 理由：①この時、官職につくことと、遊学は、人生の主なテーマである ⁹⁹ 。 ②この時、彼は龍溪の現成説に心服した。
第三期	後期は、52 歳（嘉靖 34 年、1555 年）から 61 歳（嘉靖 43 年、	中期は、1548 年（嘉靖 27 年、羅洪先 44 歳）から 1553 年（嘉靖 32	1541 年（嘉靖 20 年、38 歳）、から、彼は「主静」思想を主張するよ

⁹⁸ 呉 (2001) P.193

⁹⁹ 張 (2009) p.64

	1564年、最終)までである。 根拠：①この時期に、彼は、帰寂説における偏静の部分を取り除き、寂感動静合一を主張していた。②知止。	年、羅洪先 50歳) である。代表作は、「夏遊記」である。 理由：「夏遊記」における彼は完全に双江の帰寂思想を受け入れた。 ¹⁰⁰	うになった。1541年(嘉靖20年、38歳)～1553(嘉靖32年、50歳)年は、彼の思想の第三段階である。 根拠:彼は現成良知から無欲主静へと立場を変えた。 101
第四期		晩期思想は、1554(嘉靖33年、51歳)年から最期までである。代表作は、「甲寅夏遊記」(嘉靖33年、1554年)と「松原志晤」(嘉靖41年、1562年)である。 理由：①「甲寅夏遊記」において、彼の主静収斂の思想が成熟した。 ¹⁰² ②寂感問題について、「寂感合一」を主張している。 ③「万物一体論」への理解が一層深くなった。	1554年(嘉靖33年、51歳)から、最後まで、彼の思想の第四段階。 1554年、すなわち、「甲寅夏遊記」を作成する年から最後までの間は、彼の晩期思想である。 理由：①双江(聶豹)の思想を超えて、自分の学説が成熟した。②楚山静坐の後、万物一体の仁を悟った。

三者の分け方を比較すると、晩期思想に関して、三者の理解はだいたい同じであると分か

¹⁰⁰ 呉 (2001) p.203

¹⁰¹ 張 (2009) p.103

¹⁰² 呉 (2001) p.217

る。だが、羅洪先がいつ「主静無欲」に転向しようとしたのかという点については、三者の分類がやや異なる。呉氏は、1537年と主張し、張氏は、1541年と主張し、福田氏は、1543年と主張した。私は張氏の考え方のほうが最も妥当であると考えている（でも私の論文で羅洪先の少年時代を討論しない）。理由はあとで述べる。

注意すべき点は、羅洪先が、単なる哲学原理を考えた思想家ではなく、実践における「体悟」をととても大切にしていた人物ということである。羅洪先の一生を見れば、彼が繰り返し、ある問題に悩んでいて、いろいろな解決方法を探している様子がしばしば見られる。たとえば「冬遊記」という文章で、彼は「現成」と「主静」の間をさ迷っていた。いつ「現成」から「主静」へ転向しようとしたか、具体的な時間を確定することは難しい。ただ、私は、転向の時点より転向の理由により多くの意義があると考えられる。そこで、羅洪先は、どのような刺激を受けて、何のために転向したのかという点について明らかにしていきたい。

その「転向」を考察すれば、羅洪先の陽明学観も理解できる。この点は、羅洪先思想評価にたいして、とても大切な問題と考える「主静」思想の代表人物としての羅洪先は、ちゃんと陽明の思想を継承したのか。陽明思想に背いたのか。これは、古来ずっと議論しているテーマである。たとえば耿天台から見れば、「夏遊記」「甲寅夏遊記」より「冬遊記」への評価が高い。¹⁰³黄宗羲も、羅洪先は王陽明の真伝を受け入れたと評価した。現代の学者たちも、それぞれ様々な意見を持っている。次に、羅洪先思想の変遷状況を検討する上に、羅洪先の思想を評価するつもりである。

2. 「現成」思想に対する羅洪先の受容状況

2.1 考察の意義

この論文で主に羅洪先の「現成良知説」¹⁰⁴理解の変遷について説明するつもりである。羅洪先の現成良知説の受容状況を通じて、「現成説」が彼の思想に与えていた影響について究明したい。このことにより、羅洪先の思想特徴も、なぜ彼の「主静帰寂」思想と帰寂派のほかの代表人物（聶豹）の思想と違うという点も明らかにできると考える。羅洪先の一生で「現成説」への態度がどのように変わっていき、彼が「現成説」への理解と批判をどのように構築していったのかを分析すれば、彼の思想の構造と変遷を明らかにすることができる

¹⁰³ 福田（2016）p. 425

耿天臺、すなわち耿定向（1524～約1596）、字在倫、又字子衡、號楚侗、人稱天臺先生。湖廣黃州府黃安縣人。嘉靖三十五年（公元1556年）進士。『明儒学案』p. 814

¹⁰⁴ 「現成説」は良知が本来に存在していて、いつでも発揮できると主張する学説である。工夫論からみれば、「本体即工夫」を提唱する学説である。「帰寂説」は、工夫をしなければ良知を発揮できないと考え、「主静」、「収斂」、「存養」の工夫を説いた。「現成説」と「帰寂説」は良知像への理解と工夫論がかなり異なっていた。

える。

既に述べたように、羅洪先の一生には、何度か思想変遷が見られる。全体的に見れば、彼の思想世界では、帰寂説の影も現成説の影も強い。羅洪先はしばしば帰寂派の代表的人物として聶豹とともに扱われるが、後世の研究者の多くは、聶豹と比べて羅洪先の思想をより高く評価する。たとえば日本の代表的な陽明学研究者である荒木見悟氏は、聶豹の思想に対しては「陽明学の後退」¹⁰⁵と評価したが、羅洪先の思想に対してはそれほど手厳しく批判せず、羅洪先思想の積極的な側面を認めた。「積極的な面」がどこにあるのか。羅洪先思想のなかに、現成主義、已発主義の部分も見られるからである。¹⁰⁶要するに、荒木見悟氏によれば、「主静」、「帰寂」を提唱する思想家羅洪先は、「現成¹⁰⁷」、「已発¹⁰⁸」思想の長所を受け入れようとしたので、思想の価値が高い、と見なされている。

いままでの羅洪先に関する研究においては、「主静」という概念に着目し、彼の「主静」思想がどのように発展していったのかを分析した研究が多い。たとえば呉震氏の『聶豹・羅洪先評伝』では、主静思想への転向を手掛かりとして羅洪先の生涯が描かれている。同時に羅洪先の現成派批判にも言及した。要するに、呉氏の著作は、羅洪先の現成説の受容より現成説への批判に重点を置いてあり、羅洪先思想における「現成説」の影響についてはあまり言及していなかった。呉氏の研究は、羅洪先の「主静」思想の発展についての研究と言える。これに対し、私はこの修士論文で、羅洪先が「現成」思想をどのように受容したのかという点と、「主静帰寂」思想をどのように発展させたのかという点とをそれぞれ検討するつもりである。一般的に、「変化」「発展」と言えば、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ という形で変化することが想定されるのだが、全体的に羅洪先の思想を見わたせば、羅洪先の「現成」思想と「主静」思想は、前者から後者へ転向した、あるいは後者から前者へ転向した形とは言えない。詳しく言えば、「現成説」に従っている間でも、羅洪先は「主静」思想を捨ててはおらず、「帰寂説」を受け入れた後でも、「現成説」の長所を否定していない可能性がある、ということである。

もう一つ本文で考察したいことは、羅洪先が同時に「現成説」と「帰寂説」の長所を受け入れていたとしたら、どのような思想が作られていたのかということである。荒木氏は、羅

¹⁰⁵ 荒木見悟氏 (1984a) は、「双江に対しては「聶双江における陽明学の後退」というレッテルをはることはできても、念菴に対しては必ずしも妥当ではない。」と評価する。「聶双江における陽明学の後退」によれば、聶豹はもともと朱子学の「定理」を打破する陽明学をもう一度予め用意される秩序のなかで置いて、心の活動をさらに制約させる。聶豹思想にたいして荒木見悟氏は「この意味で双江思想は、陽明学を後退させたばかりではなく、朱子学に比べても遜色をまぬがれないとしなければならぬであろう」という非常に厳しい批判を与える。それに対して、荒木見悟氏は、羅洪先の思想は聶豹と同じ「帰寂」、「主静」を主張したが、心の活動を制約させないので、「後退」と言えないと評価する。

¹⁰⁶ 荒木見悟 (1984b) 「しかし帰寂の平面的な定形化をさけて、できるだけ動的なものと一体感を回復し、已発主義・現成主義の長所を取り入れようと腐心した点では、念菴に数歩の長ありというべきであろう。」 p. 84

¹⁰⁷ ここで説いた「現成」とは、良知がいつでも日常生活で存在していると意味する。(方 (2011) 『王畿評伝 (上)』 p. 178 を参照した。) 「現成主義」とは、良知はそもそも完璧なものとして存在し、いつでもどこでも良知の力を発揮できると主張する学説である。

¹⁰⁸ 『中庸』には、「喜怒哀樂之未發、謂之中。發而皆中節、謂之和」という文章がある。已発とは、感情がすでに発生している状態である。已発主義とは、感情が発出したあとの、すなわち事物と接したあとの現実世界に即して工夫をして良知を発揮すべきと主張する学説である。

洪先について「結局独自の学派として発展し得なかった」¹⁰⁹という評価をくださった。確かに、羅洪先の思想は、「主静」を提唱しながら、「現成」、「已発」主義の影響も受け入れ、自分の学説を変えていた。だが、そのことを理由にして、「独自の学派として発展しなかった」と評価することは妥当であろうか。この点に対しても検討する必要がある。荒木見悟氏の基本的な立場は、「心の燃焼契機」（すなわち、行動する中ですべての枠を破り、予め定められた規格を超え、自己の良知に全てを任せ、最大限に心の力を発揮すること）があるかどうか、学説の「進歩」、「後退」の重要な判断基準となっている。もちろん、荒木見悟氏の立場に立てば、彼の羅洪先評価は妥当だと言えるが、私は、それとは異なる視点から羅洪先の思想を評価するつもりである。

2.2 「現成」思想の受容状況

2.2.1 早期（25歳～36歳）——王畿との出会いから「冬遊記」まで

張衛紅氏の著作では、羅洪先が25歳の時に科挙で状元（首位）を得て、北京で陽明学者と交流し始める時から、故郷の江西に帰るまでの間を、「現成良知説に服する時期」と指摘した。¹¹⁰張氏によれば、嘉靖八年（1529年）、彼が25歳で科挙を受験したときに、同じく科挙試験に参加した陽明学者たちと出会って、彼らの影響を受け始める。その中には、何廷仁（善山）、黄弘綱（洛村）という王守仁（陽明）の高弟もいた。羅洪先は何廷仁の墓誌銘において、当時の世論で「江西には何（廷仁）、黄（弘綱）がおり、浙江には錢（緒山）、王（畿）がいる」と言われていたと指摘した¹¹¹。何廷仁は王陽明に直接師事した弟子であり、王守仁（陽明）が贛州¹¹²にいる時から王守仁（陽明）の教育を受けていた。王守仁（陽明）以外では、陳献章（白沙）の思想をかなり称揚した。容肇祖氏の指摘をよれば、羅洪先自身は陳献章の思想の影響を受けていると説明した。¹¹³岡田武彦氏は何廷仁を「修正派」の系統

¹⁰⁹ 荒木見悟（1984b）初出：哲学年報 / 九州大学大学院人文科学研究院 編（通号 33）1974.03.00 pp. 1～34)

¹¹⁰ 張（2009）p. 64

¹¹¹ 「咸曰「君不聞陽明之門所評乎、江有何黄、浙有錢王」蓋指零都何善山秦、黄洛村弘綱、與紹興錢緒山洪德王龍溪畿也。」「南京工部屯田清吏司主事善山何公墓誌銘」『羅洪先集』p. 796

¹¹² 江西の南部の地名。1516年、王守仁（陽明）は皇帝の命令を受けて、贛州の山賊を鎮圧するために江西に行った。（王守仁（陽明）の経歴は『王陽明年譜』を参照した（『王陽明全集』所収）。王陽明が山賊を鎮圧している時期に、何、黄は王守仁（陽明）の弟子になった。

¹¹³ 容肇祖氏は、羅洪先の虚静の思想が、陳献章（1428-1500）号は白沙。彼が創立した学説は白沙学である。「致虚」「主静」「存養」を主張する）から深く影響を受けていると主張した。容（1996）「某、幼より先生（陳献章）の書を読み、その学ぶ所を考えうるに、虚を以て基本的となし、静も以て門戸となし、四方上下往古来今穿紐湊合を以て匡郭をなし、日用常行分殊を以て功用となし、忘助するなきの間を以て体認の則とし、未だかつて力を致さずして、用に応じ遺さざるを以て実得となす。蓋し未だかつて門に及ばずと雖も、然も江門の浜と白沙の城を思うごとに、覺えず夢寐にも南するなり。」p. 310（荒木、秋吉訳）p. 310 原文：某自幼讀先生之書、考其所學、以虚爲基本、以静爲門戸、以四方上下、往古來今、穿紐湊合爲匡郭、以日用常行分殊爲功用、以勿忘助之間爲體認之則、以未嘗致力而應用不遺爲實得。蓋雖未嘗及門、然每思江門之濱、白沙之城、不覺夢寐之南也。p. 911

に置いた¹¹⁴。黄弘綱の出身も贛州で、何廷仁と同じく直接、王陽明の指導を受けている。工夫論を言えば、彼は「不致纖毫之力、一順自然為主」（「明故雲南清吏司主事致仕洛村黃公墓志銘」『羅洪先集』p.801）と主張した。¹¹⁵羅洪先の文集には、何・黄二人と学問について討論している記録があるから、以後も長い間、「同志」の関係を持ち続けたと思われる。羅洪先は、黄弘綱の墓誌銘で、「官職を辞めたあと、毎年必ず舟に乗って青原に行き、吉安の聶双江公、鄒東廓公と面会した」¹¹⁶と書いた。恐らく、江西地方の講会に積極的に参加した人々であろう。残念ながら、何・黄二人の文集が残っていないので、それ以上の考察を進めにくい。ここで言いたいのは、王畿との出会いが確かに羅洪先の人生に於ける大事件であったが、王畿と出会うまえにも、羅洪先は他の陽明学者たちから様々な思想的な刺激を受けていたということである。

何・黄に出会った三年後、嘉靖十一年（1532年）、羅洪先は、初めて王畿に出会った。¹¹⁷その時の洪先は非常に王畿を尊敬し、王畿の学説に敬服した。この時期の手紙には、王畿の現成説の影響が見られる。たとえば嘉靖13年（1534）年の手紙「答羅岳霽」のなかで、羅洪先は良知について、こう述べた。

良知そのものは、無の極みであり、有の極みものである。何も借りてくる必要もなく、補足する必要もなく、依存する必要もなく、それ自体で完全無欠である。（夫所謂良知者、至無而至有、無容假借、無事幫補、無可等待、自足焉者也。）¹¹⁸

「良知は自足している」という考え方は、王畿と似ている¹¹⁹。この時の羅洪先にとって、良知は、本心に完全に備わっていて、当下¹²⁰自足の存在である。「至無而至有」について、王畿はこう述べる。「先師は良知の二文字を提出されました。三教を包括する根本原理、性にして命、寂にして感、虚の至りにして実、無の極みにして有なるものです。千年にわたる道を引き続いた聖人がこれ（良知の教え）に手を着けたとしても、これっぽちも光彩を放つことはできず、釈迦や老子が生きかえってこれに手を着けたとしても、これっぽちの技工を

¹¹⁴ 岡田（2009）p.7 工夫論から言えば、彼は「為善去悪」、「実地用功」の学説は、「本体」とする「心」の上に工夫をせず、「意」の上に工夫をすることを強調することである（この箇所は、『明儒学案』「主事何善山先生廷仁」を参照した）。この点は王門「有善有悪是良知、為善去悪是格物」を提唱する修正派の代表人物とする錢徳洪の立場に近づく。（錢徳洪の思想については、呉震氏の「陽明後学研究」（2002）第二章「錢徳洪論」pp.130～131を参照。）

¹¹⁵ 黄弘綱自身の文章は残っていないが、この墓誌銘を読むと、彼の学説は、良知に順応し、意念ではなく、本体上に工夫を施すことを強調する点に特徴があると考えられる。

¹¹⁶ 「既歸、每歲必方舟青原、玄潭間、與吉之雙江聶公、東郭鄒公期會。」『羅洪先集』p.802

¹¹⁷ 張（2009）p.85

¹¹⁸ 「答羅岳霽」（『羅洪先集』p.289）

¹¹⁹ 「良知は學ばず慮らずして、本來具足す。（良知不學不慮、本來具足。）」「先師、良知の教旨を拈出してより、學ぶ者は皆な此の事、本來具足して、外求を待つ無きことを知れり。（自先師拈出良知教旨、學者皆知此事本來具足、無待外求。）」「南遊会紀」

<https://sites.google.com/site/longxiwangxianshenghuiyu/-long-xi-wang-xian-sheng-hui-yu-yi-zhu> 電子版5 「王畿『龍溪王先生会語』卷五訳注」を参照する。

¹²⁰ 「現在。今すぐに。目の前に。」という意味の語である。

駆使することもできない（ぐらい完璧なものです）（先師提出良知兩字。範圍三教之宗、即性即命、即寂即感、至虚而實、至無而有、千聖至此駢不得一些精采、活佛活老子至此弄不得一些伎倆。）¹²¹

「無」とは、仏教で説いた「無一物」ではなく、「同じく繫辭上傳の『易』は無思なり、無為なり、寂然として動かず、感じて遂に天下の故に通ずとは、便ち是れ吾が儒の無を説くの精髓なり。（無思也、無為也、寂然不動、感而遂通天下之故、便是吾儒説無的精髓。）¹²²」という意味である。すなわち、ここの「無」は、人為なことを除去し、自然に順応する状態である。それにたいして、「有」は、何にでも感応し、対応し、この世のすべての変化を把握できる状態である。

嘉靖十六年（1534年、羅洪先 31歳）、現成良知説に服してから2年が経った羅洪先は、王畿に宛てた手紙¹²³のなかで、王畿への尊敬の気持ちを表現するとともに、自ら抱える悩みについても語っている。

臆病者である私は、学問に努めるのに、直下承当（そのまま引き受けることが）できません。〔他の何かに〕寄りかかって過ごしています。状況が変わると、すぐに窮地に陥ります。私はもともと定まった志向を持っていません。兄（王畿）から正直誠実な教説をいただいたのに、まだ実践できていません。今再び共に対面して探究することができないのは、世俗の離別のレベルにはとどまりません。…中略…最近、私は時々刻々良知に従って、凝然不動を本体とするだけです。進歩があると感じています。しかし、しばしば雑念が起こって、バラバラになってしまうこともあります。ちゃんと努力している点では、確かに「本体上に工夫をしている」と言えます。しかし雑念はまだ起こってくるのですから、「本無一物」の状態ではありません。まだ欠点を克服し、欲根を断ち切る¹²⁴という工夫をしています。〔この工夫が一番いい工夫ではなく、〕すでに第二義に落ちています。孔子が説いた仁、顔子が過ち¹²⁵を再びせずという本旨は、どこにあるのかまだ分かりません。（孤懦夫也、従事於學、竟不能直下承當、依傍度日。及遇事變、便至狼狽。孤固無志、而兄于直諒之意、亦或少疏。今復不得相與面究、此豈時俗離別之恨而已哉！…中略…孤近日之學無他、惟時時刻刻直任良知、以凝然不動為本體、亦覺有

¹²¹ 翻訳と原文は「王畿『龍溪王先生會語』訳注」巻三 pp. 15～17 を引用した。出典は、注釈 29 と同じである。

¹²² 同上

¹²³ 『羅洪先集』 p. 208

¹²⁴ この部分は、『論語』を踏まえている。「（原憲がいった、）勝ち気や自慢や怨みや欲望がおさえられれば、仁といえましょうね。」先生はいわれた、「むつかしいことだといえようが、仁となるとわたしには分からないよ。」原文：「克伐怨欲不行焉。可以爲仁矣。子曰、可以爲仁矣、仁則吾不知也。」（『論語・憲問』 pp. 269～270）

¹²⁵ この部分も、『論語』を踏まえている。「哀公が「お弟子のなかでだれが学問好きといえますか」とおたずねになった。孔子は答えられた。「顔回という者がおまして学問好きでした。怒りにまかせての八つあたりはせず、過ちをくりかえしませんでした。」「哀公問曰、弟子孰爲好學。孔子對曰、有顔回者好學、不遷怒、不貳過。」（『論語・雍也』 pp. 105～106）

可進歩處。但念頭時有復起、不得總成片段。夫懇懇切切、自謂于本體用功矣。然念頭有起、即非本無一物、猶為克怨伐欲不行之功、已落第二義。未知孔門之仁、顏子不貳過之旨、果在何乎？）（『羅洪先集』 p.208）

以上の手紙を見れば、王畿と出会ってから、羅洪先は一所懸命に王畿の教説に従って修行し、進歩もあったが、挫折もあった。彼は王畿の工夫を使って、良知の本体を捉えることができたようだが、欲望の念頭を完全に除去できなかつた。この時の羅洪先は、自分の工夫が正しくないで、「念頭」が断ち切れないと考えていたけれども、「現成良知説」を疑っているわけではなかつた。ゆえに、挫折したのち、また王畿の教を請うたのである。私は、この時期の羅洪先は現成説を疑っていなかつたけれども、彼が数年後に主静思想に転向しようとしたこととこの時期に於ける実践中の挫折とは、無関係ではないと考える。

2.2.2 中期（36歳～47歳）－「現成説」への疑いと批判

前節で引用したように、「答王龍溪」で、羅洪先は明白に自分の悩みを告白した。二年後、嘉靖十八年（1539年）の「冬遊記」の時点まで、羅洪先は、「主静」と「現成」の間をさまざまに迷った。「冬遊記」の時点で羅洪先がすでに「主静」に転向していたのか、「主静」に転向しようとしたけれども、まだためらっていたのか、研究者によって意見が異なっている。私は、この時点では羅洪先がまだためらっていたと考えている。

「冬遊記」で、羅洪先は、「現成良知」に従っても、悩んでいて、新しい工夫論を實踐したい¹²⁶と王畿に言ったことが書かれた。彼は、「現成良知説」を疑い始めて、静坐の工夫をしていた。講学の中に王畿から忠告をもらったあとに、自分の学説について反省し、「現成良知」を修行し続けていたが「静坐」の工夫も諦めなかつた。

嘉靖十八年（1539年）から、羅洪先は少なくとも主静的な傾向を示し、徐々に現成良知説を批判しようとした。「冬遊記」の後の紀行文「夏遊記」（1548年、嘉靖二十七年、羅洪先44歳）の時点になると、羅洪先は明白に現成良知説を批判している。たとえば、

陽明先生の良知の教は、孟子の学説に基づきます。ゆえにしばしば「入井怵惕¹²⁷」、「孩提愛敬¹²⁸」、「平旦好悪¹²⁹」という三つの言葉を証とします。…中略…その三者は、

¹²⁶ 『羅洪先集』 p. 56 「為病人不能行、故求藥耳。」

¹²⁷ この言葉は『孟子』に出典がある。「たとえば、ヨチヨチ歩く幼な子が今にも井戸に落ちこみそうなのを見かければ、誰しも思わず知らずハッとして」原文：「今人乍見孺子將入於井、皆有怵惕惻隱之心。」『孟子（上）』 p. 139

¹²⁸ この言葉も『孟子』に出典がある。「二三歳の幼児でさえも、自分の親を親しみ愛することを知らないものではなく、やや大きくなると、自分の兄を尊敬することを知らないものはない。」原文：「孩提之童、無不知愛其親者、及其長也、無不知敬其兄也。」『孟子（下）』 pp. 334～335

¹²⁹ この言葉も『孟子』に出典がある。「平旦の氣、すなわち夜明け方の清らかな明るい心（良心）の芽生えがでてくるが、それにもかかわらず心から善を好み悪を憎むという人間らしい良心の持主がごくごく稀にしかない。」原文：「平旦之氣、其好惡與人相近也者幾希」『孟子（下）』 pp. 241～245

その中で未発の中が存在し、「良知」と言います。朱子は、「良とは、自然なものという意味である」と言いました。部分的な発現を以て、すぐに本体を回復することはできませんので、(孟子)の「怵惕」をいえば、必ず「扩充」を続けて言っていて、「好悪」を言えば、必ず常に「存養」を続けていて、「愛敬」を言えば、「天下に達す」を続けて言っています。これこそ孟子の真意です。陽明先生は孟子の真意を理解するために、孟子のように良知だけで十分とはみなさず、致知を工夫としました。…貴君は「已発を離れれば、いわゆる中は存在しない」と指摘しました。故に「見在の知」(既に発現している良知)を「事物の則」とし、理と欲とが混ざり合っていることに気づけていません。ですから、欲を理とみなしてしまう場合が多くなってしまいます。物と我を転倒したので、しばしば自分が引きずられて物を追うはめに陥るのです。…中略…今、一念の明を極則とし、一覺の時刻を實際¹³⁰とするならば、粗忽・軽率ではないでしょうか？(陽明先生良知之教、本之孟子、故常以「入井怵惕」、「孩提愛敬」、「平旦好悪」三言為証…中略…是三者、以其皆有未發者存、故謂之良知。朱子以為「良者、自然之謂」是也。然以其一端之發見、而未能即齋復其本體、故言怵惕、必擴充繼之、言好惡矣、必以長養繼之、言愛敬矣、必以達天下繼之。孟子之意可見也。先生得其意者、故亦不以良知為足、而以致知為功。…謂離已發、無所謂中也、遂以見在之知為事物之則、而不察理欲之混淆、故多認欲為理。物我倒置、故常牽己以逐物。…中略…今以一念之明為極則、以一覺之頃為實際、不亦過於鹵莽乎？『羅洪先集』「夏遊記」pp.75～76)

以上が、王畿の不满を招いた「夏遊記」の議論である。この文章を読むと、羅洪先が現成説に対してどのような批判を抱いていたのか分かる。羅洪先にとって、現成説の欠点は、三つある。①一端の良知は全体の良知ではないために、修行が必要である。王畿は「良知」を言うだけで、「致」を言わず、「工夫」が足りない。②已発と未発、寂と感を分けないと、理と欲が混ざり合ってしまう、弁別されにくい。③一時的な感覚を良知とすることは、妥当ではない。

直前の文章において、羅洪先は「一端の発見」について言及していた。今現れている「良知」が「一端の善(部分的な善)」であるのか、あるいは「全体の善」であるのかという問題について、王畿と羅洪先の主張には相当のへだたりがある。すなわち、二人は、良知に関する理解が大きく異なるのである。良知は「知是知非(=現実世界における善悪の判断)」の能力であるが、それにどれぐらいの信頼を抱くのかという点で全く異なっていると言える。羅洪先にとっては、「良知」そのものを正確に把握することがそもそも難しい問題であり、少し歪んだだけで正道を離れ、「わがまま」になる可能性があり、王畿のように「若し果して信得及ぶ時、当下に具足して剰なく欠なく、更に磨滅なし。人人堯舜たるべし」¹³¹と

¹³⁰ これは、羅洪先が王畿の学説に対してくださった評価である。羅洪先から見れば、王畿が説いた工夫は、実践行動中において現れている念頭を良知の根本、全部と見なし、一時的な知覚を本當の良知と見なすことに他ならなかった。

¹³¹ 原文は「若果信得及時、當下具足、無剰無欠、更無磨滅、人人可以為堯舜。」(p. 251)『王畿集』「答吳

考え、良知に厚い信頼を抱いたならば、自分を過大評価する危険がある。特に天資に恵まれてない人は当下の自分を完全に信じるだけであれば、容易に現在の状態に満足してしまい、工夫を不要と考えて努力しないことになってしまう。王畿の学説は、羅洪先から見ればほんとうに「陰道」である。

王畿は決して工夫を不要とは言わなかったので、羅洪先には王畿の思想にたいして多少の誤解があると言える。しかし、「本体工夫合一」という学説が、工夫を大切にしている羅洪先に対してある種の危機感を与えたことは確かである。私は、①が二人の根本的な分岐と言えると思う。

興味深いところは、ここで寂感問題(②)に対して王畿と異なる見解をもっていた羅洪先が、最終的には、寂感問題について王畿と同じ立場を取るに至ったという点である。なぜ最後に羅洪先は、王畿と同じ「寂感合一」の立場に立ったのか。「寂感合一」の立場に立つことには、どのような意味があるのか。この点は後で述べるとして、先に、羅洪先が抱いた王畿思想に対する危機感を説明しよう。彼は、現実世界で何が欲、何が理であるということかは簡単に弁別できず、知らないうちに欲を理と考えてしまう可能性もあるので、「未発の中」、すなわち欲がまだ生じていない理想状態を工夫の対象とすることを提唱していた。このように考えている羅洪先にとって、王畿の現成良知説は、荒木龍太郎氏が述べるように、「已・未一味とする渾一の心の流行に任せて、本体すなわち工夫—自律的に自分充足をなすことは、情念と真の良知の生命力とのすりかえがなされ、名利嗜欲血気のとりこになって安易に流れており、深く欲根の習気の追求がなされていない」¹³²という欠点がある。理と欲に対して羅洪先には、王畿と比べてより慎重な態度が見られる。この点は、彼の生涯の最後まで変わることがなかった。「冬遊記」で、羅洪先は友人から、彼が「欲根」に執着しすぎていると批判され、反省する様子を見せたが、「夏遊記」においても、彼は相変わらず「欲根を断ち切る」問題を大切に考えていた。「欲根を断ち切る」ことは、羅洪先の思想世界にずっと存在していた問題と言える。「冬遊記」を読めば、「欲根を断ち切る」問題を解決できなかったことが「主静」を提唱しなければならぬ原因であったことが分かる。「冬遊記」にせよ、「夏遊記」にせよ、それらの時点の羅洪先は、「未発の中」に執着していた。ただ、彼が最終的に「未発の中」への執着を捨て、「収攝保聚」を提出したのも、「欲根を断ち切る」問題を解決するための手段にすぎない。

③は、恐らく羅洪先の誤解であろう。王畿の場合、「良知」≠「知覚」である。当下の一念は確かに今の「念頭」であるけれども、「一時の知覚」ではない。実に、「当下の一念」こそ王畿工夫論の着眼点である。王畿は、しばしば「一念」、「一念の微」、「一念独知」を説いた。小路口総の論文「王畿の一念思想—王畿良知心学原論(一)」を参考し、「一念」を説明する。小路口氏によれば、

悟齋」荒木龍太郎(1977) p. 45を参照する。

¹³² 荒木龍太郎(1977) p. 47

所謂「当下一念」とは、要するに、他者との感応の場において、「良知」の一念が、「当下」、すなわち、まさしく、今—ここに現出した、その一刹那を意味する言葉＝概念である。この「一念」は、もとより、「良知」本体の自ずからなる現出にほかない。「一念」の現出には、原理的には、不善は有り得ない。にもかかわらず、不善があるとすれば、それは、この「一念」の発動が、何ものかによって歪められるか、蔽われるかして、その自ずからなる現出が阻害されているからに他ならない。良知の自ずからなる現出を歪曲・隠蔽し、阻害しているもの、それは、外でもない、「欲望」と「意見」である。ならば、そうした、良知の自ずからなる現出を歪曲・隠蔽する阻害要因である。一切の後天的な、すなわち、「軀殻（肉体）」に起因する「欲望」や「意見」の混入を、ことごとく排除し、完全無欠、純粋無雑なる良知本来のあるがままの現出を取り戻し、その本体の姿に戻してやるのが、「聖学」の目的であるということになる。そのためには、常に、この「一念」の動き謹み（「慎独」）、静かな時も、動いている時も、すなわち、仕事の有る無しにかかわらず、常に、この「一念」への保守点検を忘れることなく、怠ることなく、その良知本来の輝きを保持し続ける。¹³³

すなわち、王畿にとって、「一念」は日常生活で使われる「意念」、「感覚」ではなく、「邪念」ではなく、「正念」である。この「一念」の工夫は、動に偏らず、静に偏らず、すべての状況において実践される。時々刻々「一念」を保持する工夫こそ、聖学で一番直接的な工夫である。

「夏遊記」の時点で、羅洪先が王畿思想についてまだ十分に理解していなかったことが分かる。羅洪先は、王畿の学説に関する誤解を抱きながら、王畿に対して厳しく批判していた。「冬遊記」のなかで告白されていた「挫折」、「迷い」が解決せず、「現成良知説」の欠点を認識した時点で、羅洪先は「現成良知説」から「主静収斂」説に転向した。

2.2.3 晩期（47歳以後）—「未発・已発」に関する争論

張衛紅氏によれば、嘉靖二十六年（1547年、羅洪先44歳）、羅洪先は聶豹の帰寂説を認めた。¹³⁴しかし、この「転向」は、羅洪先が完全に現成説を捨てたことを意味しない。荒木見悟氏の論じた通り、羅洪先は、現成主義、已発主義の長所を受け入れた。寂感の問題においても、晩年の羅洪先は王畿のように「寂感一体」の立場に立った。つまり、羅洪先は「動静」「寂感」問題において、聶豹より王畿に近い立場に立っていた。次に、聶豹への手紙「与聶双江」¹³⁵から羅洪先と聶豹の分岐を分析し、羅洪先が現成良知説を批判しながらも、その長所を受け入れたことを説明したい。この手紙は、羅洪先が、聶豹と王畿の問答（即ち「致

¹³³小路口（2010）p. 19

¹³⁴張（2009）p. 189

¹³⁵『羅洪先集』p. 192

知議略¹³⁶」と「致知議略」に対する王畿宛ての聶豹の返事。張氏の考察によると、この問答が記録されている書簡は、1558年に作成された)を読んだのちに、聶豹と王畿の激しい論辯を十分に理解した状態で書いた手紙である。

貴君は工夫を弁別するときに、致知だけを強調し、物を説きません。内(体)だけを強調し、外(用)を説きません。学ばず考えず¹³⁷、自ずから分かってできる点を強調し、事々物々に良知を実践とを説きません。仁義を強調し、仁義を行うことを説きません。(長者詳辯工夫、只在致知、不在物；只在内、不在外、只在不學不慮、自知自能、不在致此良知於事事物物；只在由仁義行、不在行仁義。) (『羅洪先集』 pp.192~193)

以上の文章は「与聶双江」の冒頭である。羅洪先はしっかり聶双江思想を理解しており、そこでは「内外を分けて、体を重視して用を軽視する」点に欠点があるとまとめる。この点は、体用一源を主張する王守仁(陽明)や王畿と異なる。¹³⁸羅洪先は、聶豹思想のこの点を批判した。次に、羅洪先は、

たとえば『論語』における一番大切な工夫、(孔子が)顔(回)、冉(雍)に教えたことにすぎません。それは「克己を言えば、視力、聴力、言語、行動¹³⁹に離れません。敬恕を言えば、出かけて(仕事をしていること)、民衆を使うこと、己がされたくないことを人に施さないこと、国家、諸侯の領地で働いて、文句を言わないこと(から話します。)ここで、孔子は視覚、聴覚に工夫をするだけと強調することではなく、ただ言語で敬、恕の道理を説明できないからです。故に具体的な条目に即して人に教えを与え、事事物物と外界の世界を避けたことは一度もありません。弟子を教えるときにも、孝悌、謹信(=礼儀正しく誠実である)、愛衆、親仁¹⁴⁰を説きます。君子の学問を論じるときにも、敏事、慎言(=慎んで言う)」を説きます。ほかの門人の質問もすぐに答え、たとえば色難(=愛想がよい顔で両親に付き合うことは一番難しい)¹⁴¹、言訥(=謹んで言う)

¹³⁶ 小路口(2009)は福田氏の文章(「王龍溪と聶双江—「致知議略」における良知論争)陽明学第八号(1996))を引用して、「致知議略」ことを説明した。福田氏によれば、「陽明の良知心学の根底を問う問答として当時の士人の関心を集めた…この致知問答は一種の教義問答で、良知心学の本質をうかがうに足る資料である」

¹³⁷ 「孟子が言われた。「およそ人間にはとくに学ばなくとも自然によくできるという能力(すなわち良能)があり、あれこれと考えなくとも自然に分かるという知恵(良知)がある。」原文:「孟子曰、人之所以不學而能成者、其良能也、所不慮而知者、其良知也。」『孟子(下)』p.334

¹³⁸ 先生曰「心不可以動靜為體用。動靜時也、即體而言言在體、即用而言體在用、是謂體用一源。若說靜可以見其體、動可以見其用、卻不妨。」『王陽明全集』伝習録上 p.31

¹³⁹ 「先生はいわれた、礼にはずれたことは見ず、礼にはずれたことは聞かず、礼にはずれたことは言わず、礼にはずれたことはしないことだ。」原文:「子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。」(『論語・顔淵』 pp.224~225)

¹⁴⁰ 「先生がいわれた、「若ものよ。家庭では孝行、外では悌順、慎んで誠実にしたうえ、誰でもひろく愛して仁の人に親しめ。そのように実行してなお余裕があれば、そこで書物を学ぶことだ。」原文:「子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛眾而親仁、行有餘力、則以學文。」(『論語・學而』 pp.23~24)

¹⁴¹ 「子夏が孝のことをおたずねした。先生はいわれた、「顔の表情がむずかしい。仕事があれば若いもの

などを説きます。¹⁴²いつも事実を挙げて（道理を）人に気づかせていた。「寂」ばかりを説くわけではありません。なぜならば、事実即して（道理）を求めて、自分の力で悟ることを強調するからです。いわゆる言語で説明できないことである。（如『論語』喫緊工夫、無過告顔、冉者：言克己、不離視聽言動；言敬恕、不離出門、使民、施人、在家、在邦。非是教之、只是在視聽各處做工夫、緣已與敬恕無可著口、形容不得、故須指其時與事示之、未嘗避諱涉與事事物物與在外也。至教弟子、亦只在孝弟、謹信、愛衆、親仁；論君子好學、只在敏事、慎言。其他門人隨問隨答、若色難、言訥之類、皆在實指其事提醒人、未嘗處處說寂。何也？欲其即實事求之、俟其自得、所謂語不能顯著也。）

（『羅洪先集』 p.193）

と指摘した。以上の文章で、羅洪先は、現実世界における実践の重要性を強調しようとしている。すなわち、道理は極めて精細で難しく、言語で説明できない。孔子も、実践中の具体的なやり方に即して門人に教えていた。聶豹のように、「寂」だけを強調し、実践を軽視する考え方は、不完全な学説ではないかと主張したいのである。

羅洪先は、基本的な身体機能と日用人倫を大切にすることをもち、聶豹の立場ではなく、王畿の事上錬磨を強調する立場に近づいている。¹⁴³すなわち、この時期の羅洪先は、「寂体」を強調しつつ、その一方で、具体的な実践の場で良知を発揮することも重視していたのである。

注意すべきことは、以上の文章は、読者に「夏游记」の「未発の中」に関する王畿の議論を思い起こさせる、という点である¹⁴⁴。「夏游记」で、王畿は、「未発の中」にたいして「静時を以て論じてはいけません（未可以静時論）」と主張した。「未発」、「已発」問題について、王畿は「未発之功只在発上用」（「致知議辯」『王畿集』 p.133）という立場を取る。王畿は、「節是天則、所謂未発之中也」（同上）を解釈する。「節」という言葉は、『中庸』で見られる。「喜怒哀楽の情が」すでに発動してみな節度（ポイント）にぴったり中っている状態を和（調和のとれた心の作用、ハーモニー）という。¹⁴⁵すなわち、「節」とは、「已発」状態だ

が骨を折って働き、酒やごはんがあれば年上の人にすすめる、さてそんな「形のうえの」ことだけで孝といえるかね。」原文：「子夏問孝、子曰、色難、有事、弟子服其勞、有酒食、先生饌、曾是以為孝乎？」（『論語・為政』 p.39）

¹⁴² 「司馬牛が仁のことをおたずねした。先生はいわれた、「仁の人はそのことばがひかえめだ。」原文：「司馬牛問仁、子曰、仁者其言也訥。」（『論語・顔淵』 pp.226～227）

¹⁴³ 岡田氏は王畿の「飲食声色の極粗を離れては本来の生命生機は失われる。日用貨色上に料理経綸し、時々天則を以てこれに応じて始めて超脱清浄を得るのである（「冲玄会紀」）」という発言を引用し、「龍溪が極粗の学を以て極精としたのも、この徹悟を説く主旨に本づくものであろう」と評価し、王畿は日用人倫を重視することを指摘した。また、岡田氏は「もっとも龍溪の言う事上磨錬とは体上の工夫であって用の工夫ではない」も指摘した。王畿が説いた「事上磨錬」と羅洪先の「事上磨錬」はすこし違うかもしれないが、体を重視し用を軽視する聶豹の考え方と二人の姿勢が全く異なることは確かである。岡田（2009） p.34

¹⁴⁴ 「夏游记」『羅洪先集』 p.66

この手紙は、羅洪先が（『答王龍溪』即「致知議略」）を読んだ後に書いた手紙である。「答王龍溪」（即「致知議略」）において聶豹は、王畿の「未発之功只在発上用」という議論を批判する。

¹⁴⁵ 矢羽野（2016） p.146

け説かれるものである。すなわち、王畿は、未発の中と已発の和（節にぴったり中っている）を同一視していた。実践の場において、「天則に違ふことなく従う（循其天則而不過也）」だけで十分であり、わざわざ「未発の中」を求める必要がないと主張する。

「夏遊記」の時期の羅洪先は、「静時を以て論じてはいけません（未可以静時論）」という意見を受け入れ、「常に定になり静になった後に、中と言える。（蓋必常定常静然後可謂之中。

「夏遊記」『羅洪先集』p.72）」と主張した。しかし、「与聶双江」を読むと、羅洪先は「未発の中」について王畿と合致していると言えよう。この時期の羅洪先は、現実社会の実践行動を強調し、静の状態になる「未発の中」に執着しなくなっていた。私は、この変化が羅洪先思想の重要な変遷だと考える。

この手紙を読むと、羅洪先は、同じく「主静」を主張した聶豹ではなく、王畿のほうを支持しているように見える。この手紙において羅洪先は、聶豹に対して十分な尊敬の意を表現したが、思想的な面ではほぼ王畿のほうを弁護していた。もちろん、この時の聶豹と王畿の論辯がきわめて激しかったため¹⁴⁶、羅洪先は、二人の友人として二人を落ち着かせるために王畿思想の長所について積極的な評価を与えた側面もあるかもしれないが、ここでは、彼が既に「已発主義」の長所を受け入れたことの表れであると理解しておきたい。

3. 羅洪先主静思想の展開

3.1 考察の意義

一般的に、思想家は挫折をしたのちに思想を大きく変化させることは珍しくない。羅洪先の文章を読めば読むほど、彼はできる限り自分の学説を反省し、欠点を意識して、つねに学説を改善しようとし、穏当な学問を求めようとする特徴があると考えられる。彼の文章を読むと、彼がずっとすべての人間が実践できる工夫を探していたことが分かる。たとえば、二章で述べたように、「現成説」を実践しながら、「現成説」の欠点を発見したので、「現成説」を批判するようにならなくなっていった。この点からすれば、羅洪先は、陽明学の「已発・未発合一」「体用合一」を徹底的に行う王畿学説の性格とかなり異なっていた。王畿は、最初から「現成説」を提唱し、自分の学説の基本主張をほぼ変えなかった。

羅洪先の思想変遷は、前章で述べたように、単に「主静」－「現成」－「主静」という形に変遷するわけではない。この章では、「主静思想」の思想史の流れ、羅洪先の「主静」思想と彼が「主静」思想の実践中で味わった挫折を説明する。要するに、彼はどのような機会に主静思想に触れたのかという点、また、どのような出来事に出会って自分の学説を変えたのかという点に関し、彼の文章と手紙に即して解釈する。

¹⁴⁶ 張衛紅によると、聶豹と王畿は、三回目のやり取りをした。激しい論戦が繰り広げられ、聶豹は王畿に攻撃的な言葉を使った。二人はこの論戦以後、議論を交わすことがなかった。張（2009）pp. 201～p202

3.2.1 早期 (23 歳～32 歳) — 「主静思想」に関する初歩的な受容

羅洪先は、二十三歳の時に地元（吉安）の思想家である李中（谷平）に師事した。李中の思想について、『明儒学案』で次のように述べられている。「先生は楊玉齋の門下で学問を受けた。玉齋の名は楊珠であり、楊珠の学は伝注（経典、思想家の著作の注釈）から出発し、濂（周濂溪）、洛（二程）の学を遡って行き、道理を身に着けた。（先生受学於楊玉齋之門、玉齋名珠、其学自伝註以溯濂、洛、能躬理道。『明儒学案』）」林月慧氏によれば、李中の思想は確かに程顥から継承されたものであるが、たんなる朱子学的な学問を焼き直したものではなかった。彼は、陽明学の大切な問題を羅洪先に教えてくれた。¹⁴⁷林氏の言うように、李中は朱子学だけでなく陽明学にも通じる学問を教えてくれたのではあるが、李中が強調した「存養」¹⁴⁸、「閑邪」¹⁴⁹という修行方法は、王陽明の教説とかなり異なる点があった。李中は、「存養」について、「聖学の工夫は、ただ存養を本とすることだけである。省察は存養に包まれたものである。（聖學之功、只是一個存養為本、省察是存養内一件。）」¹⁵⁰王陽明は存養に対してこう述べた。「「省察」とは、事に対処して動いているときの「存養」のことであり、「存養」とは、なすべき事もなく静謐にしているときの「省察」のことである（省察是有事時存養、存養是无事時省察。）」¹⁵¹このように翻訳したうえで溝口氏は、次のように注釈を加えている。「「省察」「存養」どちらも宋学以来の儒家の術語。「存養」は『孟子・尽心上』の「その心を存し、その性を養う云々」からでる語。「省察」は理を探究する試行、「存養」は内面の涵養。存養は未発の工夫であり、省察は已発の工夫である。未発・已発をしっかりと結び付けさせる王陽明と比べて、李中は未発の工夫をさらに強調していた。

羅洪先と李中の手紙のやり取りを見ると、李中と羅洪先は陽明学をめぐって討論したが、修行方法から言えば、李中の学は確かに「主静」の路線に近づいた、ということが分かる。

これまでの羅洪先研究において、彼は陽明学者ではないという意見がある。¹⁵²彼は濂洛の学を学んだが、どのように学んだのかも大切である。張衛紅氏は、羅洪先の学術の発展の過程は次のようにのべる。「...濂洛の学を用いて陽明学を絶えず消化、理解し、致知の工夫を深めながら、一定程度陽明の体用一源思想に呼応していく過程である」¹⁵³と指摘した。たとえば銭穆氏は羅洪先が濂洛の学からたくさん学んだが、そのことを理由にして彼が陽明学

¹⁴⁷ 林（2005）『良知学的転折』p. 249

¹⁴⁸ 『孟子・尽心上』：「知其性、則知天矣。存其心、養其性、所以事天也。」

溝口氏は、こう解釈する。「「省察」「存養」どちらも宋学以来の儒家の術語。「存養」は『孟子』尽心上の「その心を存し、その性を養う云々」からでる語。「省察」は理を探究する試行、「存養」は内面の涵養。」溝口（2005）p. 64

¹⁴⁹ 「易・乾」によると、「邪を閑ぎてその誠を存す（閑邪存其誠）」がある。（『易』本田濟）p. 49

¹⁵⁰ 『明儒学案』「谷平日録」中華書局 p. 1264

¹⁵¹ 『伝習録上』溝口雄三氏の翻訳である。p. 64

¹⁵² 張（2009）p. 508。張氏によれば、銭穆氏は羅洪先を陽明学の系譜に入れることはできないと指摘した。古清美氏も同じ考え方を持っていた。原因の一つは、羅洪先の先生である李中が濂洛思想を継承するためである。

¹⁵³ 同上 p. 514

ではないと指摘した。¹⁵⁴張氏は、錢穆の批判が不適切であるということである。また、張衛紅氏によれば、濂洛の学と陽明学は、ただ「修行方法（工夫路径）」が違うだけであり、わざわざ分ける必要はないのである。¹⁵⁵私は、ここでも張氏の主張に従いたい。羅洪先の思想が、実際に多くの王門の弟子たちから認められなかったけれども、私は、彼も思想もまた陽明学の展開の一つであると認めたい。

3.2.2 中期（32歳～50歳）－「静坐」の実践と「主静」の挫折

二十三歳から李中のところで、「存養」「閑邪」濂洛の学を勉強したあと、二章で述べたように、羅洪先は科挙を受験し、陽明学者である何廷仁、黄弘綱に出会った。その時の羅洪先は、「行為を慎んで、やり過ぎない。二公の言動は常の如し。（羅洪先は）この点について疑問を持った。（兢兢然動止不逾鉅而二公言動如常，疑之）」¹⁵⁶張衛紅氏の解釈によれば、二人との出会いは羅洪先がはじめて活発な学問に触れた機会であった。最初に活発な学問に触れ、羅洪先は大きく刺激を受けたと推測できる。吉安を離れて上京したのちに、彼はいくつかの講学に参加したことがある。聶豹¹⁵⁷が受けた批判から見れば、動的な学説は、当時の主流であろう。活発な陽明学雰囲気は、羅洪先に新しい感覚を与える。完全に王畿の動的な「現成説」を受け入れるまでに、彼はすでに主静思想以外の学説に触れた。この経歴は、彼が「現成説」を受容する際に積極的な影響を与えたであろう。意味深いことは、おそらく羅洪先が、それまでに身につけていた主静的な修行方法で「現成説」を理解していったということである。たとえば、

最近、私は時々刻々良知に従って、凝然不動を本体とするだけです。進歩があると感じています。しかし、しばしば雑念が起こって、バラバラになってしまうこともあります。（孤近日之學無他、惟時時刻刻直任良知、以凝然不動為本體、亦覺有可進步處。但念頭時時復起、不得總成片段。『羅洪先集』p.208）

以上は、羅洪先は王畿に宛ての手紙（1534年、嘉靖十三年）である。羅洪先は、「凝然不動」を言った。凝然とは、気体がぎゅっと集まる様子であり、「凝聚」、「収斂」の意味が含まれる。また、『伝習録』には、「凝」に関連する条目が少なくない。たとえば、

問う、「道家のいう元氣・元神・元精についてお尋ねします。」

先生がいう、「要するに一つのことで。流行する側面を氣、凝聚したときを精、靈妙な

¹⁵⁴ 張（2009）p. 508.

¹⁵⁵ 同上 p. 513

¹⁵⁶ 張（2009）p. 52

¹⁵⁷ 『明儒学案』（中華書局）によると、聶豹は「当時にみなに寄ってたかって非難された（乃当時羣起而難之哉）」。p. 371

作用について神というのだ。」¹⁵⁸（問仙家元氣、元神、元精。先生曰「只是一件：流行為氣，凝聚為精，妙用為神。」『王陽明全集』「伝習録上」 p.19）

そもそも良知は一つです。その作用が靈妙であることから神といい、現象としてさまざまに流動することから氣といい、放散しないことから精というだけで、決してその形象やありかかを特定することはできません。¹⁵⁹（夫良知一也、以其妙用而言謂之神、以其流行而言謂之氣、以其凝聚而言謂之精。（『王陽明全集』「伝習録中」 p.62）

以上のことばは、道教の用語を使って、良知の発散、凝集を解釈したものである。ここで説いた「元氣」、「元神」、「元精」は、溝口氏の解釈によると、「元神・元氣・元精」いずれも道家の語で、人間の生命の根源というもの¹⁶⁰である。良知にせよ、先天の氣にせよ、動かないものではない。

また、「収斂」、「凝聚」について、『伝習録』で、王陽明は、こう述べる。

夜になれば、天地は混沌と暗くなり、形や色がみえなくなり、視野もきかず物音も聞こえなくなり、器官の出入口（耳穴・眼穴・鼻穴など）もみな閉じる。これは、良知が収斂し一つに凝結したときでもある。（朝になって）天地が開かれ、もろもろのものがみずみずしく姿をあらわし、視界がひらけ物音も聞こえはじめ、器官の出入り口もみな開かれる。これは、良知の靈妙なはたらきが發揮されはじめた時でもある。¹⁶¹

（夜來天地混沌，形象懼泯，人亦耳目無所睹聞，眾竅俱翕，此即良知收斂凝一時。天地既開，庶物露生，人亦耳目有所睹聞，眾竅俱辟，此即良知妙用發生時。『王陽明全集』「伝習録下」 p.106）

以上の言葉を見て、良知は、特に「凝然不動」を強調する必要がない。

ところで、「凝然不動」は、容易に「不動心¹⁶²」を連想させる。「不動」、「不動心」について、王陽明は、こう述べる。

尚謙は先生に、孟子の「不動心」と告子の「不動心」の違うところについて先生に問

¹⁵⁸ 溝口氏訳（2005）『伝習録』 p. 80

¹⁵⁹ 溝口氏訳（2005）『伝習録』 p. 215

¹⁶⁰ 溝口（2005） p. 215

¹⁶¹ 溝口氏訳（2005）『伝習録』 pp. 363～364

¹⁶² 『孟子・公孫醜上』「公孫醜問いて曰く、夫子齊の卿 {の位} に加（居）り、道を行なうを得ば、焉（則）ち此れに由りて霸王たちしむと雖も、異（怪）しむに {足ら} ず。此の如（是の若）くんば則ち心を動かさんや否や。孟子曰く、否、吾四十にして心を動かさず。（公孫醜問曰：「夫子加齊之卿相、道焉、由此霸王不異矣。如此、則動心否乎？」孟子曰：「否。我四十不動心。」）」 pp. 115～116

いかけた。先生は、「告子は、無理やり心をと捉えて、不動させる。孟子は、集義を通じて、心が自ずから不動になると主張する」と答えた。また、「心はもともと動かない。心の本体は性である。性すなわち理である。性はもともと動かず、理はもともと動かない。集義は、心の本体に回復することである」といった。（（尚謙問孟子之「不動心」與告子異。先生曰：「告子是硬把捉著此心、要他不動。孟子欲是集義到自然不動。」又曰：「心之本體原自不動。心之本體即是性，性即是理，性元不動，理元不動。集義是復其心之本体。」）（『王陽明全集』傳習録上 p.24）

ここで、王陽明は、「不動」を説いたが、それは、心の自然な状態を強調するためであった。しかし、羅洪先の「凝然不動」は、王陽明の「凝聚」、「不動」と異なっていた。羅洪先は、王畿に宛ての手紙で「しかし、しばしば雑念が起こって、バラバラになってしまうこともあります」と言って、念慮の湧出を心配し、念慮をできるだけ抑えようとした。彼の「凝然不動」とは、「念慮」を抑えて、心は無欲状態させるということである。この点で、羅洪先は、王畿、王陽明と異なっていた。

念慮の処理について、王陽明は『伝習録』で弟子たちに忠告を与えている。

九川が問う、「近年、わたくしはいたずらに博識をほこるだけの学にあきたらず、つねづね、静坐によって念慮をなくそうと心がけているのですが、なくすどころか、ますますそれが雑然とわき上がってくる始末です。どうしてでしょうか」
先生がいう、「念慮をどうしてとめることができよう。ただ、それを正すことあるのみだ」

いう、「いったい無念になることなどあるわけがない」

先生がいう、「そんな、無念になることなどあるわけがない」

いう、「としますと、にもかかわらず静を問題にするのは、どういうわけですか」

いう、「静であっても動でないということがなく、動であっても静でないということはない。例の戒慎・恐懼も、それ自体念慮なのであり、動と静とを別々のカテゴリーに分けるわけにはいかないのだ」¹⁶³（九川問：「近年因厭汎濫之學，每要靜坐，求屏息念慮。非惟不能，愈覺擾擾，如何？」先生曰「念如何可息？只是要正。」曰「當自有無念時否？」先生曰「實無無念時。」曰「如此卻如何言靜？」曰「靜未嘗不動，動未嘗不靜。戒謹恐懼即是念，何分動靜？」）（『王陽明全集』傳習録下 p.91）

確かに、修行している最中に念慮を処理することは難しい。人間が外界の世界と触れたら、意念が発動するのは当然のことであろう。欲根を断ち切れないと、私欲から生じる念慮も断絶できない。しかし、王陽明にとって、念慮は、断絶できず、断絶する必要もないものである。人間は、完全に念慮を断絶できないからである。悪念を善念に転換させれば、別に念慮

¹⁶³ 溝口氏訳（2005）pp. 306～307

を止めなくても問題はない。羅洪先の「しばしば雑念が起こる」という心配は、王陽明の場合には、もともと不要なものであった。

実践の場で、羅洪先はたしかに念慮を絶やすことができない危機感を覚え、むりやりに念慮を除去させようとした。これでは、現実世界を避ける結果を導いてしまうかもしれない。積極的に「事情錬磨」している現成派と異なって、現実世界を避けてしまったのであれば、工夫もおのずから「静坐」なるであろう。

『伝習録』で「九川」と呼ばれていた人物は、陳九川である。彼は、江西省臨川出身の人で、羅洪先と書簡を交換したことがある。羅洪先は陳九川に宛てた書簡、即ち「答陳明水」¹⁶⁴で、寂感動静の問題を討論した。『伝習録』における陳九川の疑問は、当時の陽明学界でしばしば討論された問題と関連する。先に述べたように王陽明は孟子の言う「不動心」、「静」を提唱したが、念慮の断絶を説かない。人間は日常生活で念慮を完全に断絶することができないからである。そのため、念慮を断絶しようとし、世俗から離れ、静坐を行う修行者が多い。周知のように静坐とは、儒、道、仏の修行方法の一つとして、よく使われていた。羅洪先も、先引用した書簡「答王龍溪」（1534）の二年後、嘉靖18年（1536年）の「冬遊記」で、静坐を試みたことがあると告白した。「冬遊記」から、羅洪先が「静坐」に言及した部分を取り上げよう。

龍溪は議論の合間に、唐荊川が最近、格別な境地に到達したことをほめたたえ、次いで私に（最近の到達点を）尋ねた。そこで私は正直に、「数年前から服喪していましたが、もちろん自分を諦めたりはしていないのですけれども、友達と疎遠になってしまい、進歩がありませんでした。最近、静坐の時に、精神は収斂すべきで、発散させてはいけないこと、一切が寂然になってこそ帰着するところがあるということが見えてきました。」と答えた。龍溪が、「自信のほどは如何？」と尋ねたので、私は「まだまだ遠いです。」と回答した。龍溪は押し黙った。十一日、私は誘われて都城の名所を観光し、正午の少し前に、麒麟門から観音寺に入った。（みな）座り終わったところで、龍溪が、「寂然となることができたかい？我々は『静』を口にしながら、結局は、『静』に帰することがありません。多くの適切ではないところがあるからです」と言った。

（『羅洪先集』 pp.53～54 原文：龍溪語間極贊荊川近來造詣迥別處，且以探余。余因呈曰：「數年前居喪，雖不敢自放棄，畢竟朋友疎遠，不得長進。近於靜坐中稍見精神當斂束，不宜發散，一切寂然，方有歸宿。」龍溪曰：「自信何如？」余曰：「此去尚遠。」龍溪嘿然。十一日，邀余觀都城勝概，薄午，自麒麟門入觀音寺。坐定、龍溪問曰：「寂得下否？吾人說靜終不歸靜，有多少不妥帖處。」

羅洪先は、ずっと進歩がなかったので、静坐を通じて寂然の境地に至ろうとしていると、王畿に告白した。1534年の「答王龍溪」を執筆する時に解決できなかった課題がそのまま

¹⁶⁴ 「答陳明水」（嘉靖29年、1550年）『羅洪先集』 p. 200

残っていたのである。「冬遊記」の時点までに、彼の静坐修行も、うまくいかなかった。王畿が指摘したように、静を口にしながら、心を静かな状態させることができなかった。

中嶋隆蔵氏は『静坐—実践・思想・歴史』¹⁶⁵で、『明儒学案』の卷三五を引用し、「郎中何克齋¹⁶⁶先生祥」の文章を、「静坐」によって妄念や雑念を停止させ、心の本体が虚明であると分かれば、虚明なる心の本体はあますところなく作用を現してあまねく流行するが、ただし、妄念を取り除くことに執着したり、虚明なる心を措定して追求したりするのは、逆に執着心を生み出し、目的から隔たらせるだけである、と強調し、「静坐」と言っても、所謂「静坐」とは異なって、あらゆる面で無執着を徹底した実践であることが表明されている」と要約している。以上の中嶋の文章は、静坐しても『静』に帰することがありません」と王畿が喝破した理由を説明したものであるとも解釈できる。王畿は「静坐」に反対しなかったが、逆に「静坐」を強調することもなかった。「静坐」について、王畿は、こう述べる。引き続き中嶋（2012）から引用する。

古くは、人に教える場合、ただ蔵修遊息を言うだけで、専ら閉関静坐を説くことなどなかった。もし日々に応感し、時時に収攝し、精神が和暢充周して欲に動かされなければ、それで静坐と同様なのだ。もし、現在感応がはかばかしくなく、必ずや閉関静坐し、無欲という本体を養成するのを待って、ようやく仕上がったとするなら、現在の工夫に蹴躓くだけでなく、どうしても静を喜び動を厭うことになってしまう。世間と交渉が無くなってしまうと、どうしてまた世を治めることができようか。（古者教人、只言蔵修遊息、未嘗説閉関静坐。若日日應感時時收攝精神、和暢充周、不動於欲、便與静坐一般、若以見在感應不得力、必待閉関静坐、養成無欲之體、始為了手、不惟蹉却見在工夫、未免喜静厭動、與世間已無交渉、如何復經得世。三山麗澤錄）¹⁶⁷

王畿は、静坐しなくても静になれると主張する。王畿にとってみれば、日用人倫においても、精神収斂を行うことはでき、欲の影響を排除することもできる。静になるのは、特定の状態でだけ実現できるわけではない。この考え方は、程顥の「定性書」¹⁶⁸の「動亦定、静亦定」という立場に合致している。また、王畿の静坐観は、羅洪先とは異なり王陽明と一致していると言える。静坐の工夫は、宋儒からずっと提唱されてきたが、王陽明が、それについてこう述べている。

或る日、学問をおさめるの工夫について論がかわされた。先生がいう、「人にどう学ぶべき

¹⁶⁵ 中嶋（2012）p. 173 『静坐—実践・思想・歴史』第四章「明代儒者の「静坐」論」（2）—2「泰州学派における静坐観」

¹⁶⁶ 何祥。四川内江出身である。江西省吉安の陽明学者である欧陽徳（南野）と四川内江の陽明学者である趙貞吉（大洲）の弟子である。

¹⁶⁷ 中嶋（2012）p. 171

¹⁶⁸ 『二程集（上）』中華書局 p. 460

かを教える場合、ある特定の方法にとらわれていけない。もともと初学の時期には、人の心意はあちこちに飛び移って、一つのところに定着しえぬものであり、その思慮するところも人欲にかたよることが多いものであるから、だから、まず彼らにはとりあえず静坐して思慮をしずめることを教え、その心意がどうか一つところに定着するまでそれを続けさせることだ。といっても、あてもなくじつと静寂にふけり、槁木死灰の類に化すのはまるで意味がない。彼らには何よりも自分を内省し（人欲を）克服するようにしむけさせねばならない。そして、この内省と克服の工夫には間断があってはならず、（人欲に対して）あたかも盗賊を追い払うように、いささかの残留も許さないという心構えがなくてはならない。…」¹⁶⁹

一日、論為學工夫。先生曰：「教人為學、不可執一偏：初學時心猿意馬、拴縛不定、其所思慮多是人欲一邊、故且教之靜坐、息思慮。久之、俟其心意稍定、只懸空靜守如槁木死灰、亦無用、須教他省察克治。省察克治之功、則無時而可間、如去盜賊、須有個掃除廓清之意。…」(『王陽明全集』「伝習録中」 p.16)

王陽明は、明白に「人にどう学ぶべきかを教える場合、ある特定の方法にとらわれていけない」を説いた。静坐は最初に心を定めさせる方法であるが、ただ静坐するだけであるならば、空無の状態に陥るほかない。実践にとって、なにも役に立たない。ゆえに、「省察克治の功」も大切である。「この内省と克服の工夫には間断があってはならず」なので、静坐のような特定の時間にだけおこなう修行とは異なる。王陽明は、時々刻々の工夫を強調している。

ところで、静座については、それが心の働きを無くすことになる危険性が王陽明指摘されている。そして、羅洪先は、王陽明が念慮の排除が不可能であるとして「動静一貫」の工夫を強調したことを知っていたはずである。にもかかわらず、「冬遊記」の記録によれば、羅洪先は繰り返し周囲の友人から、欲根の問題をこれ以上考えないほうがよいと忠告されてもなお、欲根を捨てるという修行を諦め切ることができなかつたとされる。張氏は、羅洪先の「もし心に主宰があれば、すなわち欲がなくすることもできる。(知心能有主、則欲可使無)」(「桂陽重修濂溪祠記」(1555年))¹⁷⁰という言葉を引用し、羅洪先の「主静」工夫は心体の主宰性を強調した。すなわち、羅洪先は無理やりに念慮を排除せず、心の主宰性を保持する工夫を通じて、欲根を断ち切ろうとした。

羅洪先の主静思想の理論的な根拠を究明したいならば、まず羅洪先の「未発の中」の思想を明らかにすべきである。「未発の中」という概念は、『中庸』に起源がある。

『中庸』で、「喜怒哀樂の未だ発せざる、之を中と謂う。発して皆節に中る、之を和と謂う」と書かれていた。だが、なにが中で、何が和であるかについて、思想史のなかでいろいろな捉え方があった。たとえば、朱熹には未発の中と已発の和についての議論が多くあった。

¹⁶⁹ 溝口氏訳 (2005) 『伝習録』 pp. 66~67

¹⁷⁰ 『羅洪先集』 p. 127。張 (2009) p. 397 を参照

次に佐藤仁氏の『朱子』にそくして説明する。

佐藤仁氏の解釈によれば、従来からの未発・已発説について、ふたつの解釈があった。①は、感情がまだ発動せず、静かな状態を未発の中とし、感情が発動しているときを已発とする考え方である。②は、「本性を未発（静）とし、心を已発（動）とし、未発と已発との関係を本体とその作用ないしは現象という関係でとらえていこうとする考え方である。朱子は、張栻に出会った後に、①から②の立場に転向した。②の立場に立ったら、いろいろな問題点が出てくる。佐藤氏は、四つの欠点にまとめた。Ⅰ、良心の芽生えを発見することを工夫の眼目とするならば、落ち着きを失ってくる。Ⅱ、心が二つ（良心の芽生えとそれを察知するもう一つの心）に分裂してくることになる。Ⅲ、もし未発が性、已発は心ならば、情の位置が不明になる。Ⅳ、心を作用として、その作用の上だけに純粋性・自然性を追究していくと、悪くすると直情径行、粗暴で向こう見ずの蛮勇に陥る危険性になる。

この説の欠点について、朱子は、こう述べる。「性を未発、すなわち寂然として動かない本体とし、心を已発、すなわち本体の作用とする従来の考え方はまちがっている。性を未発とし本体とするのはよい。しかし、その場合の未発は、喜怒哀楽といった感情のはたらきが、まだ発動していないときという意味であって、未発を性とするのは、その未発のときに性というよりほかはないという意味なのである。そして、その性の作用は心ではなくて、じつには情と言われるものであり、その性と情を、そのなかに包みこんで統括しているのが心なのである。したがって動いているとき、すなわち已発のときだけが心ではなく、静かなとき、すなわち未発のときも心なのである。心は一身の主宰として、動静語黙を通じて存在しているのである。」¹⁷¹つまり、心は、性（未発）と情（已発）を統括している。性と情を統括する心は「一身の主宰としての役割を果たすために」¹⁷²、敬の工夫が必要である。佐藤氏は「敬」について、「敬は心のつつしみのことである。心をつねにひきしめて、散漫にならぬように、だらけないようにすることである。いうなれば一種の精神統一であり、精神を何かに集中させることでもある。程子や朱子の、有名な敬の定義に、「主一無適」（位置を主として適くなし）というのがある。心を一つのことに集中して、よそ見をしないことである。

¹⁷³」

要するに、朱子の「持敬」説は、心を収斂させる工夫である。佐藤氏によれば、朱子の「敬」と『中庸』の首篇で言う「是の故に君子は其の睹ざる所を戒慎し、其の聞かざる所を恐懼す」とは同じである。戒慎恐懼、人間の道から乖離しないためのくふうとして説かれているのであるから、いつも行われるわけであり、動静を通じる工夫である。だが、「戒慎恐懼」は「未発静時における心のつつしみを説いたものであって、つまりこれは存養のくふうのことであり、朱子はこれを心につけるくふうの基本であると重んじる。」¹⁷⁴

すべての感覚が寂然な状態で、事物の対応を準備している段階において、心を慎むことは、

¹⁷¹ 佐藤（1985） p. 182

¹⁷² 佐藤（1985） p. 183

¹⁷³ 佐藤（1985） p. 183

¹⁷⁴ 佐藤（1985） p. 186

存養の工夫にほかならないであろう。すなわち、朱子学の場合において、戒慎恐懼（敬）の工夫は、動静を貫くけれども、未発静時の工夫である存養の工夫が基本的な工夫である。静坐は、存養の工夫において最も効果的な手段である。¹⁷⁵

以上は、佐藤氏の『朱子』を踏まえた、未発、主静に関する説明である。佐藤氏は朱子が「中和旧説」を改めることによって始めて存養の工夫の意義を了解したと指摘した。羅洪先は、朱子のように、動静一貫の工夫である「現成良知」説を受け入れた後に、存養工夫の意義を確信し、主静の工夫を行った。羅洪先が当時の学風への批判も、朱子が動的な学問を提唱する湖南学派への批判と近づいたと私は気になる。羅洪先の悩みと心配は、思想史で見られると考える。

静坐を通じて、しばらく現実社会まですこし距離を置いて、感情がまだ発現するまえに（未発の状態）心の本来の状態を表し、是非判断を完全に心体に任せること、すなわち静坐で心体を涵養する修行方法は、羅洪先に影響を与える陳献章の思想にも見られる。羅洪先も、自分が挫折して迷っているときに、「白沙先生が述べた致虚立本の学説は、まるで私を再生されるである。（白沙先生所謂致虚立本之説真若再生我者）」（「答湛甘泉公」）¹⁷⁶と述べて、陳献章（白沙）の学問に極めて賛成していた。陳献章の学説について、『明儒学案』で、黄宗羲は次のように総括した。

先生の学は、虚を基本とし、静を入口とする。（先生之学、以虚為基本、以静為門戸。
『明儒学案』 p.80)

陳献章自身も、古典を読んで進歩できなかった時に、次のように述べていた。

...ゆえにその繁雑な工夫を捨て、吾にとっての切実なものを求める。工夫は静坐だけである。静坐したら、心体が現れる。ひっそりして見えないけれども、確かに存在している。日用の間のいろいろな対応が、やりたいようにやっても、馬を操るようにコントロールできる。聖人の教えに自分が道理を問い質すときに、手がかかりがある。水には源泉があるようなものだ。（於是舍彼之繁、求吾之約、惟在静坐。久之、然後見吾此心之體、隱然呈露、常若有物、日用間種種應酬、隨吾所欲、如馬之御銜勒也；體認物理、稽諸聖訓、各有頭緒來歷、如水之有源委也。『明儒学案』卷五 p.81)

陳献章にとって、静坐を通じて、心体が自然に現れることができる。つまり、静坐を通じて、人為的なものを排除し、心を縛られないように、心を自由にさせる。心の主体性を確定しておく。心体がありのままに現れると、行動中でも人間の本性を自由に発揮できる。天理の体認でも、古典の解読でも、静坐を通じて進歩できる。日常生活においても、この存養し

¹⁷⁵ 佐藤（1985） p.188

¹⁷⁶ 『羅洪先集』 p.237

た心体が人の行動に道徳的指針を提供している。この文章を読むと、静坐はが陳献章のところで、非常に重要な工夫であることが分かる。目的から見れば、「未発存養」「主静」の工夫という点では、羅洪先と陳献章とは一致した見解をもっていたと言えよう。

実に、羅洪先は、陳献章思想を実践するかのよう、石蓮洞で静坐しながら、その一方で、必要な時に地方と宗族の事務をしていた¹⁷⁷。たとえば、族譜の編纂や、宗族の管理や、庶民の道徳教化や、税金問題などいろいろな社会、政治活動をしていた。嘉靖 25 年（1546 年）羅洪先は石蓮洞を修繕し、そのあと、しばしば石蓮洞で講学を行った。張衛紅氏は、江右学派が講学活動を行う際、その参加者のなかには地方の権力者が多く含まれていたもので、江右学派は地方の文化資源を握っていて、さらに江西、特に吉安の政治、文化に影響を与えると指摘した。¹⁷⁸この指摘が正しければ、羅洪先は「主静」工夫をきちんと実践したと言えよう。

張氏の考察によれば、羅洪先は 30 年代から「主静」の工夫を始めて、嘉靖 20 年（1541 年）から「主静」をさらに重視するようになり、嘉靖 26 年（1547 年）に至って、「主静」思想を確立させた。また、張氏は、羅洪先が聶豹の影響を受けて「主静」に転向しようとしたわけではなく、「主静」思想を実践して、進歩があったために、聶豹の帰寂説と合致してきたと指摘した。¹⁷⁹

嘉靖 29 年（1550 年、羅洪先 46 歳）、羅洪先は弟子尹道與宛ての手紙で、未発の中の工夫について、こう述べた。

樹木は盛んに生長しても、必ずすぐに枯れる。人は常に動く生き物だが、必ずすぐに死んでしまう。天地（自然界）でさえ休憩時間が必要であり、まして人間は言うまでもない。このことの道理は、極めて容易で明らかである。必ず未発の中があってこそ、節度にぴったり当たっている已発の和がある；廓然大公（の本体）があってこそ、物を対応するとき物に順応する感応がある。（原文：木常發榮必速槁、人常動用必速死、天地猶有閉藏、況於人乎！此事理至易明也。必有未發之中、方有發而中節之和；必有擴然大公、方有物來順應之感。『羅洪先集』 p.251）

以上の文章を読むと、羅洪先は已発より未発を優位に置いていることが分かる。聶豹の学説は、王陽明の学説よりも、「体」を大切に、「用」を軽視する傾向が強い。この傾向は、この時期の羅洪先思想にも適用できると言えよう。荒木見悟氏は、もともと「身心意知物を一体化し」た陽明学と違って、聶豹の帰寂説は、はっきりと物我を分けたと指摘した。荒木見悟氏は、聶豹の思想に対して、「感・未感によって心のあり方に一つの区分を立て、また心と物の間にも一つの界線をほどこすものである。こうして已発の事用から切離された本体の保存と培養に全力を注ぐのが、その帰寂説の眼目となるわけであるが、それは陽明より

¹⁷⁷ 張（2009） pp. 122～144、羅洪先は地方政務に参加することを詳しく書いた。宗族の管理や、庶民の道徳教化や、税金問題などいろいろな社会、政治活動をしていた。

¹⁷⁸ 張（2009） p. 170

¹⁷⁹ 同上 p. 196

眺める時、明らかに守寂の一層に空転するものと断定されざるを得ない」¹⁸⁰と批判していた。荒木見悟氏の批判は、この時期（まだ収攝保聚を提出しない）の羅洪先にもふさわしいと考える。

3.2.3 晩期（51歳以後）—動静貫通の「収攝保聚」

羅洪先は、「主静」思想の代表人物として、彼の「主静」思想は、いったいどの程度に発展するのか考察すれば、彼の晩年思想を考察しなければならない。

周知のように、羅洪先晩年の学説で、一番代表的な学説が「収攝保聚」である。「甲寅夏遊記」において、「収攝保聚」という言葉が何回も出てきた。羅洪先にとって、とても重要な概念である。嘉靖33年（1554年、羅洪先51歳）の『甲寅夏遊記』において、「収攝保聚」をこのように述べる。

寂は一つだが感は一つではない。だから動があり静があり作があり止がある。人は、動と作が感であることを知っているが、静と動、作と止との違いが境¹⁸¹（=状況）にあることを知らない。しかし、吾心は境によって変らない。境によって変わっている感は、寂と離れる感である。万変に酬酢しても、寂なる者において礙えることがないし、礙えないわけではない。われに主とする所があるからであり、もしも主とする所がなければ、馳けずり廻ってもとにもどらない。「また」声臭がみな泯んでも、感たる者において息まないことはないし、やまないわけではない。われに倚りかかるものがないからであり、もしも倚りかかるものがあると、膠着して通じない。これが収攝保聚の功であり、「君子は幾を知る」の学というものである。¹⁸²（寂者一、感者不一、是故有動有静、有作有止。人知動作之為感矣、不知静與動、止與作之異者、境也、而在吾心、未嘗隨境異也；隨境有異、是離寂之感矣。感而至於酬酢萬變、不可勝窮、而皆不外乎通微、是乃所謂幾也。故酬酢萬變、而於寂者、未嘗有礙、非不礙也、吾有所主故也。苟無所主、則亦驅逐而不返矣；聲臭俱泯、而於感者、未嘗有息、非不息也、吾無所倚故、苟無¹⁸³所倚、亦膠固而通矣、此所謂收攝保聚之功、君子知幾之學也。『羅洪先集』p.82～83）

羅洪先は、「収攝保聚」の功すなわち「知幾」であることを指摘した。「収攝保聚」は儒家経典で見られないので、ここでは、「知幾」を解釈する。「知幾」は『易』の言葉である。『易』

¹⁸⁰ 荒木見悟（1984a）p. 40

¹⁸¹ 境について、『漢語大詞典』はこう述べる。「仏教において、心意の対象である世界を指す。」p. 1246

¹⁸² 荒木（1984b）p. 82 荒木氏の翻訳を参考した。荒木氏は、訳文の一部を省略したので、私が中略の部分「人知動作之為感矣、不知静與動、止與作之異者、境也、而在吾心、未嘗隨境異也；隨境有異、是離寂之感矣」を翻訳した。

¹⁸³ ここで、『羅洪先集』で「苟無所倚」と記されるが、張衛紅氏の引用文で、「苟有所倚」と記される。張（2009）p. 443

によれば、「知幾」¹⁸⁴とは神妙な工夫である。「幾」という文字は、「事の動きの隠微なもの、吉凶の前兆である」。¹⁸⁵周濂溪は、幾について、「動而未形、有無之間者」¹⁸⁶と説いた。張衛紅氏の考察によれば、学者たちはそれぞれの意見を持っていたが、羅洪先も周濂溪のように「有無の間」という表現を使って「幾」を説明した。羅洪先にとって、「幾」は、心体が発動した最初、善悪の意念がまだ形成されない状態である。¹⁸⁷

では、「収攝保聚」とはどういうものなのか。呉震氏は、「収攝保聚之功」の「功」を効用と解釈する。私の理解で、「知幾」は工夫の名目であり、「収攝保聚」が工夫の内実である。先の引用文を見ると、「収攝保聚」とは、先の引用文の言うように、常に（特定な環境だけではない）「寂」なる心の主宰性を保持することで、外界に自然に順応し、対応する工夫である。「収攝保聚」の本質を説明するために、ここで、「甲寅夏遊記」における現れる帰寂感も紹介する。

そもそも、心は一つである。その位を出ない点から寂という。位には一定の品格があるが、内を墨守するのではない。心は常に微と通じるといふ点から言えば、感と謂える。感は、微から発動しひろくいく。単なる外物を追いかけることではない。寂は、内を墨守することではないために、場所に関する言葉で寂を説明してはいけない。（寂である状態に見えるけれども、）感応が内に入るからである。感を絶った寂は、真の寂ではない。感は外物を追いかけることではない。時間に関する言葉で寂を説明してはいけない。もともと寂なるものだからである。「逆に」寂を離れた感は、正しい感ではない。「この両者は」同出にして異名であり、わが心の本然である。¹⁸⁸（夫心、一而已。自其不出位而言、謂之寂。位有常尊，非守内之謂也；自其常通微¹⁸⁹而言、謂之感、發微而通、非逐外之謂也。寂非守内、故未可言處、以其能感故也、絶感之寂、寂非真寂矣；感非逐外、故未可言時、以其本寂故也、離寂之感、感非正感矣。此乃同出而異名、吾心之本然也。『羅洪先集』 p.82）¹⁹⁰

寂とは、安定した心体であり、感とは、現実的な事物に対する感応である。羅洪先の寂観を解明すれば、彼の体用観、已発・未発観も分かると考えられる。聶豹の学説で、寂然が感応を主宰¹⁹¹すると主張していた。言い換えれば、本体は工夫を主宰し、未発は已発を主宰

¹⁸⁴ 『易』で「知幾其神乎、君子上交不諂、下交不瀆、其知幾乎。」という文章がある。本田の訳は次の通り：「幾を知ること、それこそ神わざであろう。恭々しく交際してへつらわず、目下の者と親しく交わって狎れ過ぎない。恭々しいのとへつらうのと、親しいのとと狎れ過ぎるのと、そのけじめは極めて隠微である。そこを区別しうる君子こそ幾を知るものであろう。」本田済訳（1997）pp. 591～592

¹⁸⁵ 『易』で「幾」を「（幾者動之微。吉{兇}之先見者也。）幾とは事の動きの隠微なもの、吉凶の前兆である。」本田済訳（1997）p. 592

¹⁸⁶ 周濂溪「通書」。ここでは便宜的に『宋元学案』p. 484を参照した。

¹⁸⁷ 張（2009）p. 455 原文：「幾」為心體發動之初、尚未形成善惡意念的狀態。

¹⁸⁸ 荒木見悟（1984b）p. 82。そこでの荒木氏の翻訳を参考した。

¹⁸⁹ 「體用一源、顯微無間」『二程集』「易伝序」p. 582

¹⁹⁰ 荒木見悟（1984b）p. 82。そこでの荒木氏の翻訳を参考した。

¹⁹¹ 『聶豹集』p. 242「夫本原之地，要不外乎不睹不聞之寂體也。不睹不聞之寂體，若因感應變化而後有，

する。以前の羅洪先であれば、「感」より「寂」のほうが、「用」より「体」のほうが大切だと考えたかもしれないが、「甲寅夏遊記」の時点に、羅洪先はすでに「寂感一体」の立場に立った。寂感観について、彼は聶豹より王畿のほうに近づいた、と言えよう。

荒木見悟氏は聶豹の帰寂説を説明するときに、こう述べた。「未発の中になぜそれだけの絶対権限があるのか？それは、大本すでに立てば、そこから発するものは自然に節に中るからである。」¹⁹²すなわち、「帰寂説」は、特徴から言えば、寂体として大本（心体）を絶対的な優位にさせる。ゆえに工夫は、未発の段階にすべきである。未発の段階ですれば十分である。この工夫とは、予めの「立本」工夫である。もっと詳しく言えば、已発の和の境地に至るためには、未発の中で「大本」をまず立てなければならぬ。「帰寂説」は、もちろん主静的な学説だけれども、「立体」（実践するまゝにまず心体を充実し涵養すること）こそ「帰寂説」の不可欠な工夫だと言える。しかし、羅洪先が説いた「通微」の工夫は、先ほど述べたように、心において「善悪の意念がまだ形成させない状態」を把握する工夫であり、「体」と「用」、「無」と「有」をしっかりと貫いて、まず「体」を立てる必要がない。羅洪先は、「収斂」、「主静」を提唱したが、この「収斂」、「主静」の工夫は、未発の段階でも、已発の段階でもできる工夫である。

この点から言えば、羅洪先の「主静」思想と聶豹の「主静」思想とは、本質的に異なっていた。ゆえに、このレベルまで発展した羅洪先の「主静」思想は、彼の自己評価のように、「慎動」¹⁹³の学説と言ってもよいと考える。羅洪先の自己評価は、妥当な評価だと言えよう。

この完全に寂感貫通な工夫—「通微」、「知幾」をしている考え方は、王畿の「一念独知」、「一念の微」¹⁹⁴の考え方に近づいたのであろう。なぜならば、二つは直接に心体においてされる工夫からである。そのため、私は「甲寅夏遊記」の時期に羅洪先が聶豹の「帰寂説」を超越したと考える。

4. 「収摭保聚」の内実

「収摭保聚」にたいする評価について、先行研究には異なる意見がある。『聶豹・羅洪先評伝』で、呉震氏は、羅洪先の工夫がまだ「主静」思想を捨てていないという意見を提出した。『甲寅夏遊記』（嘉靖33年、1554年、51歳）を分析するときに、呉震氏は、以下のよ

即感應變化而致之，是也；實則所以主宰乎感應變化，而感應變化乃吾寂體之標末耳。」荒木見悟訳：「その本原の地、要するに暗ず聞かざるの寂体に外ならず。暗ず聞かざるの寂体、もし感応変化に因って後ありとせば、感応変化に即してこれを致すは、是なり。実は即ち「寂体は」感応変化を主宰する所以にして、感応変化は、乃ち吾寂体の標末のみ。」荒木見悟（1984a）を参照。

¹⁹² 荒木見悟（1984a）p. 49

¹⁹³ 「甲寅夏遊記」で、羅洪先は、自分の学説に「謂之主静可也、謂之慎動亦可也」と片付ける。

¹⁹⁴ 張（2009）p. 315 張衛紅氏によれば、「一念の微」と「幾」は同じ意味である。（原文：「一念」不是分別意識層面已經形成了的「念頭」、而是從超越層的良知心體立根、是良知心體將動之出的端倪、萌芽、也即『易經·繫辭』所謂「幾者、動之微」的「幾」。故龍溪喜用「微」字表達、說明「一念之微」與「幾」同義。）

うに評価した。「念庵（羅洪先）は、ここで「寂感合一」、「動靜隨時」を強調したようだが、結局、彼は「主靜守寂」の立場を諦めなかった。却って、念庵は「主靜思想」を、さらに円熟させていた」。

理由としては、羅洪先が「甲寅夏遊記」において、自分の学説を「主靜と言ってもよいし、慎動と言ってもよい」と纏めたが、羅洪先にとって、事物に従って致知の工夫をすることと比べて、「主靜収斂」のほうこそが「致良知」の方法であると、呉氏は述べている。本体論から見れば、羅洪先は確かに「動靜合一」を主張していたが、工夫論から見れば、「主靜」のほうが致良知の工夫である。¹⁹⁵つまり、呉氏は、心体から言えば、羅洪先と王畿の立場が同じだけれども、工夫論から言えば、二人の工夫が異なっていたと主張した。

それに対して、張氏は、羅洪先が「甲寅夏遊記」の時期（51歳の時）に、本体論とも、工夫論とも、王畿と同じ立場に立っていたと主張した。張氏の評価によれば、「收攝保聚」は内容も、工夫も「偏靜」、「專内」を超越し、動靜、内外一体の一致性を持っている。¹⁹⁶また、張氏は、羅洪先の学説は王畿に近づいたが、学説の境界がまだ王畿、王陽明の高度に至らないうちに、残念ながら羅洪先がなくなってしまったのであり、もっと時間があれば、彼の思想はさらに王畿に近づいたかもしれないと評価する。¹⁹⁷

私は、呉氏の意見よりも張衛紅氏の意見に賛成する。3.2.3で、引用された荒木見悟氏の指摘を引用して分析したように、羅洪先と聶豹は、工夫論から言っても、本質的に異なっていた。では、羅洪先は王畿に近づいたのか、次に私の考え方を紹介する。

3.2.3で述べたように、羅洪先の「通微」、「知幾」の学問と王畿の「一念独知」、「一念の微」の工夫は、同じ工夫ではないけれども、本体を工夫の着目点とするという点から見れば、同じと言える。

荒木見悟氏は、羅洪先と王畿の工夫論の違いについて、以下の評価をしている。「竜溪の円通自在な頓悟主義の哲学と、念菴の収斂安静な漸修主義と比較して、きわだった対照をなすのは、前者においては「一即多・多即一」の論理が常にその全体構造に躍動しているに対して、後者においては「寂は一つだが感は一つではない」といわれるように、一と多との結合関係がやや弛緩しており、（一多無尽でない）、必ずしもその全体構成を緊密に貫いていないということである。…念菴は竜溪に対して、その収斂説が「終日応酬しつつ、終日収斂安静にして、少しも奔放駆逐の病なき」ことと誇ったが、竜溪よりすれば、いかに念菴が動靜一如を叫んだとしても、それは一即多・多即一の論理をぼかした、個と全・動と靜・感と寂・主と客の緊張関係ややたるんだ格調高からぬ良知説と受取られたのである

¹⁹⁵ 原文：雖然念庵在這裡似乎也強調了「寂感合一」、「動靜隨時」、但是歸根結蒂、念庵並沒有放棄「主靜守寂」的思想立場。恰恰相反、由上面標明念庵的「主靜」思想已經變得更加圓熟。吳（2001）pp. 222～223

¹⁹⁶ 張（2009）p. 463 原文：「念庵以「收攝保聚」為中心的為學主張、在良知本體和致知工夫上都認可了良知寂感動靜的渾一性…本體、工夫內容、工夫形式都超出了中期的「偏靜」、「專内」的傾向、具有動靜、内外一體的一致性。」

¹⁹⁷ 張（2009）p. 473 原文：「只惜念庵早逝、似于陽明、龍溪之圓熟境界稍遜一籌。天若假年、其進曷極？亦當與龍溪立論的深意契合會與心矣、雙方現成良知之爭或許會消弭基本的誤解而划上一個圓滿的句號。」

う。」¹⁹⁸

私は、荒木見悟氏の評価は、とても優れた議論だと考える。羅洪先の工夫論において「まず体を立てる必要がない」という点を 3.2.3 で強調したけれども、それは「体を立てる」必要がないということの意味しているわけではない。羅洪先は、心体を工夫の着目点としても、「立体」、「収斂」の工夫を捨てたことがない。言い換れば、羅洪先は、体用一源の立場に立ったが、王畿のように体用一源の考え方を徹底化することをしなかった。羅洪先は王畿のように良知を信頼せよ提唱したけれども、王畿のように完全に良知に任せることをしなかった。確かに、羅洪先は荒木見悟氏の指摘のように、「一即多・多即一の理論をぼかして、個と全・動と静・感と寂・主と客の緊張関係ややたるんだ」などの欠点があるが、原理から見れば、「収摺保聚」説は実践するまえに予め自分を充足し、準備する必要がなく、本体に直接において行われる工夫であり、理論的に「体用一源」を徹底化した可能性があるとして、私は考える。「収摺保聚」羅洪先の工夫論の発展から見れば、彼は最初に聶豹のように寂を感に優先させるが、徐々「寂感一体」、「体用一源」の立場へ変えようとして、最後に「収摺保聚」の工夫を提出していた。もし羅洪先は長生きし、もっと進歩したならば、「主静」の工夫を用いて、「体用一源」を貫徹できたかもしれない。もしこの仮説が正しければ、羅洪先の学説は、ある意味で、「主静思想」で陽明学を発展させていたと評価できるかもしれない。

私は羅洪先を研究しているけれども、王畿を本格に研究したことがない。王畿の思想を詳しく分析できない。しかし、工夫論から言えば、少なくとも「体用観」のほうで、王畿と羅洪先はお互い歩み寄ったと考える。そこで、私が理解している限りで言えば、ふたりの工夫の展開のプロセスが異なったのであろう。天才の立場でなく、普通人の立場に立てば、王畿よりも羅洪先の修行方法のほうが行いやすいかもしれない。嘉靖四十一年（1562年、羅洪先 59歳）、二人は松原¹⁹⁹で面会した。この面会の後、羅洪先は、「松原志晤」を書き、王畿は「松原晤語」を書いた。その時の面会では、二人は道教の修行に関する意見交換を行った。私は、道教に詳しくないので、詳しい内容を、ここでは取り上げない。私が気になることは、王畿の記録で、王畿が羅洪先の「世間には現成の良知あるなし、知は万死の工夫にあらずんば断じて生くる能わず²⁰⁰」という発言を聞いて、反省の姿勢を示したという点である。荒木見悟氏は、「念菴の苦言が竜溪にある種の反省をうながしたのは事実であるが、その漸進的な収斂主義が、必ずしも全面的に竜溪の受容する所とならなかったのも事実である。頓であれ、漸であれ、現成良知への信頼なくては成り立ち得ないというのが竜溪の一貫した立場であり、現成良知とは究極的には一定の規矩を認めないものであったのだから」²⁰¹と評価した。だが、王畿が羅洪先の学説を理論的に認めなかったとしても、羅洪先の工夫に対して苦心、すなわち「主静」思想で優れた点を十分に理解していたと、私は考える。2.2.2 で、羅

¹⁹⁸ 荒木（1984b）pp. 84～85

¹⁹⁹ 吉水地名

²⁰⁰ 同上 p. 83

²⁰¹ 同上。pp. 83～84

洪先は王畿の「一念」の工夫の着目点を理解しなかったので、王畿に対して激しく批判したことを書いた。「甲寅夏遊記」の時点で、羅洪先はすでに王畿「一念の微」の工夫を理解していた。羅洪先から見れば、王畿の工夫は危険性（たとえば修行＝「致」が不足）を持っているが、羅洪先が王畿学説の理論的な構造と長所を理解していた。ゆえに、その二人が、さらに交流を重ねたならば、お互いに理解して、相手の学説を認めた可能性が高いと、私は考える。

5. 総括

本論は、羅洪先の「思想変遷」に着目した。まず先行研究における、さまざまな羅洪先評価の分類を紹介した。羅洪先思想に対して学者たちの理解が様々であると指摘した。先行研究において、羅洪先思想が本当に陽明学を継承するかという問題をめぐって、古来から争論が存在していた。学者たちは、羅洪先思想への評価も異なっている。私は、そのなかで代表的な意見をまとめた。第二章で、羅洪先が、王畿から受け入れた「現成良知説」の受容状況を説明した。表面的に見れば、羅洪先は、「現成良知説」にたいして賛成の立場から反対の立場に徐々に移っていた。しかし実に、晩期になって、羅洪先は「未発・已発」「寂感」などの諸問題について、後世の学者から同じ「帰寂派」に分類される聶豹よりも、王畿のほうを賛成していた。羅洪先は、「現成良知説」を受け入れながら「主静思想」を発展させたと論じた。第三章で、私は、青年時代から羅洪先思想の底に流れていた「主静思想」を分析した。羅洪先は、「主静」思想を発展させて、最終的に本体論から言っても、工夫論から言っても、「動静一体」の立場に立った。第四章で、「収摺保聚」の内実を説明した。従来の研究では、しばしば羅洪先と聶豹を同じ「帰寂派」として扱う。たとえば、呉震氏（2001）で、「羅洪先論」という一節の序論（引言）で、「具体的な内容から見れば、（羅洪先の「収摺保聚」工夫は、）聶双江（聶豹）の「帰寂」思想と、本質的な区別がない」²⁰²と評価した。しかし、実に羅洪先と聶豹の思想の隔たりは大きい。私は、羅洪先思想を研究するときに、彼が晩年になって、「帰寂説」を超えて、「主静思想」を徐々に「動静一体」思想へと変えていた事実を大切にすべきだと感じている。最後に、議論がさらに詰めていかれたならば、二人はお互いの学説を認め合った可能性がある。修士論文は、羅洪先の思想変遷について論じたが、まだ多くの問題が残っている。たとえば、羅洪先と王畿の最後の交流を記録した資料—「松原志晤」を分析していない。これは、論文の一番の欠点であるかもしれない。また、羅洪先の仏教、道教観についてまったく研究できなかった。羅洪先の養生術（静坐に対して重要な内容）も扱うことができなかった。以上の問題は、将来の課題とした研究するつもりである。

²⁰² 呉（2001）p.171（原文：…就其具體內容來看，與雙江的“歸寂”思想並無本質上的區別。）

引用文献

- 『羅洪先集』(2009) 鳳凰出版社
『王畿集』(2009) 鳳凰出版社
『聶豹集』(2009) 鳳凰出版社
『宋元学案』(1985) 中華書局
『明儒学案』(1985) 中華書局
『王陽明全集』(1992) 上海古籍出版社
『漢語大詞典』(1997) 漢語大辭典出版社

参考文献

- 荒木見悟(1984a)「聶双江における陽明学の後退」『陽明学の展開と仏教』研文出版,pp.35～62,
荒木見悟(1984b)「羅念菴の思想」『陽明学の展開と仏教』研文出版,pp.63～91,
荒木龍太郎(1977)「羅念菴の良知説について：王竜溪との関連を通して」『中国哲学論集』3, pp. 43～55,
岡田武彦(2004)『王陽明と明末儒学(上)』明德出版社
岡田武彦(2009)『宋明哲学の本質(下)』明德出版社
金谷治(1963、改訳1999)『論語』岩波文庫
小林勝人訳注(1972)『孟子(下)』岩波書店
小林勝人訳注『孟子(上)』(1968) 岩波書店
佐藤仁(1985)『朱子』集英社
小路口聡(1996)「王畿「致知議略」精読」『東洋大学中国哲学文学科紀要』第十七号, pp.45～76,
小路口聡(2010)「王畿の「一念」思想—王畿良知心学原論(1)」『東洋大学中国哲学紀要』18,pp.17～58
中嶋隆蔵(2012)『静坐—実践・思想・歴史』研文出版
福田殖(1973)「羅念菴」『陽明門下(上)』明德出版社,pp.337～407
福田殖(1996)「王龍溪と聶双江—「致知議略」における良知論争」『陽明学』第八号, pp.2～15
福田殖(2016)『宋元明の朱子学と陽明学』 研文出版
本田濟訳(1997)『易』朝日新聞社
溝口雄三訳(2005)『伝習録』中央公論新社
矢野野隆男(2016)『中庸・大学』角川ソフィア文庫
容肇祖著,荒木見悟、秋吉久紀夫共訳(1996)『新版明代思想史』,(容肇祖氏著『中国歴代思想史(五)明代卷』(1993年台湾文津出版社刊)を全訳したものである。)北九州図書

館

呉震（2001）『聶豹 羅洪先評伝』（『聶豹 羅洪先評伝』）南京大学出版社

呉震（2003）『陽明後学研究』（『陽明後学研究』）上海人民出版社

張衛紅（2009）『羅念菴的生命歷程与思想世界』（『羅念菴の生命歷程と彼の思想世界』）三聯書店

方献猷（2011）『王畿評伝』（『王畿評伝』）南京大学出版社

林月慧（2005）『良知學的轉折：聶雙江與羅念菴思想之研究』（『良知学の轉折：聶双江と羅念菴思想に関する研究』）臺大出版中心

電子版 5 『龍溪王先生會語』 <https://sites.google.com/site/longxiwangxianshenghuiyu/-long-xi-wang-xian-sheng-hui-yu-yi-zhu>（これは、『龍溪會語』（ウェブによると、『龍溪會語』が「王龍溪が講友達と討議した内容のエッセンスを集成した」ものである。）の原文と翻訳を word で載せるウェブサイトである。会読参加者：吉田公平・小路口聡・早坂俊廣ほか

平成 30 年度 修士論文

Seeking an Effective Pedagogy of
English Perfectives: To Teach
English Perfectives

信州大学大学院人文科学研究科言語文化専攻

15LA105A 藤沢翔

Contents

0. Abstract.....	80
1. Introduction.....	80
2. Overview of English Perfectives.....	81
2.1 Previous Studies.....	81
2.1.1 Present Perfect in English Textbooks in Japan.....	81
2.1.2 Quirk et al. (1985).....	82
2.1.3 Huddleston and Pullum (2002).....	83
2.1.4. Somiya (2012).....	83
2.1.5 Shortcomings of the Past Scholarship.....	84
2.1.5.1 Issues Not Mentioned in Previous Studies.....	84
2.1.5.2 The Problem.....	84
2.2 Consideration.....	84
2.2.1 Theories.....	84
2.2.1.1 Vendler.....	84
2.2.1.2 Telicity.....	85
2.2.1.3 Lexical Conceptual Structure (Jackendoff 1983, 1990)	86
2.2.2 Present Perfect with Adverbials.....	88
2.2.2.1 The Usage of Present Perfect with an Adverbial.....	88
2.2.2.1.1 Previous Studies on Present Perfect and Their Shortcomings.....	88
2.2.2.1.2 Just Now Used with Present Perfect.....	89
2.2.2.1.2.1 Fujisawa et al. (2017)	90
2.2.2.1.2.2 Conditions Under LCS.....	93
2.2.2.1.2.3 Shortcomings of Fujisawa et al.(2017)	94
2.2.2.1.2.4 Summary of just now with present perfect.....	95
2.2.2.1.4 Adverbs of the experiential usage: before and often.....	96
2.2.2.1.5 Summary.....	96
2.2.2.2 The usage of present perfect with two adverbials.....	97
2.2.2.2.1 A Previous Study.....	97
2.2.2.2.1.1 Yamamoto (2016)	97
2.2.2.2.2 Data of present perfect with two adverbials.....	98
2.2.2.2.2.1 Completion vs. Continuative.....	98
2.2.2.2.2.2 Completion v.s. Experiential.....	98
2.2.2.2.2.3 Experiential v.s. Continuative.....	99

2.2.2.2.3 Consideration.....	99
2.2.2.2.3.1 Differences between the continuative usage and the completion usage.....	99
2.2.2.2.3.2 The differences between the experiential usage and completion usage.....	100
2.2.2.2.3.3 The differences between the experiential usage and continuative usage.....	100
2.2.2.2.4 Summary.....	101
2.2.3 Present perfect without adverbials.....	101
2.2.3.1 A Previous Study.....	101
2.2.3.1.1 Nishiyama (2013)	101
2.2.3.2 Consideration.....	102
2.2.3.3 Summary.....	105
2.3 Summary of Consideration.....	105
3. Applying Theory to Practice.....	105
4. Conclusion.....	107
Acknowledgement.....	107
References.....	108

0. Abstract

This study analyzes English perfectives and aims to clarify the differences in usage between perfectives with adverbial phrases and perfectives without adverbial phrases. We will review previous studies and their shortcomings. Chapter 2 focuses on perfectives with and without adverbials. To examine the usage of the present perfect with and without adverbials, the present study uses examples from the Corpus of Contemporary American English (henceforth, COCA) and analyze the differences between the present perfect phrases with and without adverbials. In Chapter 3, we will present methods for application in English education in Japan to improve pedagogy for teaching English perfectives. Additionally, we highlight problems that arise when teaching perfectives to Japanese English-as-a-Foreign-Language (henceforth, EFL) learners. Through this analysis, we propose a more effective teaching method for Japanese EFL learners.

1. Introduction

Japanese students struggle with the differences between perfective aspect and the past tense. This occurs because students learn a translation of the present perfect as “*-shita*”²⁰³. The Japanese *-ta* is treated as having the same meaning as the past tense and the present perfect. For Japanese students learning English for the first time how to express the ideal the present perfect can be confused.

In fact, Japanese EFL learners have difficulty fully mastering perfectives because they are taught several different meanings of the perfectives which can be ambiguous. For example, (1a) and (2), which are written by Japanese EFL students

²⁰³ *-shita* is a Japanese word that is neutral between two readings. It is considered both to the past tense and the present perfect in English.

are ungrammatical and unnatural:

- (1) a. Taro lost his key, so he cannot enter the room now.
b. Taro has lost his key, so he cannot enter the room now.
- (2) *John has left a few minutes ago.

Japanese EFL students usually cannot distinguish the difference between the simple past tense and the present perfect. (1b) is a natural sentence. Learners assume the simple past tense is continued until a present term like “now” is used, as shown in (1a). In school English grammar, the present perfect has three or four usages, namely, completion, result, experience, and duration. However, these usages commonly overlap with the past tense and the present perfect progressive in some important ways. Therefore, we will consider the usage of the present perfect in various examples.

2. Overview of English Perfectives

We will review previous studies first.

2.1 Previous Studies

2.1.1 Present Perfect in English Textbooks in Japan

We will now outline how to teach the present perfect in Japan. *Dual Scope: High School English* is an English grammar textbook, which is used in a great number of high schools in Japan. This textbook details three usages, and lists adverbials commonly found in each usage, as shown below:

Completion/Resultative: *now, just, already, yet*

Experiential: *before, ever, never, once, twice, three[four,...]times, many times, often, sometimes, etc.*

Continuative: *for~ <+period>, since~<+a point of time in the past>, How long~?*

The textbook explains only the adverbial phrases that co-occur with the present perfect, but it provides no explanation for present perfect phrases without adverbials nor the meaning of each usage. Usages of the present perfect are not decided solely by adverbials.

2.1.2 Quirk *et al.* (1985)

Quirk *et al.* (1985) argue,

...“in reference to a single event in the past, the present perfective is associated with three implications or connotations, each of which may or may not be applicable in a given instance.”

(i) the relevant time zone leads up to the present

(ii) the event is recent

(iii) the result of the action still obtains at the present time

The point to be made here is that the choice between the present perfective and the simple past is often determined by whether the speaker has in mind *an implicit time zone* which has not yet finished, as shown below:

Have you seen the Javanese Art Exhibition?[yet]

Did you see the Javanese Art Exhibition?[when it was here]

(Quirk *et al.* 1985:193)

Quirk *et al.* (1985) argue that present perfect has three implications: (i), (ii) and (iii). Worth noting, Quirk *et al.* (1985) do not cover the experiential use of the present perfect.

2.1.3 Huddleston and Pullum (2002)

According to Huddleston and Pullum. (2002), “the concept of a time-span up to now can be involved in the use and interpretation of the present perfect – or as different ways in which the past situation may have ‘current relevance’”, as shown below:

Grammars commonly distinguish four major uses of the present perfect: the continuative, the experiential (or ‘existential’) perfect, the resultative perfect, and the perfect of recent past.

(Huddleston and Pullum. 2002: 143)

We will review another previous study in the next section. Somiya (2012) discusses the perfective aspect and objects to the findings of Quirk *et al.* (1985) and Huddleston and Pullum. (2002).

2.1.4. Somiya (2012)

Somiya (2012) referenced Quirk *et al.* (1985) who emphasized that the perfective indicates anterior time. i.e. the time preceding the time orientation indicated by a sentences’ tense, context, or other elements. Somiya (2012) argues that this approach does not clearly delineate the differences between the perfective

aspect and the past tense indicate a past time. Moreover, Somiya (2012) emphasized the importance of the deixis, and pointed out that Huddleston and Pullum. (2002) neglect the importance of deixis.

2.1.5 Shortcomings of the Past Scholarship

2.1.5.1 Issues Not Mentioned in Previous Studies

We reviewed previous studies. However, no study has examined usages of the present perfect without adverbials and with double adverbials.

2.1.5.2 The Problem

If it is important to use adverbials in perfectives, it is worth examining the usage of the present perfect with double adverbials and without adverbials. To clarify the usage of the present perfect, it is necessary to consider present perfect with adverbials and without adverbials.

2.2 Consideration

Two purposes of this chapter include clarifying how the usage of perfectives with adverbials is determined and how the usage of the present perfect without adverbials is determined. In Section 2.2.1, we will review theories to use for analyses. In Section 2.2.2, we will consider usage of the present perfect with adverbials. In Section 2.2.3, we will consider usage of the present perfect without adverbials.

2.2.1 Theories

2.2.1.1 Vendler

Vendler(1967) discussed that there are four types of verbs, as displayed in (3).

- (3) States: *know, believe, see, have, resemble*

Activities: *run, swim, push a cart, drive a car*

Achievements: *recognize, find, lose, reach, die*

Accomplishment: *paint a picture, make a chair, push a cart to the supermarket, run a mile*

States do not imply a start and end point, and they resemble a condition that remains static. *Activities* are a continuity of actions and changes. *Achievements* are changes in a moment, and they do not imply intentions. Meanwhile, *accomplishments* are a type of condition with a start and end point. *Accomplishments* epitomize an action of existing intention. These types of verbs are considered universal. We claim that these four categories apply in regards to English, and we adopt these classifications.

2.2.1.2 Telicity

Vendler(1967) classified each verb type based on Vocabulary Aspect.

Table 1: Classification of English Verb based on Vocabulary Aspect (Vendler 1967)

Verb Type	Continuity	Telicity	Interpretation of the present perfect
Static	De-aspect	De-aspect	Experiential / Completion
Activity	[+ durative]	[- telic]	Experiential
Achievement	[- durative]	[+ telic]	Completion
Accomplishment	[+ durative]	[+ telic]	Completion

This table shows that each verb type is classified by continuity and telicity. We carried this idea one step further. It has become clear that activity, achievement, and

accomplishment verbs can be divided into two usages. Achievement and accomplishment verbs are telic, and they have end point, so they are used in the usage of completion with the present perfect. On the other hand, activity verbs are not telic, and they do not have telic, so they are used in the usage of experience with the present perfect. In addition, achievement and accomplishment verbs can be differentiated by the co-occurrence of a prepositional phrase.

(4) He arrived at the hotel *at 7:00 p.m.*

(5) He painted a picture *in an hour.*

Arrive as used in (4) is an achievement verb, and this verb can be used with a prepositional phrase *at*. *For+ period* is used as an adverbial phrase of the usage of duration, this adverbial indicates the period. However, adverbials of *at 7 p.m.* and *in an hour* do not indicate the period. *At 7 p.m.* indicates the arrival time, so achievement verbs and adverbials of *at* are compatible. *In an hour* indicates elapsed time, so accomplishment verbs and adverbials of *in* are compatible. These are the test of telicity. *Paint* as used in (5) is an accomplishment verb, and this verb can be used with a prepositional phrase *in*.

2.2.1.3 Lexical Conceptual Structure (Jackendoff 1983, 1990)

Jackendoff (1983, 1990) first advocated for Lexical Conceptual Structure (henceforth, LCS), and many studies on that track have followed (e.g., Rappaport & Levin 1988, Pustejovsky 1991, Kageyama 1996, Holmes 1999, Asao 2007; Kawaguchi et al. 2007). These studies argue that LCS depicts the deep structure and meaning

of a verb, and they use some abstract terminologies such as ACT, CONTROL, CAUSE, BECOME or BE AT. As for causative structure, Kageyama (1996) argues that verbs have the following LCS:

(6) [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE-AT z]] (Kageyama 1996:290)

This LCS involves two entities (x and y) and two events that relate to the two entities, “x ACT ON y” and “y BE-AT z.” The first event denotes the cause of the event and the second event denotes the result of the event. The LCS has three focus points: the two entities x and y that cause the event, plus the result. We argue that the speaker uses the four verbs (State Verb, Active Verb, Accomplishment Verb, Achievement Verb) separately according to the selected focus point (entity x, entity y or the result of the event). In other words, using LCS, we argue that a difference in the speaker’s focus point determines which verbs the speaker will use in real communication.

LCS shows the semantic property of a word using such notations as indicated in (7).

PROCESS	RESULT
(7) [He gave her a present]	causes [she is happy.]

Consider the above example. According to LCS, the phrase “he gave her a present” is considered a process, and “she is happy” is considered a result.

2.2.2 Present Perfect with Adverbials

2.2.2.1 The Usage of Present Perfect with an Adverbial

It is clear that an adverbial decides the usage of present perfect.

- (8) I have *already* eaten lunch. (Dual Scope:94)
- (9) I have seen it *three times*. (Ibid:95)
- (10) We have known each other *since we were children*. (Ibid:96)
- (11) a. I have *just* sent you an email. (Ibid:94)
- b. I have finished my homework *now*.

As shown in (8), (9), and (10), the usage of completion is characterized by *already* and *just*. The usage of continuative is characterized by *for + period* and *since + period*. The usage of experiential is characterized by *before*, *often* and *~times*. However, this view is quite unsatisfactory. When Japanese EFL students study the present perfect, they are taught that *just now* is not used. Although *just* and *now* are commonly used with the present perfect, as seen in (11), the reason why *just now* is not used with the present perfect leaves room for argument.

2.2.2.1.1 Previous Studies on Present Perfect and Their Shortcomings

Leech (1987) argues that *just now* is used only with the past tense, and combining *just now* with the present perfect is ungrammatical. However, such a combination is actually considered grammatical because cases like (12) are rampant in everyday conversation. Thus, Leech (1987) was wrong when he said that *just now* is used only with the past tense.

- (12) She has arrived *just now*. (Halliday1994)

Using *just now* with the past tense is comparable to using *just* with the present

perfect, as demonstrated in (13).

(13) a. I met Ann *just now*.

b. I have *just* met Ann.

(Kinugasa,1992:353)

c. We've *just now* come from a press conference.

(COCA)

According to Kinugasa(1992), using *just now* in the past tense as in (13a) and using *just* in the present perfect as in (13b) are both acceptable, but he neglected to address cases like (13c) where both *just now* and the present perfect are used. In the English classroom in Japan, cases like this are taught as ungrammatical. According to COCA, however, we can find many cases like (13c) where *just now* and the present perfect co-occur. By examining sentences like (13a) and (13c), we can illustrate why cases like these are in fact grammatical and discuss their effects on the English classroom in Japan.

As mentioned earlier, in Japan, cases like (13c) are taught as ungrammatical in general. However, we can find a lot of examples of *just now* and the present perfect combination in COCA, which indicates that this construction should be considered grammatical.

2.2.2.1.2 *Just Now* Used with Present Perfect

Kashino (1999) argues that *just now* can be used with the present perfect referring to past arguments from McCoard (1987) and Frank (1993).

(14) I've *just now* received word that they've arrived safely. (McCoard 1987:135)

(15) He has *just now* come in.

(Frank 1993:79)

Iseki (2012) is on the right track in that he argues that *just now* is used with the past tense and the present perfect.

(16) a. He has left *just now*.

b. He left *just now*.

(Iseki,2012)

Previous studies indicate that *just now* can be used with the present perfect, but a satisfactory explanation hasn't been offered that *just now* can co-occur with the present perfect. Fujisawa *et al.* (2017) discussed why such conditions persist.

2.2.2.1.2.1 Fujisawa *et al.* (2017)

Fujisawa *et al.* (2016) argues that *just now* is used with the present perfect. However, this study does not state why *just now* co-occurs with the present perfect. Fujisawa *et al.* (2017) attempted to determine the differences between using *just now* with the past tense and the present perfect by adding some components not presented in their 2016 study.

Table 2: Uses of *just now* is used with past tense and present perfect in COCA.

	<i>Just now</i> + past tense	<i>Just now</i> + present perfect
--	---------------------------------	--------------------------------------

Number	155	28
--------	-----	----

Just now is used with the past tense and the present perfect in COCA. We identified the top nine verbs used with *just now* and the past tense and collected 155 examples of those nine verbs. On the other hand, we found 28 examples of *just now* combined with the present perfect.

Table 3: Number of cases where *just now* appears with the past tense and the present perfect

Past tense		Present perfect	
Verb	Number	Verb	Number
heard	30	heard	5
was / were	26	been	4
said	22	said	3
saw	21	seen	3
had	20	had	1
got	15	got /gotten	8
made	8	made	0
came	7	come	4
called	6	called	0

This table shows the number of cases where *just now* appears with a verb in the past

tense and the present perfect. We should bear in mind, however, that *made* and *called* in the present perfect don't co-occur with *just now*. So, let us consider the reason why *made* and *called* used with the present perfect and *just now* are not compatible with each other.

Table 4: Verbs that can be used in the past tense with *just now*

heard	was/were	said	saw	had	got	made	came	called
30	26	22	21	20	15	8	7	6

As this table shows, all types of verbs which are classified by Vendler(1967) like (3) can be used in the past tense with *just now* as in (17), (18), and (19).

(17) Who was on the phone *just now*? " " No one you need to know about.
(COCA)

(18) The police chief came to see me *just now*. (Ibid.)

(19) I want to tell you something though, Howard. You made a mistake *just now* in your setup piece, which really was a setup piece. (Ibid.)

Next, we will discuss *just now* found in the sentence with the present perfect. First, let us consider static verbs. As table 3 shows, a static verb can be used in the present perfect with *just now* in cases like (20) and (21).

(20) There have been a lot of them *just now*. (Ibid.)

(21) " she told him." "There has been a killing - *just now*. A woman this time. Her cowardly husband seat her to gather firewood." (Ibid.)

As table 3 shows, accomplishment and achievement verbs can be used in the present perfect with *just now* as shown in (22), (23), and (24).

(22) Nope. You've *just now* got your foot in the door. You can do anything.

(COCA)

(23) We've *just now* come from a press conference where the eight European observers were let out and able

(ibid.)

(24) They've *just now* done the- the bidding of the anti-choice coalition that has such influence in their party.

(ibid.)

Finally, let us examine the activity verb. As table 3 shows, activity verbs like *make* and *call* are not found the present perfect with *just now* in the corpus. This situation is noteworthy, so we will explore it in the following section.

2.2.2.1.2.2 Conditions Under LCS

We will consider some conditions in section 2.2.2.2 from the LCS point of view. Applying LCS to those four types of verbs, they can be further divided into two categories: process-focused and result-focused. Only activity verbs are process-focused. They are depicted as [x act on y] in LCS.

Next, let us move onto why such conditions exist. The normal present perfect expresses an action done in a time period up to the present, as the sentence (25). On the other hand, using *just now* with the present perfect describes a slightly different situation, where the past and the present are closer to each other.

- (25) And it made me physically ill. I have seen it with my own eyes. (COCA)
- (26) Have you heard the news over the radio *just now*? (Ibid.)
- (27) There have been a lot of them *just now*. (=20)
- (28) “she told him.” “There has been a killing - *just now*. A woman this time.
Her cowardly husband seat her to gather firewood.” (=21)

By using a static verb and *just now* with the present perfect, the speech time is close to the event of the past to the utmost limit, but a stronger focus is placed on the result. The same can be said for accomplishment and achievement verbs, as (29) indicates.

- (29) You've *just now* got your foot in the door. (ibid.)

Let us look at activity verbs. As we have seen in the LCS part, activity verbs expresses a process, so the result-focused phrase *just now* is incompatible with activity verbs.

2.2.2.1.2.3 Shortcomings of Fujisawa *et al.*(2017)

Fujisawa *et al.* (2017) argue that *just now* is incompatible with activity verbs. They briefly mentioned why *just now* is used with the present perfect in examples collected from COCA, however, these sentences are often found among native English speakers. Two questions arise:

- Why is *just now* incompatible with activity verbs?
- Few exceptions in which *just now* is used with the present perfect

We extracted sentences which cooccur *just now* and the past tense from COCA, and we have converted the past tense of sentences into the present perfect, as shown in (30), (31), (32) and (33).

- (30) You have made a mistake *just now* in your setup piece, which really was a setup piece.
- (31) I have seen you on TV *just now*.
- (32) You have come here *just now*.
- (33) They have called me *just now*.

We asked native speakers about sentences that use *just now* in the present perfect. According to native speakers' judgement, these sentences are grammatical and meaningful, but unnatural. According to their assertions, it is normal to change *just now* to *just*. Therefore, *just now* is not generally used with the present perfect.

2.2.2.1.2.4 Summary of *just now* with present perfect

To sum up, Fujisawa *et al.* (2017) concluded that only the activity verb is not compatible with *just now* and the present perfect. In other words, *just now* and the present perfect are compatible only with verbs of a result focus. Incidentally, activity verbs and *just now* in the present perfect are not grammatical because activity verbs are process focused. However, it is unnatural that *just now* is used

with the present perfect.

2.2.2.1.4 Adverbs of the experiential usage: *before* and *often*

Next, we will consider adverbs of the experiential usage. After reviewing adverbials in section 2.1, it is clear that adverbials classify usages of the present perfect. Completion and resultative verbs are classified by adverbials that express the latest past. Duration is classified by adverbials that express a period in time. In an experiential usage, however, adverbials express a number of times. Nevertheless, *before* and *often* are listed as adverbials of the experiential usage, but they do not express number of times, as shown in (34).

(34) We 've worried before about their Super Mario hellscape. (COCA)

There is one reason *before* and *often* are listed as the experiential usage. In short, *before* and *often* do not apply completion and continuative usages. Completion usage indicates the recent past, and continuative usage indicates the continuation of actions or states until utterance time. On the other hand, an experiential usage indicates an event from the past, and *before* and *often* are the most compatible with an experiential usage.

2.2.2.1.5 Summary

In summary, we have found the reason that *just now* is used with specific verbs in the present perfect, as well as why *before* and *often* are listed as an experiential usage.

2.2.2.2 The usage of present perfect with two adverbials

We have considered the usage of the present perfect with an adverbial.

2.2.2.2.1 A Previous Study

2.2.2.2.1.1 Yamamoto (2016)

Yamamoto (2016) argues that adverbials expressing an indefinite past occur in the past tense. Yamamoto (2016) casts doubt on the premise that a time of utterance in the present perfect cannot explain why (35) is an ungrammatical sentence.

(35) **These days* I have been to New York. (Yamamoto 2016 : 95)

Yamamoto (2016) showed that adverbials are consistent in the present perfect as shown below:

- adverbials have unbounded expansions
- expressing a start and terminal point of “maintenance of state”
- subsumed in a period of “maintenance of state” or the same period

Yamamoto (2016) argues *these days*, which is not restricted to period explicitly cannot co-occur with the present perfect. The importance of adverbials is a main point in English perfectives. However, we found sentences that co-occur with double adverbials in the present perfect. In this case, the question arises as to what determines the proper usage. In the next section, we will analyze sentences that co-occur with double adverbials in the present perfective and discuss their usage.

2.2.2.2.2 Data of present perfect with two adverbials

There are many examples of sentences that use two adverbials with the present perfect. We will review these sentences in the following section. We will show sentences with typical adverbials of completion, experiential and continuative usages.

2.2.2.2.1 Completion vs. Continuative

We found 86 examples of *already* [a completion usage] and *since + period* [an continuative usage] in the present perfect, as demonstrated in (36) and (37).

(36) The agency has already made massive changes since the 9/11 attacks. (COCA)

(37) Doctors have already operated once on him. (Ibid.)

These sentences can be interpreted as a continuative usage.

2.2.2.2.2 Completion v.s. Experiential

We found 461 examples of *already* [a completion usage] and *before* [an experiential usage] in the present perfect, as shown in (38) and (39).

(38) They've already said that before. (COCA)

(39) They've already won 20 before. (Ibid.)

These sentences can be interpreted as an experiential usage.

2.2.2.2.3 Experiential v.s. Continuative

We found 182 examples of *sometimes* [an experiential usage] and *for + period* [an continuative usage] in the present perfect, as illustrated in (40) and (41).

(40) I have sometimes gone for a week without getting a trip. (COCA)

(41) Such conditions have sometimes persisted for decades. (Ibid.)

These sentences can be interpreted as an experiential usage.

2.2.2.2.3 Consideration

As shown above, it has been observed that adverbials of an experiential usage are the most preferential, and adverbials of the continuative usage are more preferential than those of the completion usage. We will discuss the reason why such conditions occur.

2.2.2.2.3.1 Differences between the continuative usage and the completion usage

To begin with, we will discuss the differences between adverbials of a continuative usage and those of the completion usage. The completion usage indicates the time of *have*, *has*, or *had*, and they cannot express the period of the state. Therefore, if *for + period* [a continuative usage] and *just* [a completion usage] are used with the present perfect, adverbials of the continuative usage override those of the completion usage. Such a condition surfaces because the static verb characteristic: *been* is strong. In other words, we argue that influence of the verb in the past participle is strong.

Since *been* is used in (42), the influence of *just* becomes weak. Therefore, it is possible to interpret this example as a continuative.

(42) I just moved here from Chicago and have *just* been here *for a week*. (COCA)

In this case, since *for* and a time period are used in this sentence, it is considered an example of continuative usage.

2.2.2.2.3.2 The differences between the experiential usage and completion usage

Next, we will discuss the differences between adverbials of the experiential usage and those of the completion usage. We have discussed that the completion usage indicates the time of *have, has, or had* and a recent past. In (43), however, the described action does not occur in the time denoted by *has*.

(43) The animal has *already* been captured *before* by Rivas. (COCA)

The reason for this situation is that (43) indicates the time before *has* by using *before*. In this case, the completion usage is not incompatible with (43). Therefore, adverbials of the experiential usage override those of the completion usage.

2.2.2.2.3.3 The differences between the experiential usage and continuative usage

Finally, we will discuss the differences between adverbials of the experiential usage and those of the continuative usage. The term “continuative usage” can be defined as events continuing until the present. If (44a) is expressed as the continuative usage, *once* [an adverbial of the experiential usage] must be removed, as shown in (44b).

(44) a. But he has won *once* in 89 races *since Oct. 21, 2007*. (COCA)

b. But he has won in 89 races *since Oct. 21, 2007*.

Therefore, adverbials of the experiential usage override those of the continuative usage.

2.2.2.2.4 Summary

As explained above, we can conclude that adverbials of the experiential usage are the most preferential, and adverbials of the continuative usage are more preferential than those of the completion usage, as shown in (45):

(45) Experiential > Continuative > Completion

To sum up, it is difficult to interpret the present perfect with double adverbials, but it was observed in this chapter that there is a priority of usages in the present perfect with adverbials.

2.2.3 Present perfect without adverbials

To begin with, we will review a previous study in the next section.

2.2.3.1 A Previous Study

2.2.3.1.1 Nishiyama (2013)

Nishiyama (2013) argues that the difference between continuative and non-continuative perfect readings is nothing but pragmatic, and it does not derive from any structure of ambiguity in perfect sentences. It suggests that the relationship

between sentence-initial duration phrases and interpretations of the present perfect can be explained in terms of information structure.

(46) John has lived in London. (Portner 2003, 2011)

Nishiyama (2013) argues that it is impossible to interpret the continuative if adverbial phrases of the continuative usage are not used with the present perfect, and Japanese EFL students are taught this lesson in their education. However, they are not taught usages without adverbials.

2.2.3.2 Consideration

We will observe the usage of the present perfect without adverbials. As we noted in Section 2.2.1.2, according to Vendler (1967), since activity verbs do not have telicity, they are experiential usages. Furthermore, since achievement and accomplishment verbs have telicity, they are completion usages.

2.2.3.2.1 Activity verbs interpreted as the experiential usage

We will analyze example sentences in the present perfect, which use activity verbs without adverbials, as shown in (47).

(47) Craig said police have studied surveillance video of the incident captured by
a camera mounted on a nearby building. (COCA)

(48) I've *just* studied a disaster. (Ibid.)

Based on the above examples, when activity verbs are used in the present perfect,

adverbials of the completion usage like *just* cannot be used in similar situations. However, we found sentences in which activity verbs are used with *just*, as shown in (48). Sentences like (48) happen because activity verbs are used as accomplishment verbs. (48) has an object with an indefinite article, but (47) does not. This is why activity verbs are used as accomplishment verbs. Therefore, the experiential usage is overridden by using activity verbs as accomplishment verbs.

2.2.3.2.2 Achievement and accomplishment verbs interpreted as the completion usage

First, we will observe examples in the present perfect, that use achievement verbs without adverbials, as shown in (49) and (50).

(49) Winter has arrived. (COCA)

(50) Unemployment has jumped two full percentage points from 7.6% to 9.6%.
(Ibid.)

These sentences can be interpreted as having a completion usage. This explains why achievement verbs with telicity, and they are completion usages. However, we have found that sentences can be interpreted as experiential and completion usages, as shown in (51) and (52):

(51) A powerful new earthquake has hit Southern Japan. (Ibid.)

(52) Many people have jumped on a bandwagon. (Ibid.)

According to Vendler (1967), *hit* [an achievement verb] is classified as a moment verb.

In (51), as a movement is repeating, a moment verb becomes acts as an activity verb. On the other hand, (52) does not have an object. Although achievement verbs must have objectives, (52) has none. In other words, the role of an achievement verb is changed, and an achievement verb acts as an activity verb.

Finally, we will observe examples in which accomplishment verbs without adverbials are used in the present perfect, as shown in (53) and (54).

(53) Your dad has painted naked women all over the wall. (Ibid.)

(54) The team has recovered several bricks from these ovens. (Ibid.)

Since accomplishment verbs have telicity, *paint* and *recover* are used as the completion usages. However, there are sentences interpreted as having the experiential usage despite using accomplishment verbs, as shown in (55):

(55) The town has built roads, schools, a new city market, a drainage system and a clinic, which has three doctors. (Ibid.)

According to Huddleston and Pullum. (2002), the completion usage of the present perfect involves the recent past. Alternatively, the experiential usage of the present perfect is “non-continuative,” so it is incompatible with the continuative and completion usage. In (55), there are five objects which are single and plural. If this sentence is the completion usage, it follows that the town made buildings that are simultaneously objects from the recent past. Although it depends on context, when accomplishment verbs are overridden by a special plural, as shown in (55), it is

possible to interrupt the experiential usage.

As explained above, in the case verbs are moment verbs, an object does not exist in these sentences, or a special plural is used, the completion usage is overridden. These sentences are then possible to interpret as experiential usages.

2.2.3.3 Summary

We have considered each usage of the present perfect without adverbials. When action verbs are changed to achievement verbs, the completion usage is overridden. Because of this, action verbs are used as the completion usage in the present perfect. When using achievement and accomplishment verbs, the experiential usage is overridden by the characteristics of the verbs and objects used. Because of this, achievement and accomplishment verbs are used as the experiential usage in the present perfect.

2.3 Summary of Consideration

This paper has analyzed the usage of present perfect with and without adverbials. We may, therefore, reasonably conclude that the usage of the present perfect can be classified by not only adverbials but also the type of verbs, subjects, or objects.

3. Applying Theory to Practice

Based on our findings, we will explain how to teach English perfectives for EFL learners in English education. There are two teaching methods best suited for the present perfect.

Since the classifications of verbs is important, Japanese EFL learners must

learn these characteristics before they learn perfectives. Furthermore, they need to know which verbs have telicity. However, it may be difficult for them to understand these methods. When Japanese English teachers use these methods, they display sentences with inserted activity, achievement, and accomplishment verbs.

Japanese EFL learners also learn the meaning of the usage in the present perfect. For instance, according to Quirk *et al.* (1985), the completion usage is in the recent past, the continuative usage is the result of the action that remains in the present time and the experiential is neither the completion usage nor the continuative usage. When more than two adverbials are used with the present perfect, it is useful to teach models like the one shown in (56).

(56) Experiential > Continuative > Completion (= (45))

As a side note, *just now* is not generally used with the present perfect. Fujisawa *et al.* (2017) discussed that *just now* is used with the present perfect, but the verbs used in these sentences are often activity verbs. However, native speakers consider it unnatural to use *just now* with the present perfect. We strongly recommended that Japanese English teachers should not teach unnatural constructions for native speakers. To return now to the present perfect with adverbials, when no adverbials are used with the present perfect, it is important to know verbs' characteristics.

Our analysis has clarified the usage of the present perfect, which may hopefully make it possible for students to enhance their English abilities through the knowledge, so I believe our findings can contribute to English education in Japan.

4. Conclusion

This paper has studied perfectives with and without adverbials. We may reasonably conclude that the experiential usage is the most preferential in sentences using the present perfect with double adverbials, and characteristics of verbs, subjects, or objects influence the usage of the present perfect without adverbials. Our findings from Section 2.1-2.3 can be applied in the classroom. We assert that our new teaching method is effective for Japanese EFL learners and may improve students' comprehensive understanding perfectly of perfectives.

Acknowledgement

I am deeply grateful to my supervisors, Prof. Kozo Kato, Prof. Tsukusu Ito, Prof. Kazuhiro Sakaguchi, Prof. Miki Hanazaki, and Prof. Kazuo Hanazaki, who were helpful, gave me constructive comments, and offered warm encouragement. My deepest appreciation goes to my graduate fellows in the department, especially Mayumi Fujimori, Atsushi Hasegawa and Katsuaki Sano for sharing their intelligence and giving me generous support. This paper would not have been possible without their expertise and assistance. The author also has received generous support from Takafumi Fujiwara, Hayato Ito, and Naoki Yamamoto, who kindly supported me during my first years in the master's program. This paper would not have been possible without many kind supporters. However, any remaining errors and flaws are my own.

References

- Asao, Y. (2007) “Imi no Kasaneawase toshiteno Nihongo Fukugou Doushi”
[*Japanese Compound Verbs as Semantic Layers*] *Kyoto University
Linguistic Research* 26: 59.75.
- Fujisawa, S and Hanazaki, M (2016) “Towards Perfection of Perfects: -Seeking an
Effective Pedagogy from a Contrastive Linguistic Point of View.” America,
Hawaii University International Conferences.
- Fujisawa, S and Hanazaki, M. (2017),“On the differences between just now used
with Past tense and just used with Present perfect”, Indonesia, GRDS
International Conferences.
- Frank,M.(1993) *Modern English*. 2nd ed. Englewood Cliffs: Prentice Hall.
- Holmes, J. (1999). “The Syntax and Semantics of Causative Verbs.” *UCL Working
Papers in Linguistics London* 11: 323-348.
- Huddleston, R. and Pullum, G, K. (2002). *The Cambridge Grammar of the English
Language*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Jackendoff, R.(1983) *Semantics and Cognition*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Jackendoff, R.----- (1990) . *Semantic structures*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Kageyama, T. (1996) *Doushi Imiron: Gengo to Ninchi no Setten No. 5* [*Verb
Semantics: The interaction point of Language and Cognition No. 5*] Tokyo:
Kuroshio Syuppan.
- Kashino, K.(1999) *Usage Of Tense And Aspect,Japan*, Kaitakusha.
- Kawaguchi *et al.* (2007) *Corpus-Based Perspectives in Linguistics*. Amsterdam:
John Benjamins Pub Co.

- Kodera, S.(2017) *Dual Scope High School English*. Tokyo. Suukenshuppan.
- Leech,G.N.(1987) “Meaning and the English Verb”.London:Longman.
- McCoard,R.W.(1978) *The English Perfect: Tense-choice and Pragmatic Inferences*. Amsterdam:North-Holland.
- Nishiyama, J.(2013) “Eigo no Kanryoukei no Keizokuyouhou to Toki no Fukushiku”[*The Continuative Usage of Perfectives and Adverbials of times in English*], Ritsumeikan Linguistic and Culture Research, 25 no.3: 65-78.
- Portner,P. (2003) “The (Temporal) Semantics and (Modal) Pragmatics of the Perfect.” *Linguistics and Philosophy* 26:459-510.
- Portner, P. (2011) “Perfect and Progressive.” *Semantics: An International Handbook of Natural Language Meaning*.” Volume 2. pp.1217-1261. Klaus von Heusinger, Claudia Maienborn, and Paul Portner, eds. Berlin: de Gruyter.
- Quirk, R *et al.* (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Rapoport, T. R. and Levin, B. (1988). “What to do with theta-roles”, in, *Thematic Relations*. 7–36. W. Wilkens (ed.) New York: Academic Press.
- Somiya, K. (2012) *Bunka no Kantan kara Mita Bunpou no Nichieitaisyuu* [English Japanese comparison of Grammar seen from a point of view of cultures]. Tokyo: Hitsuji Shobou.
- Yamamoto, K. (2016) “On the English Present Perfect”, Volume.12 pp.85-97 Nagoya:Nagoya Foreign Language University bulletin
- Yoshimoto, Y. and Kageyama, T. (1997) *Gokeisei to Gainenkouzou* [*Word formation and Conceptual structure*]. Tokyo: Hitsuji Shobou.
- Vendler, Z. (1967). *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.

Data Sources

Corpus of Contemporary American English (COCA) www.americancorpus.org.

平成 30 年度 修士論文

A Cognitive Linguistic Approach to
Progressives Leading to a Better
Education for Japanese EFL
Learners

信州大学大学院人文科学研究科言語文化専攻

16LA104F 佐野克明

Contents

Abstract	114
1 Introduction.....	114
2 Analysis on Progressives	116
2.1.1 Previous Studies: Quirk et al. (1985)	117
2.1.1.1 Lee (2001)	117
2.1.1.2 Kuno and Takami (2013).....	118
2.1.2 The Shortcomings of Previous Studies	119
2.1.3 Consideration	119
2.1.3.1 Activity Verbs.....	121
2.1.3.2 Accomplishment Verbs.....	122
2.1.3.3 Achievement Verbs	122
2.1.3.4 Stative Verbs.....	123
2.1.4 Summary of the Normal Progressive.....	124
2.2 Progressive with “Right Now”	127
2.2.1 Consideration	127
2.2.1.1 Activity Verbs.....	128
2.2.1.2 Accomplishment Verbs.....	129
2.2.1.3 Achievement Verbs	129
2.2.1.4 Stative Verbs.....	130
2.2.2 Summary of Progressive with Right Now.....	131
2.3 The Progressive with the Stative Verbs.....	132
2.3.1 Previous Studies of the Progressive with Stative Verbs.....	133
2.3.1.1 Leech (2004).....	133
2.3.1.2 Quirk et al. (1985)	133
2.3.1.3 Sugiyama (1998).....	134
2.3.2 The Shortcomings of Previous Studies	135
2.3.3 Consideration	135
2.3.3 Consideration of the Progressive with Stative Verbs	135
2.3.4 Summary of Progressive with Stative Verbs	137

2.4 Analysis of Progressive with Until.....	137
2.4.1 Previous Studies.....	138
2.4.1.1 Kittredge (1969).....	138
2.4.1.2 Uchikiba (2002)	138
2.4.2. The Shortcomings of Previous Studies	139
2.4.3 Consideration of the Progressive with Until	139
2.4.3.1 Activity Verbs.....	140
2.4.3.2 Accomplishment Verbs.....	140
2.4.3.3 Achievement Verbs	141
2.4.3.4 Stative Verbs.....	142
2.4.4 Summary of Progressive with Until.....	142
2.5 Summary of Chapter 2	145
3 The Present Situation in Japanese EFL Education.....	145
3.1 The Present Progressives in Current Textbooks	145
3.2 Mistakes of Japanese EFL Students in the Case of Progressive with Stative Verbs	148
3.3 Different Usages of Progressive Between Japanese Learners and Native English Speakers	149
3.4 Interference of the First Language.....	151
3.4.1 A Previous Study of “Teiru”: Takahashi (2005).....	151
3.4.2 Classification of Japanese “Teiru”	152
3.5 A Better Way of Teaching for Japanese Learners.....	154
3.6 Summary of Chapter 3	156
4 Conclusion	157
Acknowledgement	159
References.....	159

Abstract

This study analyzes the progressive verb tense and aims to clarify the differences between the English progressive tense and the Japanese “*teiru*²⁰⁴”. Chapter 2 focuses on various cases of the progressives “normal progressive,” “progressive with *right now*,” “progressive with stative verbs,” and “progressive with *until*,” in order to provide a consistent explanation for the progressive. What we call “normal progressive” can be seen in a sentence like (1) below. Chapter 3 provides error analyses. We will compare mistakes made by Japanese learners of English with the use of the progressive by native English speakers. To establish an understanding of what the progressive is, the present study collected examples from the *Corpus of Contemporary American English* (COCA) and analyzed the use of the progressive looking at each form in order to find a consistent explanation for the progressive. By analyzing progressive with *right now* and progressive with *until*, we classify verbs into four categories according to Vendler (1967). In the case of progressive with *until*, we found two aspects—pointing the certain point and the certain point of the limited time — that are important to this paper. On the other hand, progressive with *right now* only focuses on the very present. Chapter 3 also proposes a better teaching method based on our findings.

1 Introduction

Sato (1977) claims that Japanese learners have difficulty understanding the progressive in sentence (1):

²⁰⁴ *Teiru* is a Japanese suffix added to a verb for use for “the progressive,” “the present form,” and “the present perfect” in English.

(1) The car is stopping.

(Sato

1977:74)

After an explanation of progressive was given, the teacher asked students whether (1) means “the car is in the course of stopping” or “the car is already parked.” Many students answered that sentence (1) means “the car is already parked.” From this example, we can see that an explanation for progressive is unsatisfactory. Many Japanese textbooks for learning English explain progressive as an incident happening at the very present or they just translate this form as “*teiru*.” However, according to Takahashi (2005), Japanese “*teiru*” has three kinds of interpretations. ; (1) the duration of action, (2) the continuation of the changing result, and (3) a way of recording that includes the action and the incident that happened before. It can be said that these factors lead students to misunderstand the progressive tense. We can also say that native English speakers tend to use the progressive differently from Japanese learners. We review the different usages of the progressive among Japanese learners and native English speakers in Sections 3.2 and 3.3.

In Chapter 3, which deals with education, we look at examples of the progressive form.

We highlight differences in usage of the progressive form between Japanese students and native English speakers by consulting two corpuses.

We collected 115 progressive form examples from the *Corpus of English Essays Written by Native Speakers* (CEENAS) and 250 examples from the *Corpus of English Essays Written by Japanese University Students* (CEEJUS) (three levels

included)²⁰⁵.

The outcome makes it clear that Japanese EFL learners are poor at distinguishing the progressive tense from the simple tense. This kind of misunderstanding may originate from the way English is taught. Many textbooks used in Japanese classes, such as *Vision Quest English Expression I Standard* (2016:18), explain the progressive as having two kinds of interpretations: the incident occurring at the very present and the incident occurring over a certain amount of time. The ambiguity about the progressive verb form gives rise to another question. “Is there a better way to teach the progressive based on the difference between English and Japanese?”

This paper aims to focus on two issues based on our findings: defining what the progressive is and finding a better way to teach English to Japanese learners.

To solve these two issues, Chapter 2 analyzes the various usages of the progressive and Chapter 3 examines which English expression is equivalent to the Japanese “*teiru*” and considers a better way to teach English to Japanese learners.

2 Analysis on Progressives

We begin by examining the progressives, such as “normal progressive,” “progressive with *right now*,” “progressive with stative verbs,” “progressive with *until*,” by focusing on their meaning.

²⁰⁵ In this paper, we use CEEJUS (Corpus of English Essays Written by Japanese University Students) and CEENAS (Corpus of English Essays Written by Native Speakers), according to Ishikawa et al. (2010). The topics are restricted to “It is important for college students to have a part time job” and “Smoking should be completely banned at all the restaurants in this country.” In CEEJUS, the essays are classified based on the Test of English for International Communication (TOIEC) score.

2.1 Normal Progressive

2.1.1 Previous Studies: Quirk et al. (1985)

Quirk et al. (1985) explain that the meaning of progressive can be separated into three components using sentence (2):

(2) Joan is singing well.

These three components in normal progressive are (1) the happening has duration, (2) the happening has limited duration, and (3) the happening is not necessarily complete

(Quirk et al. 1985:197-198).

2.1.1.1 Lee (2001)

Lee (2001) compares the progressive with the present tense and explains the differences between these two.

(3) A statue of Chomsky stands in Great Court. (Lee
2001:150)

(4) A statue of Chomsky is standing in Great Court. (ibid.)

(5) This machine lacks a control lever. (ibid.)

(6) This machine is lacking a control lever. (ibid.)

Lee explains (3) as a state of affairs that is permanent, whereas (4) implies that the statue has only recently been placed there and may not be staying.

Similarly, (5) would generally be taken as a comment on the machine's design,

whereas in (6) there is a strong suggestion that the situation is temporary and that the machine ought to have a control lever (Lee 2001:150).

2.1.1.2 Kuno and Takami (2013)

Kuno and Takami (2013) explain that the meaning of progressive can be separated into three components: (1) the action that is happening at the point where the speaker is talking (2) a series of actions done intermittently by the same agent, and (3) a series of actions done intermittently by a different agent.

(7) She is playing the piano now. (Kuno and Takami 2013:
68-69)

(8) I am reading the Bible every day. (ibid.)

(9) The guests are arriving. (ibid.)

According to Kuno and Takami (2013), sentence (7) shows that playing the piano is an action that is happening at the moment when the speaker is talking.

On the other hand, in sentence (8), it does not matter whether reading the Bible is happening at the very present or not, and it shows that the speaker started reading the Bible as a daily habit at a certain point in the past, continues reading until the present and may continue reading into the future. The point is that this kind of action does not have to happen at the very present.

For sentence (9), it is not necessary for the action (the guests arriving) to be happening at the very present. With sentence (8), there is a difference about

the agent, showing the action of one person over a certain amount of time, whereas (9) shows that several people are coming over in a certain amount of time. In the case of (9), the arrival of different guests has happened in the past, continues at present, and will continue into the future (Kuno and Takami 2013: 68-69; translation mine).

2.1.2 The Shortcomings of Previous Studies

To sum up, considering the progressive tense from previous studies, the progressive describes temporality. We find two shortcomings in these previous studies.

First, Kuno and Takami (2013) do not examine what causes the progressive to have different meaning individually; and second, these previous studies do not explain what the progressive is in a consistent way.

2.1.3 Consideration

This section emphasizes that the meaning of progressive does not vary depending on the verbs. We classify verbs according to Vendler (1967) in Table 1.

Table 1: The Classification of English Verbs

The Classification of Verbs	What happened	Be-ing	in an hour	for an hour
Stative	*	*	*	*
Achievements	OK	OK (be about to)	OK	*

Activities	OK	OK	*	OK
Accomplishments	OK	OK	OK	*

Table 1 describes whether each four verbs are possible in these four categories and certain interpretation comes out in the case of achievement verbs. The asterisks above show that each verb is not possible in that category.

We now test various verbs according to Vendler's (1967) rule. The asterisks below show that they are not grammatical sentences.

Test

(10)

What happened

(a)* I felt sleepy. (b) My grandfather died.

(c) I did my homework. (d) I made a chair.

(11)

Be—ing

(a)*I was feeling sleepy. (b) My grandfather was dying.

(c) I was doing my homework. (d) I was making a chair.

(12)

In an hour

(a) *I felt sleepy in an hour. (b) My grandfather died in an hour.

(c) *I did my homework in an hour. (d) I made a chair in an hour.

(13)

For an hour

(a) *I felt sleepy for an hour. (b)*My grandfather died for an hour.

(c) I did my homework for an hour. (d)*I made a chair for an hour.

2.1.3.1 Activity Verbs

We begin by examining activity verbs. When used in the progressive tense, activity verbs tend to have a different meaning compared with the present form.

(14) I am standing here because my grandparents had to do this. Now I have to do this.

(COCA)

(15) I stand here in this world alone. (ibid.)

Both sentences have different meanings in respect of whether describing the present situation or not. Sentence (14) implies that the duty of standing here is the person's job now. To put it more simply, activity verbs describe someone's action, which is in the course of at the present. On the other hand, sentence (15) does not describe the present situation for the reason that present form is used to describe states of someone or something. This characteristic tends to indicate the state of an unlimited time and cannot show the present situation on the time axis.

Considering both sentences, we can say that progressive and present forms have

different meanings in the case of activity verbs.

2.1.3.2 Accomplishment Verbs

We have found in 2.1.3.1 that activity verbs have different meanings in the case of progressive and present form. Accomplishment verbs have a similar characteristic.

(16) Murray is making \$6 million in cash this year.

(COCA)

(17) My wife makes a hefty salary and I make more than I deserve.

(ibid.)

As with activity verbs, sentences (16) and (17) have different meanings in respect of whether being able to show the present situation or not. Sentence (16) implies that the total amount of money that Murray is making this year. The point is that the action of making money is in the course of at the present. On the other hand, sentence (17) does not describe the present situation for the reason that (17) describes my situation of making money over an unlimited time. This characteristic prevents the present form from describing the certain point on the time axis. Considering both sentences, we can say that progressive and present forms have different meanings in the case of accomplishment verbs like activity verbs.

2.1.3.3 Achievement Verbs

We have found in 2.1.3.1 and 2.1.3.2 that both activity verbs and

accomplishment verbs express the present situation in the case of the progressive tense. From this point of view, we can say that achievement verbs express the present situation in a limited time but it focuses on the process leading to an endpoint unlike activity and accomplishment verbs.

(18) He is dying.

(19) He is dead and I am free.

(COCA)

Sentences (18) and (19) have different meanings. Sentence (18) shows that he is in the course of dying though he actually has not died yet. On the other hand, sentence (19) shows that he has already been dead and this situation continues over an unlimited time, because (19) describes his feature of dead person. As shown in the case of activity verbs and accomplishment verbs, characteristic of present form, which has constancy make it impossible to describe the certain point on the time axis. By analyzing achievement verbs, we found that different meanings come out when we use progressive form instead of present form.

2.1.3.4 Stative Verbs

According to Quirk et al. (1985), stative verbs are not generally used in the progressive tense. However, we can find a few examples of the stative verb progressive with a particular characteristic describing the present situation in a limited time.

(20) I am glad that you are feeling better.

(COCA)

(21) I feel better when we talk.

(ibid.)

Stative verbs describe different meanings between progressive and present form similar to activity, accomplishment, and achievement verbs. Although sentence (20) implies that you are in the course of feeling better at the present situation. In contrast to progressive form, sentence (21) shows my feature, which likes talking with a particular person. We can also say that this feature can be constant over an unlimited time. Activity, accomplishment and achievement verbs have the common features that show differences between progressive and present form.

Stative verbs can also claim these differences as seen in the examples. From sentences (20) and (21), we found that progressive form describes the present situation in a limited time while present form does not describe the certain situation on the time axis. More in-depth discussion about stative verbs will be presented in Section 2.3.

2.1.4 Summary of the Normal Progressive

Summarizing the main points made in this section, the various verbs used in the normal progressive tense have a common feature. In short, this kind of common feature is that they have a different meaning compared with present form. When we use the present form, we cannot describe the situation which is happening at the present. That is why present form indicates someone or something's situation over an unlimited time and this characteristic prevents the present form from describing the certain point on the time axis. On the other hand, we use progressive form to describe the present situation. Although we found that the

progressive tense describes the present situation in spite of kinds of verbs, there are several kinds of interpretations. Achievement verbs focus on the process leading to an endpoint while activity, accomplishment and stative verbs focus on the action itself. That is why each verb needs to express the durability. In the case of the progressive tense, the incident occurring at the point where the speaker is talking is focused. We can also say that other interpretation that the particular incident includes past and future exists though not just focused. Achievement verbs have an endpoint in contrast to activity, accomplishment and stative verbs. In order to express the certain point in a limited time, achievement verbs focus on the process leading to an endpoint. The usage of normal progressive in activity, accomplishment and stative verbs can be depicted in Figure 1:

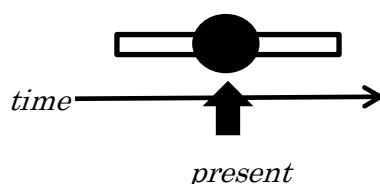


Figure1: *The Image Schema of the Normal Progressive*

This schema is the usage of normal progressive in the case of activity, accomplishment and stative verbs. The arrow stands for the passage of time, and rectangle represents state or event that started in the past and continues for a while. “*Present*” designates the point where the speaker is talking. Although we found that achievement verbs indicate the present situation like Figure 1,

achievement verbs tend to focus on the process leading to an endpoint like Figure 2:

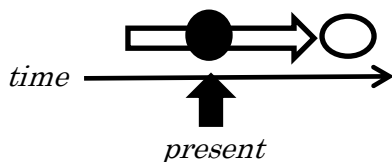


Figure 2: *The Image Schema of the Normal Progressive*

This schema is the usage of normal progressive in achievement verbs. A circle stands for an endpoint and an arrow describes the process leading an endpoint. We found that achievement verbs have a difference in respect of focus point. We can also say that different interpretation comes out in sentence (22).

(22) Our farmers are dying.

(COCA)

In (22), the number of famers who has already been dead is increasing more and more over a certain amount of time. The usage of (22) can be depicted in Figure 3.

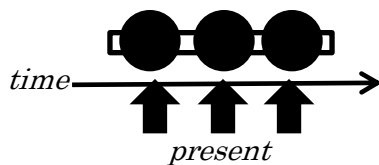


Figure3: *The Image Schema of Sentence (22)*

This schema is use of (22). Sentences like (22) express the incident happening at the certain point in a limited time. Although we found the several interpretations of

progressive, there is similarity that the normal progressive always describes the certain point in a limited time.

Next, we will examine what seems to be marginal usage of the progressive and see if our analysis applies to every progressive.

2.2 Progressive with “*Right Now*”

In this section, we discuss the meaning of the progressive containing “*right now*.” As we have shown, normal progressive tends to indicate the certain point in a limited time. On the other hand, the progressive only focuses on the very present if “*right now*” is added to the sentence.

2.2.1 Consideration

To determine the difference when the progressive is used with *right now*, we looked at the examples found in COCA. Table 2 shows the number of progressive verbs with *right now* categorized according to the verb types (Vendler 1967). Numbers in Table 2 show each verb found in COCA.

Table 2: Progressive with *Right Now* According to the Verb Type (Vendler (1967))

Stative Verbs	Achievement Verbs	Activity Verbs	Accomplishment Verbs
<i>Feel</i> (55)	<i>Die</i> (10)	<i>Do</i> (460)	<i>Make</i> (10)
<i>Be</i> (4)	<i>Win</i> (10)	<i>Stand</i> (51)	<i>Break</i> (5)
		<i>Think</i> (49)	<i>Sell</i> (3)
		<i>Look</i> (28)	

			<i>Sit (23)</i>	
Total	59	20	611	18

2.2.1.1 Activity Verbs

Table 2 shows that activity verbs are often used in progressive with *right now*.

When used in progressive with *right now*, activity verbs tend to imply the situation which is happening at the very present.

(23) I am wondering what the jury is doing right now.

(COCA)

(24) Look where you are standing right now.

(ibid.)

Sentences (23) and (24) describe the incident happening at the very present.

Sentence (23) shows that the moment the speaker is wondering about jury's behavior is at the present and the point when the jury is doing something is also at the present. To put the matter simply, these two incidents of wondering and doing something both are happening at the same present moment and does not refer to some other point on the time axis. A similar argument can be made about (24).

From this point of view, we can claim that activity verbs indicate the very present.

2.2.1.2 Accomplishment Verbs

We found that activity verbs tend to focus on the very present in the case of

progressive with *right now*. Similarly, accomplishment verbs also indicate the very present.

(25) Make a product that is better than what almost everybody else in the market is making right now.

(COCA)

(26) You don't understand the history she's making right now.

(ibid.)

Sentences (25) and (26) describe the situation of the viewpoint of the speaker and the active participant at the same point on the time axis. In sentence (25), the moment of the speaker's talking is the present. This remark indicates that the point when the speaker is reacting to her action and the act of her making a product both happen at the present.

We can find the same characteristic in sentence (26), which shows that the moment of the speaker is the present. As for her action, it does not imply durability but indicates what is happening at the very present. When we use accomplishment verbs with progressive with *right now*, these kinds of usages tend not to indicate the past and future.

2.2.1.3 Achievement Verbs

In Section 2.1.3.3, we showed that achievement verbs designate the certain point in a limited time. However, considering progressive with *right now*, we see

that it has a different meaning, that achievement verbs tend to imply the very present situation.

(27) People are dying right now. People are getting diagnosed, one every three minutes are

being diagnosed.

(COCA)

(28) Every American is supposed to doubt each other. Putin is winning right now with these kinds of efforts.

(ibid.)

Both sentences (27) and (28) describe the very present situation. Sentence (27) expresses that the condition of the patients are serious enough to be diagnosed over a short period of time. Similarly, sentence (28) means that the current situation in America is a result of Putin's behavior and this situation is one element for Putin's ambition.

It seems reasonable to suppose that there is similarity between achievement verbs and the other two verbs—activity verbs and accomplishment verbs. In short, this kind of similarity regards the very present situation mentioned and does not include the past and future.

2.2.1.4 Stative Verbs

We found that stative verbs are capable of being used with the progressive

as shown in 2.1.3.4. Considering progressive with *right now*, we can also say this form contains the use of stative verbs. Similar to activity verbs, accomplishment verbs, achievement verbs and stative verbs indicate the very present situation.

(29) That's what people are feeling right now. (COCA)

(30) People like you claim to be tolerant, but look how intolerant you're being right now.

(ibid.)

It is clear by examining sentences (29) and (30), that stative verbs express the very present situation. Sentence (29) shows what people are feeling right now and the same kind of argument can be made in (30). The speaker's remark is made at the present and he says what is happening now in spite of his claim.

2.2.2 Summary of Progressive with *Right Now*

The usage of progressive with *right now* can be depicted in Figure 4

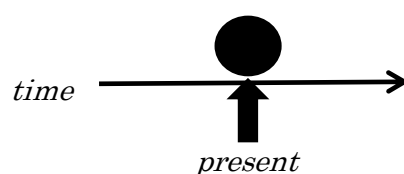


Figure 4: *The Image Schema of Progressive with Right Now*

This schema defines the usage of progressive with *right now*. The arrow stands for the passage of time, the circle indicates that the incident is happening at the very present.

We have clarified that progressive with *right now* describes the situation happening at the very present moment. In addition, progressive with *right now* has a similar characteristic of describing a very momentary action or situation regardless of the verb type.

Although we found that both normal progressive and progressive with *right now* express the present situation, the progressive with *right now* focus on the very present. Considering the textbooks used in Japanese EFL classes, the progressive is explained as “the incident happening at the very present and not including the past and future (*Vision Quest*,18).

For Japanese EFL learners, this explanation will not fully explain what the progressive is.

The normal progressive expresses the present situation, but it also describes that the incident is happening in a limited time. By analyzing these examples, we found that an explanation of progressive form in Japanese textbooks is about what progressive with *right now* is.

What is important is that progressive with *right now* has to describe the very present, while this characteristic cannot be seen in the normal progressive.

2.3 The Progressive with the Stative Verbs

As shown in 2.1.3.4, scholars say that stative verbs are not generally used in the progressive. Although we could find a few sentences in which this is true, this kind of usage is unusual. Sentence (31) is an example, of a state of being that tends

to be stable, a characteristic that is not suitable for the progressive.

(31) I am glad that you are feeling better. (= (20))

We will review previous studies first.

2.3.1 Previous Studies of the Progressive with Stative Verbs

2.3.1.1 Leech (2004)

Leech (2004) compares the progressive with the present form and explains the difference.

(32) She is kind. (Leech 2004:30)

(33) She is being kind. (ibid.)

Leech describes sentence (32) as an inherent trait of a character, while (33) describes a mode of behavior over which the person has control. To put it more simply, (32) means “She is constitutionally good-natured,” whereas (33) means “She is acting kindly towards someone” (Leech 2004:30).

2.3.1.2 Quirk et al. (1985)

Quirk et al. (1985) claim that the three kinds of stative verbs, —sense of state, event, and habit—are differently interpreted with the progressive tense. Also, they explain that the progressive is unacceptable with stative verbs.

(34) We own a house in the country. (Quirk
et.al.1985:198)

(35) *We are owning a house in the country. (ibid.)

They consider sentence (35) as ungrammatical. This can be explained, in part, by the observation that stative verbs are inimical to the idea that some phenomenon is “in progress”. States are “like-parted” in that the segment of a state has the same character as any other segment: no progress is made. Quirk et al. (1985) also explain that the progressive implies temporariness rather than permanence (198).

2.3.1.3 Sugiyama (1998)

Sugiyama (1998) studied the progressive with stative verbs. He examined each type of progressive with stative verbs and suggested that stative verbs occur with the progressive when the meaning is temporary. He provided the following examples:

(36) He is being patient. (Sugiyama 1998:253)

(37) I am liking this town. (ibid.)

(38) I am believing every word you say. (ibid.)

In Sentence (36), the characteristic does not have to come from his nature but he is intentionally behaving like that for a purpose. Sentence (37) says that the feeling of liking is increasing more and more. Similarly, sentence (38) shows that the feeling of believing is increasing more and more (Sugiyama 1998:253; translation mine).

2.3.2 The Shortcomings of Previous Studies

To sum up, previous studies reveal that we can use stative verbs with the progressive on special occasions. It follows that stative-verb progressive implies a sense of temporality compared with the present form. Nevertheless, we find problems in these studies. First, they explain that we can use the stative verb with progressive when implying temporality. However, they do not explain why stative verbs have temporality in the case of progressive form. Second, there seem various explanations about the progressive with stative verbs and cannot explain at consistent way. This way of explanation can prevent Japanese learners from understanding the progressive with stative verbs.

2.3.3 Consideration

This section (1) clarifies why progressive with stative verbs tend to have temporality (2) presents a consistent explanation for a better way of teaching Japanese EFL students.

2.3.3 Consideration of the Progressive with Stative Verbs

By analyzing several examples, we have found that the meaning of stative verbs have temporality in the progressive form compared with the present form. Stative verbs tend to indicate the present state, while the present form cannot indicate the present state because of its characteristic to express someone or something's situation. What is important is that stative verbs in the present form cannot express the present situation on the time axis and we use the progressive form to describe the present situation.

(39) He is being patient. (=

(36))

(40) He is patient.

Sentence (39) shows that this kind of state is not his nature but that behavior comes with purpose, such as with the aim of getting praise. Sentence (40) implies that being patient is his nature and does not change over an unlimited time. From these examples, we can say that different meanings come out when used in the progressive and present form. We found that stative verbs have temporality for the reason that he is in the course of being patient.

Sentence (39) expresses the present situation where the speaker is talking.

The progressive with stative verbs can be depicted in Figures 5.

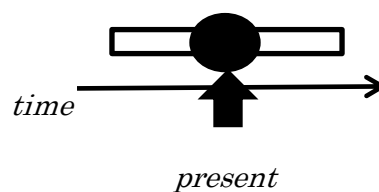


Figure 5: *The Image Schema of Progressive with Stative Verbs*

This schema depicts the usage of progressive with stative verbs. The arrows stand for the passage of time and the rectangle represents the state or event that started in the past and continues for a while.

2.3.4 Summary of Progressive with Stative Verbs

So far we have clarified that progressive with stative verbs have a different interpretation compared with the usage of present form. In the case of the progressive tense, we can express the present situation. This characteristic is in contrast to the present form, which does not indicate the present situation on the time axis. That is because present form expresses the state which is permanent. The progressive with stative verbs have temporality for the reason that the incident is in the course of action and we can find temporality comparing with the present form. So far, we have seen that stative verbs have a different meaning in the case of progressive and present form. Consequently, we found that we use the progressive tense to describe the present situation for the reason that present form cannot describe the present situation.

Next, let us consider a consistent explanation of progressive with stative verbs. As we showed in Section 2.3.1.3, progressive with stative verbs seem to have two kinds of interpretations. However, present situation having temporality mentioned and this is the usage of progressive with stative verbs.

In the next section, we will examine progressive with *until* and find a consistent explanation for the progressive tense.

2.4 Analysis of Progressive with *Until*

In this section, we examine progressive with *until* to find out what the common factor that the progressive tense has. According to Quirk et al. (1985), the progressive is explained as the event not necessarily being complete, while *until* is an expression to denote an end-point. Considering the validity of progressive with *until*, we can guess that it is ungrammatical. We will first review previous studies

2.4.1 Previous Studies

2.4.1.1 Kittredge (1969)

Kittredge (1969) argues that progressive with *until* is not grammatical, as seen in sentence (41):

(41)*Alex danced until the music was stopping. (Kittredge
1969: 46)

S₁ (imperfective) S₂ (imperfective)

For S₂ in (41) the addition of “*suddenly*” is not comfortable. The only possible readings giving some degree of acceptability are like Alex danced until something happened at the time the music was stopping which is in support of the perfective restriction for S₂. So, Kittredge (1969) argues that (41) is not a grammatical sentence.

2.4.1.2 Uchikiba (2002)

Uchikiba (2002) claims that progressive with *until* describes the certain stage including several stages, which leads to an endpoint.

(42) John kept playing poker until he was winning. (Uchikiba
2002:31)

Sentence (42) shows that John is in the course of winning. It is clear that John recognizes this as demonstrating the certain point, which leads to an endpoint.

2.4.2. The Shortcomings of Previous Studies

There are some shortcomings in Kittredge (1969) and Uchikiba (2002). Kittredge (1969) claims that progressive with *until* is not grammatical because the progressive expresses the incident that is imperfective and this condition is not satisfied in the case of *until* clause. However, his study falls short because we can find more than 200 examples of progressive with *until* in COCA. Uchikiba (2002) explains that progressive with *until* focuses on certain point in a limited time. Although we agree with Uchikiba (2002) on this respect, the meaning of progressive with *until* may not come from the progressive but from the *until*. Both the meanings of the progressive and the *until* must be considered.

2.4.3 Consideration of the Progressive with *Until*

This section examines how progressive with *until* is used and why. Table 3 shows the number of progressive verbs with *until* classified according to verb types (Vendler 1967).

Table 3: Progressive with *Until* According to the Verb Type (Vendler (1967))

Stative Verbs	Achievement Verbs	Activity Verbs	Accomplishment Verbs
<i>Feel</i> (11)	<i>Die</i> (2)	<i>Stand</i> (71)	<i>Go</i> (16)
<i>Be</i> (7)	<i>Reach</i> (2)	<i>Look</i> (49)	<i>Make</i> (5)
		<i>Sit</i> (41)	<i>Get</i> (5)
		<i>Run</i> (21)	<i>Break</i> (1)
		<i>Do</i> (16)	<i>Sell</i> (1)
Total 18	4	198	28

2.4.3.1 Activity Verbs

Table 3 shows that we often use progressive with *until* in the case of activity verbs.

We can find that progressive with *until* tends to show the certain point, where particular events start to occur by analyzing sentences (43) and (44).

(43) I just keep moving until I am standing at the entrance to the building.

(COCA)

(44) Diane pushes through the crowd until she is standing face to face with the mayor.

(ibid.)

Two situations are depicted in sentences (43) and (44). In sentence (43), the first clause describes the situation in which I keep moving. On the other hand, in the second clause, I am standing. Hence, the action of keep moving leads to the result of standing at the entrance to the building at the certain point on the time axis. Likewise, in (44), we can say that Diane's action leads to the certain point in which Diane is standing face to face with the mayor. As the activity verbs are concerned, there seems to have a starting point, where particular events start to occur.

2.4.3.2 Accomplishment Verbs

Similar to activity verbs, accomplishment verbs used in the progressive tense depict a certain point, where particular events start to occur.

(45) I accelerated down highway 169 until I was going the speed limit
and set the cruise control. (COCA)

(46) I did not have a sleep until everybody was going to bed.

In sentence (45), the main clause describes my action of accelerating, while the *until* clause shows that the state of going to the speed limit started to occur at the certain point.

Like in (45), sentence (46) also describes my action of not having a sleep in the main clause, while the *until* clause expresses my action of having a sleep started to occur at the certain point.

Considering (45) and (46), we can claim that accomplishment verbs indicate the certain point where particular events start to occur as we found in the activity verbs.

2.4.3.3 Achievement Verbs

We have seen that different situations mentioned between the main clause and the *until* clause in the case of activity verbs and accomplishment verbs. Sentence (47) shows that the main clause indicates the state of the present while your attitude toward God will change at the certain point in the *until* clause for achievement verbs:

(47) "Sure, you must be an atheist now, but just wait until you are dying."

(COCA)

In sentence (47), the main clause implies that you do not believe in the existence of God while you will come to believe in God, as shown in the *until* clause. We can say that particular events start to occur at the certain point in the case of achievement verbs similar to activity and accomplishment verbs.

2.4.3.4 Stative Verbs

In the case of stative verbs, we can claim that particular states or actions start to occur at the certain point.

(48) You should never go back into action until you are feeling well.

(COCA)

In sentence (48), the main clause shows that you cannot go back into action because of an illness. The event of going back into action will happen at the certain point after you recover from the sickness, which is indicated in the *until* clause.

2.4.4 Summary of Progressive with *Until*

This section clarifies that progressive with *until* tends to describe the certain point where particular actions or states start to occur. This kind of characteristic describing the certain point in a limited time is homologous to our argument in Chapter 2. Apart from the characteristic indicating the certain point, we will discuss whether this kind of characteristic designating the certain point comes from the usage of *until* or from the progressive itself. In example (49), we can tell that there is a difference between the progressive tense and the present

form.

(49) She wants to follow him, to keep fighting until they reach some sort of
resolution.
(COCA)

The main clause of sentence (49) shows her intention to keep fighting, and this effort leads to the result shown in the *until* clause. However, there is a difference compared with the progressive form in the sense that present form does not express the incident occurring at the particular point. Sentence (49) expresses her attitude towards him and does not designate the certain point on the time axis. In contrast to (49), sentence (50) shows that progressive with *until* implies that particular event starts to occur at the certain point.

(50) “Sure, you must be an atheist now, but just wait until you are dying.
(= (47))

The main clause in sentence (50) shows that your present attitude toward God, while the *until* clause shows that his attitude reversed and he comes to believe in God.

As mentioned in Section 2.1.4, the progressive tense designates the certain point in a limited time. We can also see this kind of characteristic in progressive with *until*. To understand the usage of progressive with *until* more deeply, let us examine the reason why sentence (50) is not grammatical but sentence (51) is grammatical even

if both sentences use achievement verbs.

(50)* Alex danced until the music was stopping.

(= (41))

(51) John kept playing poker until he was winning.

(= (42))

Sentence (50) is not grammatical for the reason that it indicates the act of dancing that happened only one time in the past, meaning we cannot express the situation which tends to have durability. On the other hand, sentence (51) describes the situation in which John played a few games trying to be a winner. From this point of view, we found that we also need to express durability in the main clause like sentence (51).

We can claim that progressive with *until* indicate the certain point where particular events start to occur. We can also say that this characteristic comes from the progressive in the *until* clause. In this chapter, we have analyzed the meaning of progressive by considering the characteristics that are common to various usages such as normal progressive, progressive with stative verbs, and progressive with *until*.

2.5 Summary of Chapter 2

In Chapter 2, we analyzed use of the progressives: normal progressive, progressive with *right now*, progressive with stative verbs, and progressive with *until*.

From our analysis, we can say that the progressive has a common feature designating the certain point in a limited time. We can also say that this kind of incident is not only focusing on the present but describes temporality.

However, we only focus on the present in the case of progressive with *right now*, which indicates a situation occurring at the very present moment.

Consequently, the meaning of progressive describes the certain point in a limited time.

However, the focus point is designated when particular adverbs are added to the sentence.

In the next chapter, we will pursue a better method for educating Japanese EFL learners by considering the difference between the English and Japanese languages.

3 The Present Situation in Japanese EFL Education

3.1 The Present Progressives in Current Textbooks

In *Vision Quest* (18), a textbook used in many Japanese high schools, present progressive is taught only as follows:

<The Present Progressive>

Action verbs are used in the progressive tense, while stative verbs are not used in the

progressive.

(52) She is playing tennis now. (am/are/is+doing)

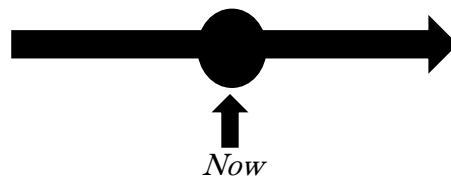


Figure 6: *The Image Schema of Present Progressive*

This schema defines the change of state in the present progressive tense. The arrow stands for the passage of time, the circle indicates when the incident happens, and “*Now*” indicates that the incident is happening at the very present. The textbook explains the usage of present progressive as “the incident is happening at the very present” (*Vision Quest*, 18; translation mine).

In *Comet* (36), a textbook used for many Japanese high school EFL education, present progressive is explained as “the incident happening at the very present,” while the present form is explained as “the incident happens habitually” (*Comet*, 36; translation mine).

Sentence (53) shows that Kenta is playing baseball at the very present.

(53) Kenta is playing baseball now. (*Comet*,

36)

(54) Kenta plays baseball every day. (ibid.)

In *Forest* (65), one of the most popular grammar books used in Japanese high school EFL classes, the progressive is explained as the incident happening at the very present compared with the present form.

(55) Jack is playing tennis with Bob now. (*Forest*, 65)

(56) Jack plays tennis every Sunday. (ibid.)

In sentence (55), the event does not indicate habitual occurrence. Jack's playing tennis is

happening at the very present, which does not relate to the precedent event.

Sentence (56) does

not have the same meaning as (55). In sentence (56), Jack's playing tennis happens every Sunday. From this point of view, we can say that the progressive tense has two kinds of usages. One is explained as "Using this form, we can describe the action which is in the very present moment" (*Forest*, 65). The other is explained as "the present progressive can describe the action which is repeated or kept doing over a certain period of time" (*Forest*, 65-66; translation mine).

(55) She is playing the piano now. (*Forest*, 65)

(56) These days, I am eating a lot of vegetables. (ibid.)

Sentence (55) shows that playing the piano is happening at the very present moment, while (56) shows that eating a lot of vegetables happens these days,

although eating a lot of vegetables is not a natural act (*Forest*, 65;translation mine). This grammar book can confuse us that the progressive has various usages. From this point forward, we concentrate on how Japanese EFL students construe the progressive, and comparing it with native English speakers. We performed a search of CEEJUS and CEENAS to find the difference in meaning used by native English speakers and Japanese EFL students.

3.2 Mistakes of Japanese EFL Students in the Case of Progressive with Stative Verbs

In this section, we analyze how Japanese EFL learners use the progressive tense. Italic characters indicate a mistake by Japanese learners.

(57) For example, play with their new friends or members of the club which he or she *is belonging* to make deep friendship.

(CEEJUS)

(58) Restaurants *are existing* for eating not for smoking.

(ibid.)

(59) When I went to Kyoto, I entered a Japanese café, and I *was enjoying* gentle

delicious smell of green tea. (ibid.)

Sentences (57), (58), and (59) indicate that Japanese students use the progressive instead of the present and past tense. It may be difficult for Japanese students to

distinguish the difference between the simple tense and the progressive. As seen in sentences (57) and (58), stative verbs are used to express an event that is happening at the very present.

Although (59) is in the past tense, this example shows that Japanese students have difficulty understanding the difference between the simple tense and the progressive. It is clear from (57), (58), and (59) that Japanese students directly apply “*teiru*” to the progressive.

“*Teiru*” corresponds to “the present form,” “the progressive,” and “the present perfect,” in English as will be shown in Section 3.4.1. When writing an essay, Japanese students tend to use the progressive not considering that “*teiru*” is equivalent to these three forms. Mistakes by students confusing the present form with the progressive are found at every level, no matter how high their level is. On the other hand, native English speakers never make this kind of mistake.

Understanding a difference between “*teiru*” and the progressive will help Japanese EFL students comprehend what the progressive tense is.

3.3 Different Usages of Progressive Between Japanese Learners and Native English Speakers

Japanese students tend to use the progressive to express an incident that is happening at the very present. Italic characters mean that Japanese learners and native English speakers use different forms.

(60) Now, I *teach* junior high school and high school students in their home.

(CEEJUS)

(61) Besides the knowledge gained through the educational experiences, employers today *are pursuing* candidates who are productive with well developed overall personality and are able to assimilate themselves into the environment of the organization.

(CEENAS)

Sentence (60) does not necessarily describe the incident happening at the very present.

Taking (61) as an example, the student does not have to work at the very present but will continue working in a limited time. Although (61) may not be a mistake, we can say that the progressive form is better to describe this kind of situation for the reason that temporality comes out when compared with the present form. As shown in Section 3.1, Japanese instructors teach students that progressive describes an incident happening at the very present, and this can lead to a misunderstanding of the progressive.

We can say that Japanese students usually construe the progressive when there is a necessity to describe the incident happening at the very present.

This may be the reason why Japanese students have difficulty understanding the extent of time that the progressive includes. In contrast to Japanese students, native English speakers tend to use the progressive to express a wider range of time. As shown in sentence (61), the state of the speaker continues in a limited time. Native English speakers construe the progressive as having temporality compared with the present form. It is clear that there is a different usage of

progressive between Japanese students and native English speakers.

To sum up, native English speakers express the meaning of the progressive in a wide range of time. In contrast, Japanese students express the meaning of progressive for the very present moment.

3.4 Interference of the First Language

The purposes of this chapter are to clarify how wide “*teiru*” corresponds to English expressions and how Japanese students construe the progressive. At the end, we will consider a better way to teach the progressive tense to Japanese EFL students. First, we will review previous studies.

3.4.1 A Previous Study of “*Teiru*”: Takahashi (2005)

Takahashi (2005) studied “*teiru*” and separated them into three components; (1) the duration of action, (2) the continuation of the changing result, and (3) a way of recording that includes the action and the incident that happened before.

(62) Jitensha-ga	hashit-	teiru
Bicycle-SUB	run-PROG/STATE ²⁰⁶	
(lit. “ <i>A bicycle is running.</i> ”)		
(63) Yuki-ga	“dondon ²⁰⁷ ”	tsumot- teiru
Snow-SUB	ADV	pile-PROG/STATE
(lit. “ <i>The snow is piling up more and more.</i> ”)		

²⁰⁶ *Teiru* can have two kinds of usages including progressive tense and state in this case. (62) describes progressive tense.

²⁰⁷ *Dondon* is a Japanese word equivalent to “more and more” in English.

(64) Mon-no kannuki-ga hazure-teiru
 Gate-GENI bolt-SUB unlocked-PROG/STATE

(lit. “A bolt on the gate is unlocked.”)

(65) Kare-ha gakuseijidai-ni kono-ronbun-wo kai-teiru
 He-SUB school days-PREP this - paper-OBJ write-

PROG/STATE

(lit. “He has written this paper on school days.”)

(Takahashi 2005:82-90, gloss and translations are mine)

The above (62) to (65) show that “*teiru*” includes “the present form,” “the present perfect,” and

“the progressive” in English. However, deciding among the present form, the present perfect, and progressive will confuse Japanese learners. To find a better way to teach Japanese learners what the progressive is, we will compare the progressive with its possible Japanese interpretation.

3.4.2 Classification of Japanese “*Teiru*”

In Section 3.4.1, we explained that “*teiru*” has three kinds of usages. In this section, we divide “*teiru*” into three categories to understand how this form includes English expression.

(1) Examples equivalent to the progressive form.

Jitensha-ga hashit- teiru
 Bicycle-SUB run-PROG/STATE
 (lit. “*A bicycle is running.*”)

Yuki-ga dondon tsumot- teiru
 Snow-SUB ADV pile-PROG/STATE
 (lit. “*The snow is piling up more and more.*”)

(2) Examples equivalent to the present form.

Mon-no kannuki-ga hazure-teiru
 Gate-GENI bolt- SUB unlocked-PROG/STATE
 (lit. “*A bolt on the gate is unlocked.*”)

(3) Examples equivalent to the present perfect.

Kare-ha gakuseijidai-ni kono-ronbun-wo
 He-SUB school days-PREP this-paper-OBJ
 Kai-teiru
 write-PROG/STATE (lit. “*He has written this paper at school days.*”)

(Takahashi 2005:82-90, gross and translations are mine)

As shown in the classifications above, we found a particular characteristic of category (1), specifically, that it is equivalent to the progressive. We can argue that the incident is happening in a limited time. On the other hand, category (2) shows that the incident happens over an unlimited time. It would be better to say that the state of unlocked is the characteristic of this gate. Category (3) shows that his action of writing this paper happened in the past and the fact of writing this paper does not change at the

present.

3.5 A Better Way of Teaching for Japanese Learners

In Section 3.4.2, we classified which “*teiru*” corresponds to various English expressions and noted some characteristics. This section describes a better way to teach the progressive tense. We found that Japanese students tend to make errors in translating from Japanese to English concerning the progressive. The main reason is that “*teiru*” includes “the progressive,” “the present form,” and “the present perfect” in English. That can confuse Japanese students on whether they can translate a certain expression to the progressive or not.

A solution is to put one Japanese word into the sentence. This is a suitable way to clarify meaning and prevent Japanese learners from getting confused.

In the case of (66) to (69), we put “*saichu*”²⁰⁸ at the end of the sentence.

(66) Jitensha-ga hashit- teiru saichu da²⁰⁹
Bicycle-SUB run-PROG/STATE in the course of be
(lit. “*A bicycle is in the course of running.*”)

(67) Yuki-ga dondon tsumot- teiru
Snow-SUB ADV pile-PROG/STATE
saichu da
in the course of be
(lit. “*The snow is in the course of piling up more and more.*”)

(68) *Mon-no kannuki-ga hazure-teiru
Gate-GENI bolt-SUB unlocked-PROG/STATE

²⁰⁸ *Saichu* is a Japanese word equivalent to “in the course of action” in English.

²⁰⁹ *Da* is a Japanese word equivalent to “*be*” in English.

“saichu” “da”
in the course of be
(lit. “*She is in the course of belonging to the soccer club*”.)

Many scholars explain that examples like (70) are not appropriate for the reason that stative verbs are not used in the progressive tense. However, we can use stative verbs with progressives as shown in Section 2.3.3. Although we can use stative verbs with progressive in the case of expressing temporality, (70) tends to describe the situation of hers and not describing temporality. Japanese learners tend to make mistakes confusing which form corresponds to progressive. These mistakes are evident in Japanese learner’s essays because there is a similarity between the progressive and the present form. Putting “*saichu*” at the end of the sentence, we can test whether the incident is in the course of action at the present. As the result of this test, we find that it is not appropriate in the sense that “*belong*” often does not express the present situation but describe someone’s situation over an unlimited time.

To sum up, using “*teiru*” depends on the kind of meaning, when Japanese learners try to understand the progressive properly. We can also claim that adding the word “*saichu*” can help Japanese learners better understand the progressive.

3.6 Summary of Chapter 3

In Chapter 3, we considered a better way to teach the progressive to Japanese EFL learners. In Section 3.1, we examined Japanese textbooks and grammar books, finding that many books explain the progressive as the incident

happening at the very present.

In Section 3.2 and 3.3, we found that Japanese learners cannot understand the progressive properly, because explaining the progressive as the very present can lead to misunderstanding.

In Section 4, we found that Japanese “*teiru*” includes the progressive, the present form, and the present perfect in English. To clarify the use of the progressive or not, we could put the Japanese word “*saichu*” into a sentence.

4 Conclusion

This paper has conducted a study on the progressive tense and clarifies what progressive is. The progressive tense tends to indicate the present situation, though different point indicating the process point or the action itself is focused depending on the kinds of verbs. To put it more simply, achievement verbs focus on the process leading to an endpoint, while activity, accomplishment and stative verbs focus on its action itself. On the other hand, the present form indicates a situation in which the state is consistent. In this case, we cannot express particular state on the time axis for the reason that present form does not express the incident happening at the point where the speaker is talking. We can also say that the sense of temporality comes out when comparing with the present form.

This paper has attempted to answer the research question: “What is a better way to teach the progressive based on the differences between English and Japanese?” To answer this question, this paper proposed teaching the meaning of “*teiru*” in relation to the difference between present progressive, present form, and present perfect. Teaching students about how the progressive relating to “*teiru*” will lead to

a better method of education for Japanese learners.

We assert that our new teaching model will be effective for Japanese EFL learners, and improve students' understanding of the progressive.

Acknowledgement

I am deeply grateful to my supervisors, Prof. Miki Hanazaki, Prof. Kozo Kato, Prof. Tsukusu Ito, Prof. Kazuhiro Sakaguchi, and Prof. Kazuo Hanazaki, who were helpful and gave me constructive comments and warm encouragement. My deepest appreciation goes to my graduate fellows in the department, especially Takafumi Fujiwara, Naoki Yamamoto, Hayato Ito, Mayumi Fujimori, Atsushi Hasegawa. and Sho Fujisawa for sharing their intelligence and giving me generous support. This paper would not have been finished without their knowledge and help.

References

- Ishikawa, S., Maeda, T., & Makoto, Y. (Ed.). (2010). *Gengo Kenkyu no tame no Toukei Nyumon* [An Introduction to Statistics for a Language Research]. Tokyo: Kuroshio.
- Kashino, K. (1999). *Tense-to-Aspect no Gohou* [Usages of Tense and Aspect]. Tokyo: Kaitakusha.
- Kittredge, R. I. (1969). "Tense, aspect and conjunction 'Some Inter-relations for English.'" Ph.D. dissertation. University of Pennsylvania.
- Kuno S. & K. Takami. (2013). *Nazotoki -no Eibunpou: Toki -no Hyougen* [English Grammar: Expression of Time]. Tokyo: Kuroshio.
- Lee, D. (2001). *Cognitive Linguistics*. New York: Oxford.
- Leech, G. (2004). *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- Quirk, R., Greenbaum, G., Leech, G., & Svartvik, J. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. New York: Longman.
- Radden, G. & R. Dirven. (2007). *Cognitive English Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.

Sato, H. (1977). *Eigo Jugyo no Sindan: Yoriyoi Jugyo wo Mezasite* [Evaluation of English Class: Hope to Have a Better Way for Teaching]. Tokyo: Kairyudo.

Sugiyama, T. (1998). *Eibunpou Shoukai* [A Comprehensive English Grammar]. Tokyo: Obunsha.

Takahashi, T. (2005). *Nihongo no Bunpou* [Grammar of Japanese]. Tokyo: Hitsujishobou.

Uchikiba, T. (2002). “*Until* no shusetu to juuzokusetu chuuno goi bunpouteki aspect ni Kansuru Ichi Kousatu” [A Study of Lexical and Grammatical Aspects in the Main Clause and the Subordinate Clause of *Until*]. *Toyama Literary Review* 5: pp. 27-34.

Vendler, Z. (1967). *Linguistics in Philosophy*. New York: Cornell University Press.

Textbooks

Comet English Communication I Revised. (2017). Tokyo: Suuken Shuppan.

Sougou Eigo Forest, 7th edition. [General English Forest]. (2013). Tokyo: Kirihara Shoten.

Vision Quest English Expression I Standard. (2016). Tokyo: Keirinnkan.

Data Sources

COCA (Corpus of Contemporary American English) <https://corpus.byu.edu/coca/>

CEEJUS (Corpus of English Essays Written by Japanese University Students)

CEENUS (Corpus of English Essays Written by Native Speakers)

平成 30 年度 修士論文

『変身物語』研究

信州大学大学院人文科学研究科言語文化専攻

17LA105H 南英明

目次

第1章

1.1 本論文の主旨	164
1.2 アープレイウスについて	165
1.3 『黄金のロバ』 概要	165
1.4 「真剣」か「滑稽」か?	166

第2章

2.1 「偽の結末」の問題	171
2.2 ルキウス、アリストメネース、テーリュフローンと「偽の結末」	174
2.3 『ルキオスまたはロバ』の結末と「故郷への帰還」	181
2.4 第2章結論	183

第3章

3.1 Anteludia の仮装集団	184
3.2 「羽をつけられたロバ」と「その横を歩く老人」	187
3.3 「足を引きずった老人」とアシニウス・マルケッルス	190
3.4 第3章結論	193

第4章

4.1 結論	194
BIBLIOGRAPHY	195

本論文における『黄金のロバ』のラテン語のテキストは Hanson (1989)を使用する。また『ルキオスまたはロバ』のギリシャ語のテキストに関しては Macleod (1967)を使用する。本論文中でのラテン語の翻訳に関しては特に断りがない限り筆者の訳である。

第1章

1.1 本論文の主旨

アープレイウス著『黄金のロバ』²¹⁰（『変身物語』）を解釈する上で避けては通れない大きな問題の一つにこの作品は「真剣」なものなのか、それとも「滑稽」なものなのかという論争がある。本論文で筆者は「滑稽」派の立場からこの問題を中心に論じ、『黄金のロバ』は「滑稽」な作品であるという主張の補強を試みる。

第1章では導入として、作者アープレイウスや『黄金のロバ』の概要とそれを取り巻く諸問題について紹介する。

第2章では第11巻の第26章に設置されている「偽の結末」の問題を中心に論ずる。近年のアープレイウス研究に大きな影響を与えた Winkler (1985) は全30章からなる第11巻を第1章から第26章と残りの4章に分け、前者をルキウスが女神によって救済されるまでを描いたおおよそ「真剣」な雰囲気の世界であると解釈し、続いて後者の第27章から第30章は明らかに物語の雰囲気が変わり、熱心なイシス教団の信徒であるルキウスが宗教に騙されている様子が描かれ、その「滑稽」さが演出されていることを指摘した。つまり、彼はこの前者 (11.1-26) と後者 (11.27-30) の間に「一つの終わり」があることを主張した。Finkelpearl (2004) は議論を発展させた形で第11巻の26章の第3節に「偽の結末」が存在することを指摘した。彼女は『黄金のロバ』の最終巻である第11巻の第26章の第3節と第4節の間に物語のプロローグに対応する「偽のエピローグ」が用意されていると指摘している。筆者はこの議論を踏まえた上でルキウスと多くの類似性をもつ物語の前半に登場したアリストメネース、テーリュフローンとルキウスを比較することで第11巻の第26章の第1節から第3節と第4節の間に「偽の結末」が設置されているという議論の補強を試みる。

第3章では、第11巻の第8章に登場する Anteludia の仮装集団が第1巻から第11巻を「統合」するだけではなく、第11巻の第26章の「偽の結末」が終わった後のルキウスの経済的な失敗も同時に暗示していることを論じる。また、Anteludia の仮装集団の第11番目のモチーフである「翼のついたロバとその横を歩く老人」は、ロバを引き連れる老人を形容する *debilis* が「足の不自由さ」を表しており、「偽の結末」が終わった後にルキウスが多額の金銭を教団に貢ぎ経済的な失敗を暗示していることを論じたい。オシリスの神官アシニウス・マルケッルスは左足の踵を引きずっており、このモチーフはルキウスの不運な経済

原題：*Metamorphoses*, 別名：*Asinus aureus*, 原題は『変身物語』だが、オウィディウスの『変身物語』(*Metamorphoses*)や失われたギリシャの『変身物語』(*Μεταμόρφωσις*)などとの混同を避ける為、本論文では広く知られた『黄金のロバ』のタイトルを使用する。

的な失敗を明白に暗示していると考えられる。ロバ・ルキウスは仮装行列に暗示される今までの冒険に気づくことができず、自身にこれから起こる不幸な経済的失敗をほのめかず、「足を引きずった老人とロバ」を見物するロバ・ルキウスの構図は非常に「滑稽」であり、第 11 巻の「偽の結末」以前に見られる、「滑稽」派の新しい補強材料になることを論ずる。

第 4 章では第 1 章から第 3 章での議論を踏まえた上で「滑稽」派の立場から結論を導く。

1.2 アープレイウスについて

作者アープレイウスの伝記的な事実とされている彼の経歴は主に彼の作品である『アポロギア』(以下 *Apol.* と省略する)と『フローリダ』(以下 *FL.* と省略する)に依るところが大きい。アープレイウスはローマ帝国の属州であるアフリカ州マダウロス出身とされ (*Apol.* 24)、紀元後 125 年ごろに出生したと考えられている²¹¹。少年時にカルタゴで修辞学や哲学などのラテン語のエリート教育を受け(*FL.* 18)、その後アテーナイへ遊学しプラトン哲学を学ぶ(*FL.* 15)。その後 150 年代前半にローマへ赴き滞在する²¹²。そこでアープレイウスは北アフリカのオエア出身のポンティアヌスと友人になる(*Apol.* 72)。155 年頃にローマを離れアレクサンドリアへ向かうが、その旅の途中オエアの町を訪ね友人ポンティアヌスの母親である未亡人プデンティッラに出会う。このことをきっかけに、友人の勧めもあって、157 年もしくは 158 年ごろにアープレイウスはプデンティッラと結婚をする²¹³。しかしアープレイウスはプデンティッラの親族によって、魔法を用いて未亡人の心を虜にして財産を奪ったというかどで告発される。これに対しアープレイウスは雄弁に自己弁護を行い無罪を勝ち取る。160 年以降の彼の経歴は不明だが、おそらくカルタゴで有力な市民として名を馳せ、180 年代に死去したと思われる²¹⁴。彼の主だった著作物には『黄金のロバ』、『フローリダ』、『アポロギア』、『ソークラテースの神について』などがある。

1.3 『黄金のロバ』概要

アープレイウス著『黄金のロバ』は紀元後 2 世紀に書かれた散文のラテン語の「小説」であり、現存する古典ラテン語「小説」の中で最古のものであり、完全な形で現存している。第 4 巻から第 6 巻にかけて挿入される作中でもっとも長い挿話「クピードーとプシュケーの物語」は後世の作家にも広く受容され、文学史の中でも非常に重要な作品の一つと言える。多くの学者は、アープレイウスの伝記的な事実と物語の主人公ルキウスのおそらく意図的であると思われる類似性から、170 年代から 180 年代の間を『黄金のロバ』の執筆時期と

²¹¹ Jones (2017) pp.399,400.

²¹² Harrison (2000) p.6.

²¹³ *Ibid.*, p.7.

²¹⁴ *Ibid.*, p.9., May (2013) p.1.

設定している²¹⁵。『黄金のロバ』はこれまでの研究によってアープレイウスのオリジナルの作品ではなく、ギリシャ語で書かれた元となる作品の存在が指摘されている。多くの研究者は、プロローグの語り手が語る「ギリシャ風のお話」(Fabula Graecanica)がこのラテン語で書かれた『黄金のロバ』がギリシャ語で書かれた『変身物語』(原題: Μεταμόρφωσις)の翻案であることを指し示していると考えている²¹⁶。アープレイウスが翻案したと思われるこのギリシャの『変身物語』は今では失われており確認する事ができないが、9世紀のコンスタンティノーブルの総主教フォーティオスの著述から伝ルーキアノスの著作物『ルキオスまたはロバ』(原題: Λούκιος ἢ Ὄνος)がギリシャの失われた『変身物語』の要約版であると考えられており、間接的にギリシャの『変身物語』の存在が確認されている²¹⁷。ギリシャ語とラテン語で書かれたこの3つの「ロバの物語」の関係性について、これまで様々な学者が議論を重ねてきたが、最も広く受け入れられている見解としてはアープレイウスの『黄金のロバ』と伝ルーキアノスの『ルキオスまたはロバ』、そのどちらもが失われたギリシャの『変身物語』を参考に翻案、要約したと考えられている。

1.4 「真剣」か「滑稽」か？

『黄金のロバ』の簡単なあらすじを紹介する。物語はプロローグが終わった後、魔術に多大な関心を寄せる主人公ルキウスが魔術の本場テッサリアへ向かうところから始まる。ルキウスはヒュパタの街で魔女が鼻に変身するのを目撃し、自分でも実践しようと試みる。しかし鼻に化けるつもりがロバになってしまい、ロバとして様々な人間の手に渡りながら社会を渡り歩くことになってしまう。ルキウスは「好奇心」(curiositas)が旺盛であり、その度を越した「好奇心」から度々失敗を重ねてしまう。第3巻でロバに「変身」してしまったルキウスは様々な人間の元を渡り歩き、第10巻で最終的にコリントスにて主人の元から脱走し、ケンクレアエに辿り着く。最終巻である第11巻でロバ・ルキウスは突然女神イシスの教えに目覚め、その女神イシスの力によって再び人間の姿に戻ることに成功し、ルキウスは人間としてイシス教団に入信し、語り手は物語を語り終える。第1巻から第10巻の間の欲望にまみれ、自身の欲望のせいでロバにまでなってしまう、失敗を繰り返す「俗」なルキウスと、第11巻の突然イシスの教えに目覚めた「聖」なるルキウスの変化は確かに唐突である。第1巻から第10巻までのロバ・ルキウスの冒険譚は猥雑であり、性的であり、魔法やおとぎ話が飛び交う不思議な話がルキウスの語りや登場人物などが語る挿話によって描かれる。それに対し第11巻はそれまでの猥雑な雰囲気の小説とは対照的に突然ルキウスが信仰に目覚め、神秘的で禁欲的な物語が語り手やルキウスによって語られている。このコントラストは多くの議論を呼び起こした。

20世紀の初頭から中頃にかけて『黄金のロバ』の大きな問題として物語の第1巻から第

²¹⁵ May (2013) p.2.

²¹⁶ Perry (1920), Manson (1978), Tilg (2014)

²¹⁷ Manson (1978) pp.1-6.

10巻と第11巻の間の「断絶」が指摘されていた。Perry (1926) や Sandy (1974) は、この『黄金のロバ』は第1巻から第10巻と第11巻の間に大きな「断絶」があり、『黄金のロバ』は第1巻から第10巻の間の「俗」なルキウスの語る「滑稽」な物語と、最終巻である第11巻の中で突然宗教に目覚めた「聖なる」ルキウスの語る「真剣」な物語の二つに分断されており、作品全体として統合されていないと主張した²¹⁸。しかしその後、研究が進むにつれ物語の第1巻から第10巻と第11巻の間の多くの関連性が指摘され、今日ではこの『黄金のロバ』は「統合」されているという見解が最も支持されているように考えられる。

しかし依然として残る、今でも議論の中心の一つになっている大きな問題に、この物語は「真剣」なものなのかそれとも「滑稽」なものなのかという議論がある。

「真剣」派の研究者たちは『黄金のロバ』を第1巻から第11巻を通して、『黄金のロバ』は作品として「統合」されていて、第1巻から第10巻は主人公が度を越した欲望や好奇心によって転落し冥界をさまよい、そして最終巻でその魂が宗教によって「救済」されるという「魂の転落と救済」を扱った「真剣」な物語であると主張している²¹⁹。様々な意見があるものの、全体として「真剣」派の学者は第11巻の第15章でロバから再び人間の姿に戻ることに成功した主人公ルキウスに対しイシス教の神官ミトラが語る台詞がこの物語の核心であると考えている。

"Multis et variis exanclatis laboribus magnisque Fortunae tempestatibus et maximis actus procellis ad portum Quietis et aram Misericordiae tandem, Luci, venisti. Nec tibi natales ac ne dignitas quidem, vel ipsa, qua flores, usquam doctrina profuit, sed lubrico virentis aetatulae ad serviles delapsus voluptates, curiositatis improsperae sinistrum praemium reportasti. Sed utcumque Fortunae caecitas, dum te pessimis periculis discruciat, ad religiosam istam beatitudinem improvida produxit malitia. Eat nunc et summo furore saeviat et crudelitati suae materiem quaerat aliam; nam in eos quorum sibi vitas in servitium deae nostrae maiestas vindicavit, non habet locum casus infestus. (11.15)

多くの様々な苦痛に耐え運命の女神の激しい嵐ととてつもなく強力な暴風に駆り立てられるも、平穩の門と慈悲の祭壇にとうとうルキウスよ、あなたはたどり着いたのです。あなたの生まれも地位さえもそれどころか立派な学識さえも少しもあなたに役立ちませんでした。しかし血気盛んな青年期の滑りやすい

²¹⁸ 第1巻から第10巻と第11巻の間に指摘されていた「断絶」問題に関しては Schlam (1971) が極めて簡潔かつ明瞭に議論の整理を行っている Schlam (1971) pp.293-294. を参照せよ。

²¹⁹ Tatum (1969) pp.524-527. , Smith (1972) pp.526-534. , Penwill (1975), Frangouilidis (2008) pp.171-203.

道の上であなたは卑しい喜びへと転落し、不運な好奇心の不幸な報酬を得たのです。しかしいずれにせよ運命の女神の盲目は、あなたを最悪な危機で苦しめている間に先を見ない意地悪さによってこのような神聖な幸福へあなたを連れ出しました。今こそ行きなさい運命の女神よ！そしてこの上ない激情で暴れまわり自身の残酷さのために他のものを探しなさい、なぜなら我らの女神の御威光が救い自身に隷属した生命に対して害意ある災厄が機会を持つことはないからです。

つまり主人公ルキウスはその卑しい欲望(*servilis voluptas*)と好奇心(*curiositas*)から冥界へ転落してしまうも、最終巻で女神イシスによって救済されるという、「魂の転落と救済」を描いた極めて真剣な宗教体験こそが物語の核心であり、その物語の第1巻から第10巻の間に語られてきた「滑稽」で奇妙な物語は第11巻の「真剣」な宗教体験との対照を表現するための準備であると、「真剣」派の学者たちは『黄金のロバ』を解釈している。

一方、この物語を第1巻から第11巻を通して物語は「滑稽さ」で統合されていると考える「滑稽」派の集団がいる。Fredouille (1975) は度々繰り返されるルキウスの密儀と彼の経済状況に着目し、第11巻の中に「滑稽さ」の要素があることを指摘した²²⁰。続いて Winkler (1985) は、Fredouille (1975) の議論を踏まえた上で、さらに第11巻の神官ミトラの台詞とそれを見守る聴衆の発言に見られる「滑稽」な要素を論じた²²¹。第11巻の第16章でロバから人間の姿に戻ったルキウスに対して人々は以下のように語っている。

Omnes in me populi fabulabantur: "Hunc omnipotentis hodie deae numen augustum reformavit ad homines. Felix hercule et ter beatus, qui vitae scilicet praecedentis innocentia fideque meruerit tam praeclarum de caelo patrocinium ut renatus quodam modo statim sacrorum obsequio desponderetur."(11.16)

全ての人々が私について喋っていました、「全能の女神の神々しい神意が今日彼を人間の姿へと元に戻したのです。ヘラクレスにかけてなんて幸運な人でしょう、3度祝福された人です。彼は確かにこれまでの人生の潔白さと信心深さによってこのような天からの素晴らしい加護を得たのです。彼は生まれ変わるとすぐに儀礼に奉仕して身を捧げるでしょう。」

²²⁰ Fredouille (1975) pp.12-15. Winkler は『黄金のロバ』は「真剣」か「滑稽」かという議論に多大な貢献と影響を今なお与えているが、それよりも10年前に Fredouille によって近年の「滑稽」派の議論が切り開かれたことは特筆すべきである。

²²¹ Winkler (1985) pp.209-227. しかし Winkler は第11巻の中で見られる「滑稽な」要素を指摘したが、必ずしも「滑稽」派ではなく、『黄金のロバ』は「真剣さ」と「滑稽さ」のどちらにも決定できないという立場を取っている。

先ほど引用した第 11 巻の第 15 章で、ロバから人間の姿に戻ったルキウスに対してイシス教団の神官であるミトラが語った演説が終わった後、第 16 章の中でそれを見守っていた人々はルキウスについて彼が「これまでの人生の潔白さと信心深さ」によって救済されたと語り始める²²²。しかし、実際には神官ミトラが演説の中で語っていたように、物語の第 1 巻から第 10 巻の間でルキウスは自身の「卑しい欲望」や「好奇心」によって失敗を繰り返しており、決して彼は潔白でも信心深くもなく、人々の会話は非常に奇妙に思われる。さらに Winkler (1985) はこのルキウスがロバから人間の姿に戻る光景を見た人々の反応と、第 11 巻の第 6 章でロバ・ルキウスの夢に現れた女神イシスが約束した人々の反応とが一致していないという非常に興味深い指摘をしている²²³。

Nec quicquam rerum mearum reformides ut arduum. Nam hoc eodem momento quo tibi venio, simul et ibi praesens, quae sunt sequentia sacerdoti meo per quietem facienda praecipio. Meo iussu tibi constricti comitatus decedent populi, nec inter hilares caerimonias et festiva spectacula quisquam deformem istam quam geris faciem perhorrescet, vel figuram tuam repente mutatam sequius interpretatus aliquis maligne criminabitur.
(11.6)

私の指示を困難なものであるかのように恐れてはいけません。というのも私があなたの所にやって来ているこの同じ瞬間に、同様にそこに現れて眠っている私の神官に次にやらねばならないことを先に命じているのです。私の命令によってぎっしりと詰め掛けた人々はあなたに道を譲るでしょうし、喜ばしい儀式と祝祭の光景の中誰もあなたが持つその醜い外観を恐れないでしょう、また突然変化したあなたの姿を間違って説明したり誰かが悪意を持って告訴することもないでしょう。

女神イシスは、第 6 章の中でロバ・ルキウスの夢の中で彼の変身を目撃した人々がそのことについて間違った説明を行わないと約束しているのにも関わらず、第 16 章でルキウスの変身に対して群衆は誤った説明をしている。このように一見「真剣」なように思われる第 11 巻の中で、全知全能であるはずの女神イシスの力にはほころびがあることを Winkler (1985) は指摘した。

Harrison (2000) は最も強行な立場を取り『黄金のロバ』は、ルキウスがイシス教団に騙され搾取されるまでが描かれていて、同時に彼が教団と共犯関係を築くまでを描いた「風刺

²²² Winkler (1985) pp.211, 212.

²²³ *Ibid.*, p.213.

的」な作品であるとまで言い切った²²⁴。

May (2006) は先述した Fredouille (1975) , Winkler (1985) , Harrison (2000) とは違うアプローチでこの作品の「滑稽さ」を指摘している。彼女は『黄金のロバ』は「散文で書かれた喜劇」であると主張し、最終巻に唐突に登場する女神イシスを「機械仕掛けの神」として解釈している²²⁵。その他にも Keulen (2003) や Libby (2011) などの「滑稽」派の学者が、第1巻から第10巻と第11巻を比較しその「滑稽」な類似性を指摘している。

一方、ここ最近の研究では Graverini (2012) や Tilg (2014) などの何人かの学者がプラトン哲学者としてのアープレイウスを積極的に評価し、『黄金のロバ』は作品全体を通して「真剣さ」と「滑稽さ」が混在しておりこの二つの要素は両立しようと主張している²²⁶。筆者は本論文で「滑稽」派の立場から第11巻の中に見られる新たな「滑稽」な要素を指摘し論ずることで「滑稽」派の議論の補強を試みたい。しかし、この新たな「滑稽」な要素を指摘することは決して、この物語は作品全体を通して「真剣さ」と「滑稽さ」が混在していると考える「両立」派と競合するものではなく、むしろ「滑稽」派と「両立」派のそのどちらの補強にもなり得ることを強調したい。

²²⁴ Harrison (2000) pp.244-252.

²²⁵ May (2006) pp.307-332.

²²⁶ Graverini (2012) pp.51-132. , Tilg (2014) pp.93-105.

第2章

2.1 「偽の結末」の問題

『黄金のロバ』の解釈において最も重要な問題の一つである、この物語は愚かなルキウスが宗教によって救済される「真剣」なものなのか？それとも愚かなルキウスが宗教に騙されてしまう「滑稽」なものなのか？という問いを私たちはいまだに解決できていない。第1巻から第10巻の間で繰り返されるルキウスの冒険を作者アープレイウスは、ルキウスが自身の欲望によって破滅してゆく様を「滑稽」に描こうとしていたことは疑いようがない。一方で、第11巻になると突然物語の雰囲気反転し物語は宗教の「聖」なる雰囲気満たされるように思われる。しかし注意深く読んでゆくと、読者である私たちは同時に宗教の「俗」さも語り手は暗に示しているかのように読み取ることができる。

ここで簡単に第11巻のあらすじを説明する。ロバ・ルキウスは第11巻の冒頭で突然女神イシスの教えに目覚め、女神に対し祈りを捧げはじめる。すると女神は彼の元に現れ彼の信仰と引き換えに彼を人間の姿に戻すことを約束する(11.1-7)。次の日ロバ・ルキウスは Anteludia の仮装集団とイシス教団の行列を見物する(11.8-12)。そして、彼はバラの花輪を食べ人間の姿に戻ることに成功する(11.13)。人間の姿に戻ったルキウスに対しイシス教団の神官ミトラは、彼がその欲望から失敗を繰り返し罰を受けてしまったが、女神イシスによって過去の苦難から救済されたことを宣言する(11.14,15)。ルキウスを仲間に加えイシス教団の行列は進み、彼らはプロイアペシアの儀式を執り行う(11.16,17)。ルキウスは人間に戻った後もイシス教団に留まり、女神イシスの密儀を行いイシス教団に入団する(11.18-25)。女神イシスの密儀を終えたルキウスは故郷へ帰る。しかし故郷での短い滞在の後、女神イシスの指示を受けすぐにローマへと旅立つ。しばらくすると女神が夢の中に現れ、もう一度密儀を受けるようにルキウスは命令される(11.26)。ルキウスは足を引きずったオシリスの神官であるアシニウス・マルケッルスに出会い密儀を行ってもらうように依頼する(11.27)。なんとか費用を工面して二度目の密儀を執り行ったルキウスは弁護士として仕事をして裕福になる(11.28)。それから間もなくしてルキウスは、さらに三度目の密儀を命じられる(11.29)。三度目の密儀を実行したルキウスは最後に神オシリスからパストポリーの一員に任命され、物語は完結する(11-30)。

近年のアープレイウス研究に大きな影響を与えた Winkler (1985) は、全30章からなる第11巻を第1章から第26章と残りの4章に分け、前者をルキウスが女神によって救済されるまでを描いたおおよそ「真剣」な雰囲気のものであると解釈し、続いて後者の第27章から第30章は明らかに物語の雰囲気が変わり、熱心なイシス教団の信徒であるルキウスが宗教に騙されている様子が描かれその「滑稽」さが演出されており、この前者(11.1-26)と後者(11.27-30)の間に「一つの終わり」があることを指摘した²²⁷。

²²⁷ Winkler(1985) pp.215, 216.

この指摘に対して Finkelppearl (2004) は議論を発展させた形で第 11 巻の 26 章の第 3 節に「偽のエピローグ」が存在することを指摘した²²⁸。彼女はこの「偽のエピローグ」は物語の冒頭のプロローグと密接な関係を持っていると主張している²²⁹。まず初めに「偽の結末」と「プロローグ」の対応関係を論ずる前に第 26 章全体を紹介する。

- (1) *Diu denique gratiarum gerendarum sermone prolixo commoratus, tandem digredior et recta patrium larem revisurus meum post aliquam multum temporis contendo. Paucisque post diebus deae potentis instinctu raptim constrictis sarcinulis, nave conscensa, Romam versus profectionem dirigo,*
 - (2) *tutusque prosperitate ventorum ferentium Augusti portum celerrime pervenio, ac dehinc carpento pervolavi, vesperaque quam dies insequabatur Iduum Decembrium sacrosanctam istam civitatem accedo.*
 - (3) *Nec ullum tam praecipuum mihi exinde studium fuit quam cotidie supplicare summo numini reginae Isidis, quae de templi situ sumpto nomine Campensis summa cum veneratione propitiatur. Eram cultor denique assiduus, fani quidem advena, religionis autem indigena.*
 - (4) *Ecce transcurso signifero circulo Sol magnus annum compleverat, et quietem meam rursus interpellat numinis benefici cura pervigilis, et rursus teletae, rursus sacrorum commonet. Mirabar quid rei temptaret, quid pronuntiaret futurum. Quidni? Plenissime iam dudum videbar initiatus. (11.26)*
- (1) それから長々と延長されたお礼の言葉によってそこに留まった後に、ついそこら離れ、かなり長い時間の後まっすぐに急いで祖先の家を再訪しました。何日かした後、力強い女神の扇動によって私は急いで荷物をまとめ船に乗りローマへ向かって出発しました。
 - (2) 望みの方角に向かって吹く風の幸運さによって安全に非常にはやくローマのアウグストゥス港に到着しました。そしてそれから続いて二輪馬車で駆けて夕方には、その日は 12 月 13 日の前日でした、極めて神聖なその都市に到着しました。
 - (3) それから私には至高の神格である女王イシスに日々の祈りを捧げることでより重要なことはありませんでした。彼女は神殿の位置から「野原のイシス」と呼びあられされ最高の敬意とともに崇拝されていました。それ以来私は勤勉な崇拝者となりました。確かに私は神殿ではよそ者でしたが、教団におい

²²⁸ Finkelppearl(2004)

²²⁹ Finkelppearl(2004) p.319. 厳密にいうと彼女は第 26 章の途中から第 30 章までをさらに細かく分類しているが、大きな区切りとして第 1 章から第 26 章の途中までと残りというふうに第 11 巻を区切っている。

ではその土地の者であったからです。

- (4) ほら御覧なさい、偉大なる太陽がゾディアックの円を走り抜けて、一年が完了しました。すると女神は絶えず続く慈悲深い神意の配慮から再び私の眠りに介入しました、そして再び密儀を行うように告げました。私は彼女が何を試みようとしているのか、どんな出来事を予言しているのか不思議に思いました。どうしてなのでしょう？私はすでに随分と前に完璧に密儀を執り行ったとっていました。

まず初めに、ルキウスは人間の姿に戻ってから一度故郷へ帰還し、何日かの滞在の後、女神イシスの指示によってすぐさまローマへ出発し 12 月に到着する(11.26,1-2)。ローマへ到着したルキウスはイシス教団の神殿で女神イシスに熱心に祈りを捧げる信者となる(11.26,3)。Finkelpearl (2004) はこの第 3 節の最後のテキストは物語の一番初めに語られるプロローグに対応していることを指摘している²³⁰。

Mox in urbe Latia advena studiorum Quiritium indigenam sermonem aerumnabili labore, nullo magistro praeunte, aggressus excolui. (1.1)

それからラティウムの都市にてローマ人の勉学に不慣れなものとして、その土地の言語を教師の導きなしに苦勞して鍛えました。

このプロローグの中で二箇所ローマの都市に関して言及があり、さらにプロローグと第 26 章の第 3 節で語られる *advena* (よそ者) と *indigena* (その土地の者) の対立²³¹は明白に対応している。ルキウスはロバから人間への「変身」を経験し、イシス教団に入信することによって、「よそ者」からイシス教団のコミュニティの中へ入り込むことができた「その土地の者」になる。同様にプロローグの語り手は「ローマ人の勉学に不慣れな者」（つまりローマ人の勉学に関して *advena* な者）として「その土地の言語」(*indigena sermo*) を勉強したと語っている。

明らかにこの第 26 章の第 3 節はプロローグと対応関係にあることが指摘できる。つまり物語の冒頭に語られるモチーフである *advena* (よそ者) と *indigena* (その土地の者) の対立が第 11 巻の第 26 章の第 3 節のなかに見られ、同時に女神による救済とイシス教団への入信が果たされたいま、物語は確かに「結末」へと向かっていて、第 26 章の第 1 節から第 3 節はいわばプロローグに対応する「エピローグ」のように考えられる。しかし、実際には物語は終わらず第 26 章の第 4 節の冒頭で唐突で不自然な *ecce* (ほらご覧なさい) が挿入される²³²。そして物語は続きルキウスは夢の中で女神イシスから再び 2 回目の密儀を受けるように指示される。このように第 26 章の第 1 節から第 3 節と第 4 節の間にはある種の「断

²³⁰ Finkelpearl(2004) p.320.

²³¹ *Eram cultor denique assiduus, fani quidem advena, religionis autem indigena.* (11.26,3)
それ以来私は勤勉な崇拜者となりました。確かに私は神殿ではよそ者でしたが、教団においてはその土地の者であったからです。

²³² GCA (2015) pp.447, 448. はこの *ecce* が唐突であり不自然であることを指摘している。また第 9 巻の第 32 章との関連も論じている。

絶」があることが指摘できる。

2.2 ルキウス、アリストメネース、テーリュフローンと「偽の結末」

筆者は Winkler (1985), Finkelppearl (2004) の第 26 章の第 1 節から第 3 節と第 4 節の間に見られる「偽の結末」の議論に対してより詳細にプロローグと比較検討し、プロローグで語られる「エジプト」や「変身」などの複数のモチーフが第 11 巻の第 1 章から第 26 章の間で回収され、第 26 章の第 1 節でのルキウスの「故郷への帰還」が彼の「変身」の成功を予感させ物語の「終わり」を読者に予感させる効果を持っていることを本節で論ずる。その上でルキウスと多くの類似性をもつ物語の前半に登場したアリストメネース、テーリュフローンとルキウスを比較することで、第 11 巻の第 26 章の第 1 節から第 3 節と第 4 節の間に「偽の結末」が設置されているという議論の補強を試みたい。友人ソークラテースを魔女メロエーに殺害されてしまった奇譚を話すアリストメネース(1.2-29)と、魔女に耳と鼻を切り取られてしまったテーリュフローン(2.20-30)の両者とルキウスの間には非常に多くの類似性が指摘できる。ルキウスは第 3 巻で魔女に遭遇し魔法に巻き込まれロバに「変身」してしまうが、彼がロバに「変身」する前に、つまり人間の姿の時に会った第 1 巻と第 2 巻に登場するアリストメネースとテーリュフローンの二人の男は、魔女に出会い魔術に巻き込まれロバに「変身」してしまうルキウスを暗示しているように思われる。『ルキオスまたはロバ』の作中にアリストメネース、テーリュフローンの両者は登場しておらず、この二人が語る挿話はアプレイウスが意図的に「追加」した可能性が高い²³³。従って、『黄金のロバ』に登場する多くの人物の中で、アリストメネースとテーリュフローンの両者とルキウスを比較することは重要である。同時にアリストメネース、テーリュフローンの両者の語りとプロローグの語りとの類似性にも言及したい。

ルキウスはエジプトの神である女神イシスによって救済され、ロバから元の人間の姿に戻ることに成功する。この「変身」はプロローグで語られた「変身」の定義に対応しているように考えられる。

modo si papyrum Aegyptiam argutia Nilotici calami inscriptam non spreveris inspicere, figuras fortunasque hominum in alias imagines conversas et in se rursus mutuo nexu reffectas ut mireris, exordior. (1-1)

もしあなたがナイルの葦で書かれたエジプトのパピルスを見ることを軽蔑しないのならば、あなたは人々の見た目や運命が他の形に変わり、そして再び相互に絡み合い自身の姿へと元に戻ることを不思議に思うでしょう。

²³³ 『ルキオスまたはロバ』の冒頭でルキオスはヒュパタ出身の旅人たちと共にヒュパタへ向かう。彼らは『黄金のロバ』の冒頭に登場するアリストメネースと連れの男を想起させるが、アリストメネースが語る「ソークラテースと魔女メロエー」の奇譚は『ルキオスまたはロバ』の中に確認できない。

読者はプロローグで既に語られていた「ナイルの葦で書かれたやエジプトのパピルス」のモチーフが、最終巻に登場するエジプトの神である女神イシスと関係していることに気づくことができる。そして人間からロバに変身し、ロバから元の人間の姿に戻ったルキウスの姿が、プロローグで語られるこの物語の「変身」の定義と一致していることを発見する。つまりルキウスは第3巻で「人々の見た目や運命が他の形に変わる」という人間からロバへの「変身」と、第11巻で「再び相互に絡み合い自身の姿へと元に戻る」というロバから人間への「変身」を行なっている。

プロローグによるとこの『黄金のロバ』の物語は「変身」を2度に分けていることがわかる。(1) 見た目や運命が他の形に変わること (2) そしてその形が再び元の姿に戻ることである。ここで一つの疑問について考察しなければならない。それは今まで物語の中に登場した人物は魔術に巻き込まれてしまったせいで、1回目の見た目や運命が他の形に変わる「変身」を経験するが、2回目の元の姿に再び戻る「変身」を経験していないのではないだろうか。このルキウスと他の登場人物の違いは何を意味するのだろうか。この問題を考える上で、第1巻に登場するアリストメネースと第2巻に登場するテーリュフローンの2人が、ルキウスと非常に興味深い多くの類似点を持っているためアリストメネースとテーリュフローンとルキウスを比較することでこの問題を考察したい²³⁴。

ルキウス、アリストメネース、テーリュフローンをこれまで何人かの学者が、彼らはストーリーテラーとして非常に似通った性質を持っていることを指摘している²³⁵。彼らは共に (1) 仕事に失敗し (2) 好奇心旺盛であり (3) 「食」に対し強い欲望を持ち (4) 魔女に出会い魔術に巻き込まれてしまったせいで故郷に帰れなくなってしまう。

まず、(1) 仕事の失敗について、GCA (2007) はルキウスとアリストメネースが両者とも商売人であり、そしてどちらも彼らがヒュパタの市場でビジネスに失敗していることを指摘している²³⁶。ルキウスはテッサリアへ仕事をしに向かい²³⁷ (1.2)、そしてヒュパタの市場で魚を相場よりも高い値段でつかまされたあげく、友人のピューティアスに魚を台無しにされてしまう(1.24)。アリストメネースは同様に商人であり、彼はルプスという商人に先を越されチーズの取引に失敗してしまう(1.5)。テーリュフローンは旅費を稼ぐためにラリッサの街で仕事を請け負う(2.22)。しかし彼は魔女のせいで死体の番の仕事に失敗してしまう(2.23-30)。

次に (2) 好奇心(*curiositas*)について、主人公ルキウスが度を越した好奇心によって失敗を繰り返すのは周知の事実であるが、同じ傾向がアリストメネースとテーリュフローンに

²³⁴ アリストメネース、テーリュフローンの他にも「変身」のテーマを扱う上で盗賊に攫われてしまったカリテーや、『黄金のロバ』作中で最長の挿話「クピードーとプシュケー」に登場するプシュケーなどについても考慮に入れる必要がある。しかし本論文では先述したように、アリストメネース、テーリュフローンの両者はルキウスとの類似性が非常に強く指摘できるため彼らとルキウスを比較することで「偽の結末」の問題について論じたい。

²³⁵ Sandy (1973), Francis (2001), GCA (2007), Frangoulidis (2008)

²³⁶ GCA (2007) p.33.

²³⁷ *Eam Thessaliam ex negotio petebam.*(1.2)

テッサリアへは仕事をしに向かっていました。

も指摘できる。アリストメネースは魔女メロエーがソークラテースを殺害するために部屋に押し入ったときに、自身も危険な状況に陥っているのにも関わらずベッドの下から覗き見をし、魔女メロエーから好奇心を指摘される(1.12)。テーリュフローンは好奇心から死者の霊を呼び出す儀式を見にゆき、自身の耳と鼻が魔女によって既に切り取られてしまっていて、仕事に失敗したことを死者の霊に公衆の面前で指摘され笑い者になってしまう(2.30)。

続いて(3)「食」に対する強い欲望について、ルキウスは『黄金のロバ』全編を通して食に対して強い欲望を持っていることが指摘できる。第1巻ではルキウスは他人よりも大きいチーズケーキを食べたいがために、それを喉に詰まらせ窒息死しそうになる(1.4)。さらにとりわけ象徴的なのは、第10巻でロバ・ルキウスは食い意地から人間のご馳走を盗み食いしているところを目撃され、人間の食べ物を食べるロバとして見世物にまでなってしまう(10.13-19)。アリストメネースはルキウスに魔女メロエーの奇譚を語る代価に食事を提示され了承する(1.4)。テーリュフローンは死体の番の仕事をする時に豪華な食事を要求する(2.24)。

次に(4)故郷からの追放について、Francis (2001) はストーリーテラーとしてのルキウス、アリストメネース、テーリュフローンを分析し、そしてアリストメネース、テーリュフローンの語る挿話の構造とプロローグとの類似性を指摘している²³⁸。アリストメネース、テーリュフローンの両者の挿話はプロローグを思わせる語り口で始まり、そして彼らが語る話の「結末」は、共に魔女と遭遇し魔術に巻き込まれてしまったせいで故郷に帰ることができなくなってしまう、という説明で物語を語り終える同様の構造が見られる。つまり、彼らが語る奇妙な挿話は、どちらも魔女と遭遇し魔術に巻き込まれてしまうことによって「変身」してしまい故郷から追放されてしまう、という共通のモチーフが指摘できる。ここで筆者はアリストメネース、テーリュフローンの両者の語りとプロローグを比較し、その上で「故郷からの追放」のテーマが彼らの語る挿話においてある種の「エピローグ」として機能していることをこれから論じたい。

第1巻の冒頭でルキウスは目の前を歩く二人の男(アリストメネースと連れの男)の会話を盗み聞きし、好奇心を刺激されアリストメネースに「機知に富んだ話」(fabula lepida)を聞かせてくれるようお願いする(1-2)。

Ac dum ausculto quid sermonis agitent, alter exserto cachinno "Parce" inquit "in verba ista haec tam absurda tamque immania mentiendo." Isto accepto, sititor alioquin novitatis, "Immo vero" inquam "impertite sermone non quidem curiosum, sed qui velim scire vel cuncta vel certe plurima. Simul iugi quod insurgimus aspritudinem fabularum lepida iucunditas levigabit."(1.2)

²³⁸ Francis (2001) p.65.

それで私は盗み聞きしました、どのような話を彼らが議論しているのかを、片方が豪快に笑って「慎めよ」と言い「君の恐ろしくて馬鹿げたそのような嘘をやめろ」その話を聞いた時、常に目新しさを渴望している私は「いや、それどころか是非とも」と言い「詮索好きというわけではないのですが、まだ知らない話を全部あるいはできるだけ多くを望む者なのです。それと同時に私たちが登る山脈のでこぼこさをお話の巧みさと快さは軽減するでしょう」

このようにルキウスはアリストメネースに話をするよう頼み、「機知に富んだ話」と引き換えに食事を奢ることを約束する(1.4)。そしてルキウスに「機知に富んだ話」をせがまれたアリストメネースは自身が体験した友人ソークラテースが魔女メロエーに殺されてしまった奇妙な話を語り始める(1.5)。

テーリュフロンも同様に第2巻でルキウスの叔母ビュラエナからルキウスのために「機知に富んだ話」(*lepidus sermo*)をするようにせがまれる。テーリュフロンは渋るもしつこく要求され、魔女に自分の耳と鼻を削ぎ落とされてしまった話を語り始める(2.20,21)。

Byrrhena inquit "et subsiste paulisper et more tuae urbanitatis fabulam illam tuam remetire, ut et filius meus iste Lucius lepidi sermonis tui perfruatur comitate." At ille "Tu quidem, domina," ait "in officio manes sanctae tuae bonitatis, sed ferenda non est quorundam insolentia." Sic ille commotus. Sed instantia Byrrhenae, quae eum adiuratione suae salutis ingratis cogebat effari, perfecit ut vellet.(2.20)

ビュラエナはこう言いました、「ねえ、もう少し留まってあなたの都会風の喋り方でそのあなたの話をまた聞かせてください、私の息子のルキウスがあなたの機知に富んだお話の上品さによって楽しむために。」それに対して彼は「貴婦人、あなたは確かに」と言い「親切で礼儀正しいのですが、しかし何人かの人は耐え難いほど傲慢なのです。」このように彼は興奮したが、ビュラエナの熱心さは、彼女は自身の安全にまで誓い気乗りしない彼を駆り立て、とうとう願いを成し遂げました。

このようにアリストメネースもテーリュフロンもそのどちらもが「機知に富んだ」(*lepidus*)話を語るように要求され、自身が体験した不思議な話を語り始める。この両者に見られる、「機知に富んだ話」を依頼され、それに応えて話を語り始める構造はプロローグの冒頭と呼応しているように思われる。

*At ego tibi sermone isto Milesio varias fabulas conseram, auresque tuas
benivolas lepido susurro permulceam, modo si papyrus Aegyptiam
argutia Nilotici calami inscriptam non spreveris inspicere, figuras
fortunasque hominum in alias imagines conversas et in se rursus mutuo
nexu relectas ut mireris, (1.1)*

さて今度は私の方があなたのそのミレトス風の語りで様々な作り話を撚り合わせ、あなたの好意的な耳を巧みなひそひそ声で喜ばせましょう。もしあなたがナイルの葦で書かれたエジプトのパピルスを見ることを軽蔑しないのなら、あなたは人々の見た目や運命が他の形に変わり、そして再び相互に絡み合い自身の姿へと元に戻ることを不思議に思うでしょう、

プロローグの冒頭でこれから話される物語は「巧みなひそひそ声によって」(lepidus susurro) 語られることが示されている。アリストメネースが物語を語る前にルキウスが「機知に富んだ話」(fabula lepidus)を、テーリュフロンが物語を語る前にビュラエナが「機知に富んだ話」(lepidus sermo)を要求しているように、アリストメネースとテーリュフロンが語る挿話はプロローグと同様に「機知に富んだ」(lepidus)話であることが指摘できる。そしてプロローグの語り手はこれから話す物語が不思議な「変身」の物語であることを約束し、物語を語り始める (exordior)。

*exordior. 'Quis ille?' Paucis accipe. Hymettos Attica et Isthmos Ephyrea et
Taenaros Spartiatica, glebae felices aeternum libris felicioribus conditae,
mea vetus prosapia est. Ibi linguam Atthidem primis pueritiae stipendiis
merui. Mox in urbe Latia advena studiorum Quiritium indigenam
sermonem aerumnabili labore, nullo magistro praeunte, aggressus excolui.
En ecce praefamur veniam, siquid exotici ac forensis sermonis rudis locutor
offendero. Iam haec equidem ipsa vocis immutatio desultoriae scientiae stilo
quem accersimus respondet. Fabulam Graecanicam incipimus. Lector
intende: laetaberis. (1-1)*

さあ始めましょう。「彼は誰？」少しお聞きなさい。アッティカのヒュメトス、エフィレアのイスモス、スパルタのタエナロスには豊かな土地で、それ以上に豊かな本によって永遠に記録されたところの土地、私の古い一族はここです。そこで私は子供時代の初めの義務にアッティカ方言を修得し、それからラティウムの都市にてローマ人の勉学に不慣れなものとして、その土地の言語を教師の

導きなしに苦勞して鍛えました。さあ、ほら前もって言いますが許してください、もし私が公の場での外国語の未熟な話し手であなたを不快にさせてしまったとしても。さて、この声の変化自体はまさしく曲馬師の知識の文体に呼応します。私たちはギリシャ風のお話を始めますよ。読者よ注意深くお楽しみ下さい。

このプロローグの始まり方はアリストメネースの語りの始まり方と強い類似性が指摘できる。ルキウスから「機知に富んだ話」を要求されたアリストメネースは以下のように物語を語り始める。

At ille: "Istud quidem quod polliceris aequi bonique facio, verum quod incohaveram porro exordiar.Sed tibi prius deierabo solem istum omnividentem deum me vera comperta memorare, nec vos ulterius dubitabitis, si Thessaliam proximam civitatem perveneritis, quod ibidem passim per ora populi sermo iactetur quae palam gesta sunt. *Sed ut prius noritis cuiatis sim, [qui sim] Aegiensis. Audite et quo quaestu me teneam: melle vel caseo et huiusce modi cauponarum mercibus per Thessaliam Aetoliam Boeotiam ultro citro discurrens. Comperto itaque Hypatae, quae civitas cunctae Thessaliae antepollet, caseum recens et sciti saporis admodum commodo pretio distrahi, festinus accucurri id omne praestinatorum. Sed ut fieri assolet, sinistro pede profectum me spes compendii frustrata est. Omne enim pridie Lupus negotiator magnarius coemerat.*(1-5)

そこで彼は「それは確かに、あなたが約束しようとしていることを私は公正で親切だと思います。それはさておき以前に始めたことに取り掛かりましょうか、しかし、まず私がどこのポリスのもので(私は誰なのか)

知ってください。私はアエギオンのものです、私がいかなる生業によって自分の地位を留めているかお聞きなさい。私はハチミツやチーズといった種類の宿屋の商品を伴ってテッサリア、アエトリア、ボエオーティアの間をあちらこちら走り回っています。そしてヒュパタの街では、そこでは全てのテッサリアの都市の中でより優れていて新鮮なチーズが非常に見事な味にふさわしい値段で売られていると知ったので、私はそれを全て買うために急いで駆けつけました。しかしいつものように左の足から私は出発したので利益に対する希望が私をくじきました。というのも前日にルプスという卸売商人が全て買い占めたからです。」

アリストメネースもプロローグと同様に物語を語り始め (exordior) 自身の出自を明らかにし (アエギオン)、プロローグの語り手がアッティカ、エフィレア、スパルタの 3 つの都市をあげるのと同じように、アリストメネースはギリシャの 3 つの都市、テッサリア、アエトリア、ボエオーティアをあげる。このようにプロローグの語りの構造はアリストメネースの語りの構造と強い類似性が指摘できる。

次にテーリュフローンとプロローグの語りを比較する。ビュラエナから「機知に富んだ話」を要求されたテーリュフローンは以下のように自身が体験した物語を語り始める(2.21)。

Ac sic aggeratis in cumulum stragulis et effultus in cubitum suberectusque in torum porrigit dexteram, et ad instar oratorum conformat articulum, duobusque infimis conclusis digitis ceteros eminus porrigens et infesto pollice clementer surrigens infit Thelyphron: "Pupillus ego Mileto profectus ad spectaculum Olympicum, cum haec etiam loca provinciae famigerabilis adire cuperem, peragrata cuncta Thessalia fuscis avibus Larissam accessi. (2.21)

このように彼(テーリュフローン)は布団を高く積み上げ、そしてひじに寄りかかり椅子に身を起こし右手を伸ばし、そして指を弁論家の姿と一致させました。最も下の 2 本を押し込め残りを遠くに差し出し、そして危険な親指をまっすぐ起こしテーリュフローンは話し始めました。「私が少年であった時オリュンピアの祭りを見にミレトスを出発しました、同時に私は名の知れた属州の地も訪れたと思います、テッサリア全域を巡り歩き黒い凶鳥と共にラリッサへ到り着きました。」

このようにテーリュフローンは旅をミレトスから始めている。これはプロローグの冒頭で語られる「ミレトス風の語り」と対応しているように思われる。さらに興味深いのはビュラエナが指摘するテーリュフローンの語りは「都会風の喋り」 (more urbanitatis) であることだ。これはプロローグの語り手が語るラテン語との対応が指摘できる。

Mox in urbe Latia advena studiorum Quiritium indigenam sermonem aerumnabili labore, nullo magistro praeunte, aggressus excolui. (1.1)

それからラティウムの都市にてローマ人の勉学に不慣れなものとして、その土地の言語を教師の導きなしに苦勞して鍛えました。

アリストメネース、テーリュフローンの両者には明らかにプロローグとの類似点が多く指摘でき、彼らは共にプロローグを思わせる語り口で物語を語り始める。そして両者とも物語の「結末」は自身の「故郷からの追放」のテーマで締めくくられる。アリストメネースはソクラテースを自分が殺したかのように感じ、自らを故郷から追放し物語は「結末」を迎え(1.19)、一方テーリュフローンは魔女に顔を切り取られ出来損ないになり、人の笑い者になってしまったことから故郷に帰ることができなくなってしまったと物語を語り終える(2.30)。つまり両者ともに「故郷からの追放」のテーマはプロローグの語り口で始まった「機知に富んだ話」のある種の「エピローグ」として機能していると考えられる。一方、ルキウスは魔女に遭遇し魔術に巻き込まれロバに変身してしまったせいで、ミロオの邸宅を襲った盗賊の主犯として告発され故郷へ帰れなくなってしまっても第11巻の第26章で故郷への帰還に成功する。この点に関して *Frangoulidis (2008)* はこの帰還をアリストメネースやテーリュフローンと対照的であることを指摘している²³⁹。

つまりプロローグで語られる「変身」の定義は、(1) 見た目や運命が他の形に変わること (2) そしてその形が再び元の姿に戻るという二段階の行程によって行われることを先ほど確認したが、アリストメネースやテーリュフローンは魔女に出会い魔術に巻き込まれることによって、アリストメネースはその地位 (*fortuna*) が変わり、テーリュフローンは彼の耳と鼻を失うことによって彼の「形」 (*figura*) が変わってしまい、一度目の「変身」が行われる。しかし彼らは二度目の再び元の姿に戻る「変身」をしておらず、故郷へ帰ることに失敗している。一方ルキウスは魔女に出会い魔術に巻き込まれ、人間からロバへ「変身」してしまうが、第11巻のなかで女神イシスによって救済され、2回目のロバから人間へ戻る「変身」を行う。この2回目の「変身」によってルキウスは故郷への帰還に成功する。つまりアリストメネース、テーリュフローンの二人が魔術との遭遇によって「変身」してしまったせいで、故郷から追放され社会的に死んでしまったのとは対照的に、ルキウスは人間からロバに「変身」した時に社会的に死んでしまうも、女神の救済によってロバから人間に戻るといふ2回目の「変身」を経験し、社会的に死んでいる状態から生き返り故郷への帰還に成功したと言える。そして第11巻の第26章でルキウスが故郷への帰還に成功することは、ある種のエピローグとして機能していたアリストメネースとテーリュフローンの「故郷からの追放」のテーマと同様に『黄金のロバ』のある種の「エピローグ」として機能していることを指摘したい。

2.3 『ルキオスまたはロバ』の結末と「故郷への帰還」

前節で第11巻の第26章でルキウスが「故郷への帰還」に成功することがプロローグに対応するある種の「エピローグ」として機能し、ここに「一つの終わり」が挿入されている

²³⁹ *Frangoulidis (2008) p.196.*

ことをアリストメネース、テーリュフローンと比較することで論じた。この「偽の結末」の問題を考察する上で、伝ルーキアノスの『ルキオスまたはロバ』の「結末」と第 11 巻の第 26 章に設置されている「偽の結末」を比較し、「故郷への帰還」のテーマが「エピローグ」として機能していることをさらに補強したい²⁴⁰。

伝ルーキアノス著『ルキオスまたはロバ』の物語の「結末」について簡単に紹介する。バラの花びらを食ベロバから人間の姿へと、元の姿に「変身」したルキオスはロバの姿の時に関係を持った女性の家を訪ねる。彼女と共に食事をとり寝所に誘われたルキオスは女性の前で裸になる。すると彼の裸を見た女性は彼のペニスもまた、ロバから人間のものへと変わっていることに気づき失望し、彼を家から裸のまま追い出してしまう。そして裸で放り出されたルキオスは船に乗り込み故郷へ帰還する。

ἄμα δὲ τῷ ὄρθρῳ γυμνὸς ὢν ἔθειν ἐπὶ ναῦν καὶ λέγω πρὸς τὸν ἀδελφὸν τὴν ἑμαυτοῦ ἐν γέμῳ συμφορὰν. ἔπειτα ἐκ τῆς πόλεως δεξιῶ πνεύσαντος ἀνέμου πλέομεν ἔνθεν, καὶ ὀλίγαις ἡμέραις ἔρχομαι εἰς τὴν ἐμὴν πατρίδα. ἐνταῦθα θεοῖς σωτήριον ἔθειν καὶ ἀναθήματα ἀνέθηκα, μὰ Δί' οὐκ ἐκ κυνὸς πρωκτοῦ, τὸ δὴ τοῦ λόγου, ἀλλ' ἐξ ὄνου περιεργίας διὰ μακροῦ πάνυ καὶ οὕτω δὲ μὲν οἴκαδε ἀνασωθεῖς. (*Λούκιος ἢ Όνος* 56)

夜が明けきらないうちに、私は裸のまま船まで走り、兄弟に自分の災難について、笑いながら話しました。その後、私たちは順風に恵まれその町から船出し、ほんの数日で私の故郷に到着しました。それから私は、私を救ってくれた神々に犠牲を捧げ、供物を献じました。何ととっても、私は物語にある犬の尻の穴からではなく、ロバの好奇心から、実に長い間、これほどの苦勞をして、ようやく救われて家に戻れたのですから²⁴¹。

このように『ルキオスまたはロバ』の主人公ルキオスは兄弟の乗る船へ乗り込み、「その後、私たちは順風に恵まれその町から船出し、ほんの数日で私の故郷に到着しました。」(*ἔπειτα ἐκ τῆς πόλεως δεξιῶ πνεύσαντος ἀνέμου πλέομεν ἔνθεν, καὶ ὀλίγαις ἡμέραις ἔρχομαι εἰς τὴν ἐμὴν πατρίδα.*) と語られているように物語はこのように「結末」を迎える。この物語の「結末」は『黄金のロバ』の第 11 巻の第 26 章との強い関連性が指摘できる。

第 2 章の第 1 節で論じたように『黄金のロバ』の主人公ルキウスはロバから人間の姿に戻り、イシス教団の密儀を受け「かなり長い時間の後」(*post aliquam multum temporis*)

²⁴⁰ 第 1 章の第 3 節で論じたように『黄金のロバ』の元となった作品はギリシャの『変身物語』であると考えられているがこの『変身物語』は失われていて比較することができない。しかし、その要約版であるとされている『ルキオスまたはロバ』の結末と『黄金のロバ』の結末を比較することは、ギリシャの『変身物語』と『黄金のロバ』の差異を明らかにする上で有用な手法になると考える。

²⁴¹ Todaka (2013) p.170. 『ルキオスまたはロバ』より翻訳を引用した。

故郷へ帰還する。そして何日かの滞在の後、女神イシスの指示を受け船に乗り、「望みの方角に向かって吹く風の幸運さによって」(*prosperitate venetorum forentium*)ローマへ素早く到着する。『ルキオスまたはロバ』の主人公ルキオスが「順風に恵まれほんの数日で」故郷へ帰還したのとは対照的に、ルキウスは故郷へ帰還するのに「かなり長い時間」を費やしている。しかしその一方で、ルキウスは故郷ではないローマに「望みの方角に向かって吹く風の幸運さによって」迅速に到着する。『ルキオスまたはロバ』の主人公ルキオスが故郷へ帰還するのに対し、『黄金のロバ』では物語の舞台はローマで結末を迎えるという違いはあるが、『ルキオスまたはロバ』の「結末」と『黄金のロバ』の第 11 巻の第 26 章は非常に強い関連性が指摘できる。

2.4 第 2 章結論

ルキウスは第 26 章の第 1 節で人間からロバへそして再びロバから人間へと二度の「変身」を経ることによって人間社会へ復帰し、「変身」に失敗した、つまり一度目の「変身」しか行っていないアリストメネースとテーリュフローンとは対照的に「故郷へ帰還」することに成功した。プロローグに非常によく似た語り口で物語を語るアリストメネースとテーリュフローンの両者は、どちらも魔女に出会い魔術に巻き込まれ「変身」してしまい、故郷へ帰ることができなくなったという「結末」を迎える。同様にアリストメネース、テーリュフローンの語る物語と多くの類似点が指摘できる第 11 巻の第 26 章で語られるルキウスの「故郷への帰還」の成功は明らかにこの物語の「結末」として相応しいものであると考えられる。この「偽の結末」はプロローグとの対応関係が指摘できるだけでなく、アリストメネースとテーリュフローンとは対照的なルキウスの故郷への帰還の成功によっても物語は「一つの終わり」をほのめかしている効果があるように考えられる。

そして本論文の第 2 章第 3 節では、失われたギリシャの『変身物語』の要約版だと一般的に考えられている伝ルーキアノスの『ルキオスまたはロバ』の「結末」と『黄金のロバ』の第 11 巻の第 26 章に設置されている「偽の結末」とを比較した。結論として両者は明らかに対処関係にあり第 11 巻の第 26 章に「偽の結末」が存在していることは明らかである。Winkler (1985) は全 30 章からなる第 11 巻を第 1 章から第 26 章と残りの 4 章に分け、前者をおおよそルキウスが女神によって救済されるまでを描いた「真剣」な雰囲気の話であると解釈し、続いて後者の第 27 章から第 30 章は明らかに物語の雰囲気が変わり、熱心なイシス教団の信徒であるルキウスが宗教に騙されている様子が描かれ、その「滑稽」さが演出されていることを指摘しているが、この「偽の結末」の後の第 11 巻の第 26 章の第 4 節から最終章である第 30 章までの間はアープレイウスによる、ある種の意図的な「追加」が行われた可能性が高いと考えられる。

第3章

3.1 Anteludia の仮装集団

本論文の第2章で『黄金のロバ』の最終巻である第11巻は第26章の第3節と第4節の間に「偽の結末」が設置されていることを論じた。そして「偽の結末」以前の第11巻の第1章から第26章の第3節までの間はルキウスがアリストメネースやテーリュフローンとは対照的に女神イシスによってロバから人間への2回目の「変身」に成功し、人間社会に復帰するまでが描かれている。「偽の結末」以前の第11巻はイシス教団の宗教儀礼や密儀が詳しく描写され、第1章から第26章の第3節までの間は、概ね「真剣」な雰囲気統一されているように思える。

コリントスから脱走したロバ・ルキウスはコリントスの植民地であるケンクレアイに到着し海岸で眠りにつく(10-35)。真夜中にロバ・ルキウスは恐怖から目を覚まし、突然月の女神の信仰に目覚め、海水の沐浴を行い、月の女神に祈り始める(11-1,2)。ロバ・ルキウスは突然の睡魔に襲われ、まどろみ始める。すると海から女神イシスが現れ(11-3,4)、彼が生涯女神イシスに忠誠を誓い全てを捧げることを条件にロバ・ルキウスを人間の姿に戻す約束をする。彼女は彼に、明日イシスの信徒によって行われる儀式の中で司祭がバラの花輪を持っていることを伝え、群衆を押し分けてイシスの信徒の行列に近寄りそのバラの花輪を食べ、人間の姿に戻るよう指示をする(11-5,6)。やがて太陽が昇ると道が群衆で埋め尽くされ、ロバ・ルキウスは(1)「兵士」、(2)「槍を持った狩人」、(3)「女装した男」、(4)「剣闘士」、(5)「地方総督」、(6)「哲学者」、(7)「鳥捕り」、(8)「漁師」、(9)「女装した熊」、(10)「ガニューメーデースのように着飾った猿」、(11)「ペガサスとベッレロポーンのようなロバと老人」で構成される Anteludia の仮装行列を見物する(11-8)。

この第11巻の第8章に登場する Anteludia の仮装集団に対し、学者たちはイシス教団の「真剣な」宗教儀礼との関連性を発見できていない²⁴²。この唐突な Anteludia の仮装集団の登場は奇妙に思える。Griffith (1975) はこの Anteludia の仮装集団を宗教儀礼に関連した「真剣」な行列ではなく、軍事的なパレードを起源に持つ「滑稽」なものであることを指摘した²⁴³。続いて、Fick-Michel (1991) や Harrison (2000, 2012) などの近年の学者は、この仮装行列は物語の第1巻から第10巻までのルキウスのいままでの冒険を反映した物語の要約であると指摘している²⁴⁴。May (2006) はこの Anteludia の仮装集団は演劇的なモチーフと密接につながっていることを主張した²⁴⁵。

筆者は本章で、Anteludia の仮装集団の第11番目のモチーフである「翼をつけたロバとその横を歩く老人」に着目し、Fick-Michel (1991), Harrison (2000, 2012)の議論を更に進

²⁴² Griffith (1975) pp.31-47.

²⁴³ *Ibid.*, p.173.

²⁴⁴ Fick-Michel (1991) pp.420-423. Harrison (2000) pp.240-243. Harrison (2012)

²⁴⁵ May (2006) pp.324-327.

め、Anteludia の仮装集団は第 1 巻から第 10 巻までのルキウスのこれまでの冒険を暗示しているだけではなく、さらに「偽の結末」以後のルキウスが 2 回目の密儀を強要され、イシス教団に多額の金銭を貢ぐことまでを暗示していると指摘したい。そしてこの議論によって『黄金のロバ』が「滑稽」な作品であるという解釈の補強を試みる。筆者は Anteludia の仮装集団の最後尾を歩く「老人」は、「偽の結末」の直後に登場する「左足を引きずった」神官アシニウス・マルケッルスを示していると考えている。Griffith (1975), Winkler (1985) はこのオシリスの神官アシニウス・マルケッルスが何故身体的な障害を持っているのか説明に失敗している²⁴⁶。現代に至るまで何故アシニウス・マルケッルスが足を引きずっているのか誰もその解釈に成功してないように思われる。筆者は本章で Anteludia の仮装集団の最後尾を歩く老人とアシニウス・マルケッルスを結びつけることでその疑問を解決しようと考えている。

Ecce pompae magnae paulatim pracedunt anteludia votivis cuiusque studiis exornata pulcherrime. Hic incinctus balteo militem gerebat, illum succinctum chlamyde crepides et vanabula venatorem focerant, alius soccis obauratis inductus serica veste mundoque pretioso et attextis capite crinibus incessu perfluo feminam mentiebatur. Porro alium ocreis scuto galea ferroque insignem e ludo putares gladiatorio procedere. Nec ille deerat qui magistratum facibus purpuraque luderet, nec qui pallio baculoque et baxeis et hircino barbitio philosophum fingeret, nec qui diversis harundinibus alter aucupem cum visco, alter piscatorem cum hamis induceret. Vidi et ursam mansuem, quae cultu matronali sella vehebatur, et simiam pilleo textili crocotisque Phrygiis Catamiti pastoris specie aureum gestantem poculum, et asinum pinnis agglutinatibus adambulans cuidam seni debili, ut illum quidem Bellerophonem, hunc autem diceres Pegasus, tamen rideres utrumque. (11-8)

ほら、御覧なさい、大きな行列の Anteludia の仮装集団がゆっくりと先行しています。各々が熱心さと信仰に従ってこの上なく美しく着飾っています。こちらの者はベルトを身につけ兵士を演じています。あちらの人は短い外套とサンダルと槍を身につけ狩人のように振舞っています。別の人は金箔で覆われたかかとの低い靴と上品で貴重な絹のドレスを着て、髪で編まれたカツラを被りなよなよとした歩きで女性のふりをしています。次の者はすね当てと盾と兜と剣で目立っています。あなたは彼が剣闘士の学校から来たと思う

²⁴⁶ Griffith (1975) p.333. Winkler (1985) p.218.

かもしれません。続いてある者は束桿と紫色の衣で地方総督を演じています。そしてまたある者は長い外套と杖と編まれたサンダルと雄ヤギのようなひげで哲学者のふりをしています。そして違う竿を持った一組がやってきます。片方は鳥籠のついた竿を持った鳥捕りでもう片方はかぎ針のついた竿を持った漁師です。そして私は洗練されたご婦人のように着飾った飼いならされた雌熊が座輿にのって運ばれるのを見ました。続いて編まれたフェルト帽をかぶったプリギュア風のサフラン色の衣装を着た羊飼いのガニューメーデースのような外見をした猿が金杯を運んでいるのを見ました。そして羽をつけられたロバが足の悪い老人²⁴⁷のそばを歩いています。それはまるでベッレロポーンのように他方はペガサスだとあなたは言うかもしれませんが、ですが両者をあなたは笑うでしょう。

第11巻で、ロバ・ルキウスは(1)「兵士」、(2)「槍を持った狩人」、(3)「女装した男」、(4)「剣闘士」、(5)「地方総督」、(6)「哲学者」、(7)「鳥捕り」、(8)「漁師」、(9)「女装した熊」、(10)「ガニューメーデースのように着飾った猿」、(11)「ペガサスとベッレロポーンのようなロバと老人」で構成されている集団に遭遇する。簡潔に *Anteludia* に登場する第1番目から第10番目のモチーフと、第1巻から第10巻に登場するモチーフの関連性について論じる。(1)「兵士」：この兵士は第9巻でロバ・ルキウスを連行しようとした兵士を想起させる²⁴⁸ (9.39-42)。(2)「槍を持った狩人」：この狩師は第8巻の挿話に登場するトレーポレムスとトラシュルスを目指していると考えられる²⁴⁹。第8巻の挿話中に登場する狩師、トレーポレムスとトラシュルスはどちらも槍を所持している(8.4,5)。(3)「女装した男」：この女装した男は第7巻に登場する盗賊ハエムスを装ったトレーポレムスを想起させる²⁵⁰。トレーポレムスは盗賊たちに囚われた婚約者カリテーを救出するために盗賊に変装して潜入し見事な演説によって彼らの心を掴み盗賊団の頭となる。ハエムス(トレーポレムス)は演説の中で、自身の盗賊団が皇帝の怒りに触れ討伐された際、討伐隊から逃れるために女性用のローブとターバンと白い靴を履いて女装をする(7.8)。(4)「剣闘士」：作中に実際に剣闘士がでてくることはないが、剣闘士のモチーフは市民に娯楽を提供することを望むデーモカレースとティアヌスの有力者の話題に付随して見受けられる(4.13,10.18)。また、*Harrison (2012)* は *Anteludia* に登場する剣闘士は、第10巻の後半の場面を想起させると指摘し、剣闘試合の会場で行われるロバ・ルキウスと女奴隷の見世物は剣闘試合の一つであると見なしている²⁵¹。(5)「地方総督」：この地方総督は第1巻に登場するルキウスの友人であるピューティ

²⁴⁷ この老人は *debilis* と形容されているが筆者はあえて「足の悪い」と訳した。理由については本章の第2節で詳しく論じる。

²⁴⁸ *Harrison (2012)* p.381.

²⁴⁹ *Ibid.*, p.382.

²⁵⁰ *Ibid.*, p.382.

²⁵¹ *Ibid.*, p.382.

アスを暗示すると考えられる²⁵²。彼はヒュパタの街で地方総督の仕事をしておりルキウスの夕食を台無しにした(1.25)。

(6)「哲学者」：作中に哲学者は登場しないが、主人公ルキウスは第10巻の中で「パリスの審判」の演劇を見た際に興奮し、不正な裁判の例としてソークラテースに言及し、また自身を「哲学を語るロバ」として哲学者のように描写している²⁵³ (10.33)。さらに付け加えてルキウスは、第1巻の冒頭で自身の祖先にはプルータルコスやセクストゥスがいており自身と哲学者との関係を強調している(1.2)。従って、この哲学者はルキウス自身を想起させると考えられる。(7)「鳥捕り」：鳥捕りのモチーフは第8巻に登場するカリテーの奴隷たちによって語られる、老人に扮した怪物に襲われる一連の挿話を想起させる²⁵⁴。この怪物はカリテーの奴隷たちに、鳥を取ろうとして穴に落ちてしまった孫を助けてほしいと頼み、助けに行った奴隷を食べてしまう(8.20)。(8)「漁師」：この漁師は第1巻に登場するヒュパタの市場でルキウスに高値で魚を売りつけた漁師であると考えられる²⁵⁵。ルキウスは第1巻でヒュパタの市場で魚を相場より高い値段で売りつけられる(1.24)。(9)「女装した熊」：第4巻に登場するトラシュレオンだと考えられる²⁵⁶。盗賊のトラシュレオンは雌熊の皮を着て屋敷に盗みに入るも犬に噛み殺されてしまう(4.15-21)。(10)「ガニューメデーヌのように着飾った猿」：このガニューメデーヌに例えられる猿は、第1巻に登場する魔女メロエーに殺されてしまうソークラテースであると考えられる²⁵⁷。魔女メロエーはソークラテースをガニューメデーヌに例える(1.12)。また猿が運ぶ金杯は第9巻の中でシュリア・デアの信徒たちが盗み出し、運んだ金杯との関連も指摘できる(9.10)。

3.2 「羽をつけられたロバ」と「その横を歩く老人」

次に筆者が最も注視している11番目のモチーフについて論ずる。

et asinum pinnis agglutinatīs adambulāntem cuidam seni debili, ut illum quidem Bellerophontem, hunc autem dicerēs Pegasum, tamen rideres utrumque. (11.8)

そして羽をつけられたロバが足の悪い老人の側を歩いています。それはまるでベッレロポーンのように他方はペガサスだとあなたは言うかもしれませんが、ですが両者をあなたは笑うでしょう。

²⁵² *Ibid.*, pp.382, 383.

²⁵³ *Ibid.*, p.383.

²⁵⁴ *Ibid.*, p.383.

²⁵⁵ *Ibid.*, p.383.

²⁵⁶ *Ibid.*, p.384.

²⁵⁷ *Ibid.*, p.384.

Harrison (2012) はこの第 11 番目のモチーフである「羽をつけられたロバ」と「その横を歩く老人」について以下のように指摘している。「羽をつけられたロバ」に関しては第 6 巻の第 30 章と第 8 巻の第 16 章で、ルキウスが自身をペガサスになぞらえていることとの関連性を指摘し、そして「その横を歩く老人」に関してはロバ・ルキウスが第 7 巻の第 26 章で彼の体に騎乗した男のことをベッレロポーンに例えていることとの関連性を論じている²⁵⁸。しかし筆者はこの議論に対して、さらに第 11 番目のモチーフである「羽をつけられたロバ」(ペガサスのようなロバ)と「その横を歩く老人」(ベッレロポーンのような老人)は「足の不自由さ」と密接に関係していることを付け加えたい。

ロバ・ルキウスは第 6 巻と第 8 巻の二度にわたり自身をペガサスに例えている。第 6 巻ではロバ・ルキウスは盗賊に囚われた少女カリテーを背中に乗せ逃走するも、盗賊に見つかり再び捕まってしまう。ロバ・ルキウスとカリテーを捕まえた盗賊は、ロバ・ルキウスを引き連れながら彼をペガサスと比較する。

Sed “Ecce” inquit ille qui me retraxerat “rursum titubas et vacillas, et putres isti tui pedes fugere possunt, ambulare nesciunt? At paulo ante pinnatam Pegasi vincebas celeritatem” (6-30)

それで「おい」と私を曳く彼は言った「またお前はふらついてよろめくのか、それでお前の腐った足は逃げることはできても、歩くこともできないのか？少し前までは羽の生えたペガサスにも素早さにおいて勝利したのに」

またロバ・ルキウスは第 8 巻の中で、彼を引き連れたカリテーの奴隷たちが逃亡する際、道中に立ち寄った村でこの先の道に非常に危険な狼が巢食っており先に進むことをやめるように忠告される。しかし彼らは忠告を無視し真夜中に出発する(8.15)。狼に自分が襲われることを非常に恐れたロバ・ルキウスは隊列の真ん中に寄り、身を隠し狼の襲撃から自身の身を守ろうとして他の馬よりも早く歩き始める。そのときに彼は自身をペガサスになぞらえている。

Sed illa pernitas non erat alacritatis meae, sed formidinis indicium. Denique mecum ipse reputabam Pegasum indutum illum metu magis volaticum fuisse ac per hoc merito pinnatum proditum. (8-16)

だがその敏捷さは私の熱心さからではなく、しかし恐怖の印としてでした。その時私は、かの名高いペガサスが恐れによって飛ぶことができ、そしてこの理由から翼のあるものと伝えられたことを考えました。

²⁵⁸ *Ibid.*, pp.384, 385.

ロバ・ルキウスは二度にわたりペガサスと関連づけられ、そしてそのどちらも彼の「歩行の素早さ」と結び付けられている。第6巻ではペガサスの素早さと対比して彼の「歩きの遅さ」や「不安定さ」が、第8巻では彼の「歩きの敏捷さ」がペガサスの素早さと比べられており、明らかに『黄金のロバ』の作中でペガサスは「歩行能力」と関係して言及されている。

次に Anteludia に登場する「ロバの側を歩く老人」について論じる。この老人は語り手によってベッレロポーンと例えられているが、ベッレロポーンはペガサスと同様に「歩行能力」と強い関係を持っていることを指摘したい。ベッレロポーンはギリシャの英雄でペガサスに乗り天界を目指すも、ゼウスの雷霆に撃ち落とされ身体が不自由になってしまったという伝説を持つ²⁵⁹。GCA (2015) は第6巻でプシュケーが冥界に下る際に登場する足の不自由な御者とベッレロポーンとの関連性を指摘している²⁶⁰。第6巻の「クピードーとプシュケー」の挿話の中で、プシュケーはウェヌスに冥界へ行くように命じられる。悲観した彼女は高い塔へ登り自殺を試みるが、その塔に自殺を止められ冥界への行き方を教えてもらう。その塔はプシュケーに、冥界の川にたどり着く前に「足の不自由な」(claudus)ロバと、同様に「足の不自由な」御者と出会うが無視をするように忠告する(6-18)。

*Iamque confecta bona parte moritiferae viae, continaberis claudum asinum
lignorum gerulum cum agasone simili (6-18)*

あなたが死をもたらす道の大半を終えたら、やがて薪を運ぶ足の不自由なロバと同様に足の不自由な御者に出会うでしょう。

そして忠告を受けたプシュケーは指示通り冥界へ向かいそのロバと御者の前を沈黙したまま通り過ぎる。

Transitoque per silentium asinario debili (6-20)

沈黙したまま足の不自由な御者の前を通り過ぎました

第6巻の第20章でプシュケーが通り過ぎるロバの御者 (asinarius) は debilis と形容されているが、この御者は明らかに第6巻の第18章で塔が予言したロバと同様に「足の不自由な」(claudus) 御者を表している。つまり第20章に登場するプシュケーが通り過ぎる御者

²⁵⁹ Gantz (1993) p.315. 身体が不自由になった言及しているテキストは失われたエウリーピデースの『ベッレロポンテース』が元になったと考えられている。

²⁶⁰ GCA (2015) p.216.

を形容する *debilis* は、明白に足の不自由さを表していることを指摘したい²⁶¹。続けて GCA (2015) はこのロバとその御者が、天界から墜落させられてしまい足が不自由になってしまったベッレロポーンとペガサスの姿を想起させることを指摘している²⁶²。

このように Anteludia に登場する第 11 番目のモチーフである「羽をつけられたロバ」と「老人」の組み合わせは「ペガサス」と「ベッレロポーン」に例えられ、そのどちらのモチーフも「歩行能力」と結び付けられている。ペガサスのモチーフは『黄金のロバ』の作中でロバ・ルキウスの「歩行の不安定さ」や「歩行の素早さ」と明白に関係しており、同様にロバの横を歩く老人はベッレロポーンに例えられ「歩行能力のなさ」をほのめかしているように考えられる。ここで筆者が最も強調したいことは Anteludia の中でロバを引き連れている老人が *debilis* と形容されていることだ。

この単語は身体的な虚弱さや手足の不自由さを表すが²⁶³、Hanson (1989)²⁶⁴、Harrison (2012)²⁶⁵、GCN (2015)²⁶⁶のどの翻訳も *debilis* を *decrepit* (老いぼれた) と年齢による虚弱さと解釈し翻訳している。しかし、筆者はこの単語は手足の不自由さを表しており、具体的には「足の不自由さ」を表していると考える。「クピードーとプシュケー」の挿話の中で、塔が無視するように忠告する *claudus* なロバとその御者は第 6 巻の第 20 章で *debilis* と形容されている。「ペガサス」と「ベッレロポーン」に例えられるロバとその横を歩く *debilis* な老人は「老いぼれた老人」ではなく「足の不自由な老人」と解釈すべきである。加えてもしこの *debilis* が「老いぼれた」という意味であるとするならば、Anteludia の仮装集団の中で唯一この老人のみがなんの仮装も(実際に衣装をつけているか、つけていないかにかかわらず)誰の真似もしておらず、非常に不可解である。筆者はこの「*debilis* な老人」は「足の不自由さ」によってベッレロポーンと第 11 巻の後半に登場する「左足を引きずった」オシリスの神官アシニウス・マルケッルスの仮装をしていると考える。

3.3 「足を引きずった老人」とアシニウス・マルケッルス

Harrison (2012) はこの Anteludia の仮装集団を今まで起きた小説のあらすじの象徴的な要約であり、ロバ・ルキウスは自身が今までに体験した冒険の一部始終を再体験しており、第 1 巻から第 10 巻と第 11 巻との間に指摘される「断絶」を繋げていると指摘している²⁶⁷。しかし筆者はこの Anteludia の仮装集団は第 1 巻から第 10 巻のルキウスのこれまでの冒険を暗示しているだけではなく、さらに第 11 巻の後半で起こる出来事をも同時に暗示してい

²⁶¹ Hanson (1989) はこの *debilis* を *crippled*(手足の不自由な)と訳しているが GCA(2015) は *decrepit* (老いぼれた)と訳している。

²⁶² GCA (2015) p.216.

²⁶³ *OLD (1968) p.487.*

²⁶⁴ Hanson (1989) p.253.

²⁶⁵ Harrison (2012) p.378.

²⁶⁶ GCA (2015) p.213.

²⁶⁷ Harrison (2012) p.385.

ると指摘したい。第 11 番目のモチーフである「足の不自由な老人」は第 11 巻に登場するオシリスの神官であるアシニウス・マルケッルスを想起させる。「偽の結末」が終わった後、第 11 巻の第 27 章でルキウスは夢の中で左足のかかとを引きずったたどたどしい歩き方をする男を目撃する。

Is, ut agnitionem mihi scilicet certo aliquo suissigno sumministraret, sinistri pedis talo paululum rexlexo, cunctabundo clementer incedebat vestigio. (11-27)

彼は、明らかな疑いようのない彼自身の目印を私に与えました。左の足のくるぶしが少しねじれていて、彼はのろのろとした足取りでゆっくりと歩いていました。

そして翌日に夢で見たお告げに従って街中を歩きまわり、ルキウスは夢で見た通りの歩き方をするアシニウス・マルケッルスという名のオシリスの神官に出会う。そしてルキウスはオシリスの密儀を取り行ってもらうように彼に依頼する(11.27)。最終的にルキウスはイシスの宗教だけではなくオシリスの宗教にも入信する(11.28-30)。アシニウス・マルケッルスは「左の足のくるぶしがねじれて」いて、「のろのろとした足取り」の足が不自由な男である。加えて彼の名前のアシニウス (Asinius) は明らかにロバ (asinus) を表している²⁶⁸。ロバの名前を持ち足が不自由な彼がルキウスをオシリスの儀式へと導く姿は Anteludia の行列の最後を歩くロバを引く老人の姿と一致する。さらに興味深いことに『黄金のロバ』の作中において、「左足」は不運と密接に関わっている事が指摘できる。第 1 巻に登場するアリストメネースは左足から足を踏み出したせいで不幸にも彼はヒュパタのチーズ市場で経済的な損失をだしてしまう。

Sed ut fieri assolet, sinistro pede profectum me spes compendii frustrata est. (1-5)

ただどいつものように、左足から踏み出してしまったせいで私の利益への期待が台無しにされてしまいました。

一方、第 6 巻においてもロバ・ルキウスを引き連れる盗賊隊の会話の中に同様のモチーフが見られることに着目したい。第 6 巻ではロバ・ルキウスを連れて歩く盗賊たちは不吉

²⁶⁸ルキウスは Asinius の名前を *Reformationis meae minime alienum nomen.* (11.27) (アシニウス・マルケッルスの名は)「私の変身に少しも不適切ではない名前です。」と語っており両者の関係性は明白である。

な足取りのロバを住処につれてきてから不運に見舞われてしまっていることを相談している(6-25,26)。ロバ・ルキウスは第6巻で老婆が語る「クピードーとプシュケー」の長い挿話を聞き終えた後、彼は盗賊たちに連れられ荷物の運搬をさせられる。その際、ロバ・ルキウスは右の脛と左の蹄を痛め足が不自由 (debilitatum) になってしまい倒れこんでしまう(6-25)。

Unde crebris aequae ingestis ictibus crure dextero et ungula sinistra me debilitatum (6-25)

度々いろいろな場所に打撃を浴びせるので、右の脛と左の蹄を怪我してしまい、私をよろよろにしました。

そして盗賊たちは足を痛めたロバ・ルキウスを立たせるとこのような会話を始める。

Et unus “Quo usque” inquit “ruptum istum asellum, nunc etiam claudum, frustra pascemus?” Et alius, “Quid quod et pessimo pede domum nostram accessit, nec quicquam idonei lucri exinde cepimus, sed vulnera et fortissimorum occisiones?” (6-26)

そして片方が「一体いつまで」といった。「この疲れ切ったロバを、さらに今では足が不自由になったこいつを無益に養うのか？」そしてもう片方が「どうしてそいつがこの上なく不吉な足取りで私たちの家に近づいてから、誰も適切な利益を手に入れられず、さらには怪我と非常に強い者たちの死を我々は手に入れるのだろうか？」

ここでは明らかに「右の脛」と「左足の蹄」を怪我して足が不自由 (debilitatum) になってしまったロバ・ルキウスの「足」とその不吉さが結び付けられている。アリストメネースは左足から踏み出してしまったせいで、不運にも商人として経済的に失敗してしまう。盗賊たちも同様に「足が不自由」で「不吉な足取り」のロバ・ルキウスを家に連れ帰ってから、彼らは不運に見舞われ経済的な失敗や仲間の死を体験する。

明らかに『黄金のロバ』の作中において足の不自由さは不運との関係が指摘でき、そして左足は経済的な失敗をあらわしている。第11巻においてルキウスはオシリスの神官であるアシニウス・マルケッルスに出会うが、彼は左足を引きずっておりルキウスから多額の金銭を受け取っている。この構図は第1巻に登場する、左足から踏み出してしまったせいで、チーズの取引に失敗したアリストメネースや、第6巻で左足の蹄を怪我したロバ・ルキウスによって、経済的な失敗に見舞われた盗賊たちと同様な関係性が第11巻のルキウスにも指摘できる。第11巻でルキウスは左足の腫を引きずったアシニウス (≡ロバ) に出会い彼に

多額の金銭を支払う。そしてこの多額の金銭の支払いはアリストメネースや盗賊たちと同様に彼にとって不幸な失敗であることが推察できる。

3.4 第3章結論

結論として、本章では Fick-Michel (1991) や Harrison (2000, 2012) が指摘する Anteludia の仮装集団は、第1巻から第10巻と第11巻を繋ぎ、ルキウスの第11巻以前のこれまでの冒険を要約しているという議論に対して、この Anteludia の仮装集団は「偽の結末」以後のアシニウス・マルケッルスが登場もまた同時に暗示していることを論じた。Anteludia の仮装集団の第11番目のモチーフである「羽をつけられたロバ」と「その横を歩く老人」は「ペガサス」と「ベッレロポーン」に例えられるが、明白にこの両者のモチーフは歩行能力との関係が指摘できる。Anteludia の仮装集団の最後尾を歩く「羽をつけられたロバ」と「その横を歩く老人」の姿は「クピードーとプシュケー」の挿話の中で、プシュケーがそのそばを通り過ぎる *debilis* なロバとその御者の姿を想起させる。この「クピードーとプシュケー」の挿話中に登場する *debilis* なロバの御者は「足が不自由」(*claudus*)である。同様に、Anteludia の仮装集団に登場する、「ロバの横を歩く老人」を形容する *debilis* は明らかに「足の不自由さ」を表している。そして、この「足の不自由」(*debilis*)な老人は「偽の結末」の後に登場するルキウスを二度目の秘儀へと先導する左足を引きずったオシリスの神官アシニウス・マルケッルスの姿と一致する。加えて『黄金のロバ』の作中において、この「足の不自由さ」は『黄金のロバ』の作中において、不吉なものとして機能していることを論じた。アリストメネースは左足から踏み出したせいで、チーズの取引に失敗し経済的な損失を経験する。足が不自由 (*debilitatum*) になったロバ・ルキウスの不吉な足取りによって、第3巻から第7巻に登場する盗賊たちは仲間の死と経済的な失敗を経験してしまう。ルキウスが第11巻の「偽の結末」が終わった後に出会う、アシニウス・マルケッルスは左足を引きずっている。この左足は先述したように、明白に「不吉さ」を表している。Anteludia の語り手は、仮装集団の最後尾を歩くペガサスに扮するロバとそれを引く老人の両者の滑稽さを読者に語りかける²⁶⁹。しかしロバ・ルキウスが仮装行列に暗示される今までの冒険に気づくことができず、また彼が「偽の結末」の後に自身に起こる不幸な経済的失敗をほのめかす「足を引きずった老人とロバ」を見物する構図は非常に滑稽である。この「足を引きずった老人とロバ」のモチーフは第11巻の「偽の結末」以前に見られる「滑稽」な要素であり、「滑稽」派の新しい補強材料になると考える。

²⁶⁹ *tamen rideres utrumque* (11.8)
ですが両者をあなたは笑うでしょう。

第4章

4.1 結論

『黄金のロバ』を解釈する上で避けては通れない議論の中心に、この物語は「真剣」なものなのかそれとも「滑稽」なものなのかという問題がある。第1巻から第10巻の間の欲望にまみれ、自身の欲望のせいでロバにまでなってしまう失敗を繰り返す「俗」なルキウスと、第11巻の突然イシスの教えに目覚めた「聖」なるルキウスの変化は確かに唐突である。「真剣」派の研究者たちは『黄金のロバ』は主人公が度を越した欲望や好奇心によって転落し「冥界」をさまよい、そして最終巻でその魂が宗教によって「救済」されるという「魂の転落と救済」を扱った「真剣」な物語であると主張している。

しかし、筆者は「滑稽」派の立場から本論文の第2章では第11巻の第26章に設置されている「偽の結末」の問題とルキウス、アリストメネース、テーリュフロンの3者を比較し論じた。結論として第11巻の第26章の第3節と第4節の間にはプロローグに対応した「偽の結末」が用意されており、ルキウスは第11巻の第26章でアリストメネースやテーリュフロンの対照的に「故郷への帰還」に成功するが、この帰還は明確にルキウスの「変身」の成功を意味している。しかしルキウスは「故郷への帰還」に成功したにもかかわらず、すぐさまローマへ出発し2回目の密儀を経験する。第3章で論じたように、この「偽の結末」以後の2回目の密儀にルキウスを先導する「左足を引きずった」神官アシニウス・マルケッルスは Anteludia の仮装集団の最後尾を歩く「翼のついた滑稽なロバを先導する足を引きずった老人」の姿と一致する。そしてこの Anteludia の仮装集団は第1巻から第11巻を「統合」するだけではなく、第11巻の第26章の「偽の結末」が終わった後のルキウスの不運な経済的な失敗も同時に暗示していることを指摘した。ロバ・ルキウスが仮装行列に暗示される今までの冒険に気づくことができず、自身にこれから起こる不幸な経済的失敗をほのめかす「足を引きずった老人とロバ」を見物するロバ・ルキウスの構図は非常に「滑稽」であり、「滑稽」派の新しい補強材料になると考える。

本論文で筆者は「滑稽」派の立場から「偽の結末」以前の第11巻の第8章の Anteludia の仮装集団の中に「滑稽」な要素が存在していることを論じた。確かに本論文で論じた新たな「滑稽」な要素は『黄金のロバ』の「滑稽」な解釈を補強するものであるが、本論文で取り扱ったテキストは極めて限定的である。『黄金のロバ』を解釈する上で、Harrison (2000) が積極的に評価するソフィストとしてのアープレイウスや Graverini (2012) や Tilg (2014) が主張する哲学者としてのアープレイウスを考慮し、より広い視野を持って考察する必要がある。これらの問題を今後の課題とし、研究を続けたい。

BIBLIOGRAPHY

- Fick-Michel (1991)** : Fick-Michel, N. , *Art et mystique dans les Métamorphoses d'Apulée*.
Annales littéraires de l'Université de Franche-Comté
- Finkelpearl (2004)** : Finkelpearl, E. , 'The Ends of the Metamorphoses, Apuleius
Met.11.26. 4–11.30', M. Zimmerman & R. Th. van der Paardt (edd.),
*Metamorphic Reflections, essays presented to Ben Hijmans at his 75th
birthday*, 319-340.
- Finkelpearl (2007)** : Finkelpearl, E. , 'Apuleius, the Onos, and Rome', *The Greek and
the Roman Novel: Parallel Readings (Ancient Narrative.
Supplementum 8)*, Michael Paschalis, Stavros Frangoulidis ,
Stephen Harrison, and Maaïke Zimmerman (edd.), 263-76.
- Francis(2001)** : Francis, C. , "TELLING TALES IN THE" METAMORPHOSES" OF
APULEIUS', *Acta Classica*, 53-76.
- Frangoulidis (2002)** : Frangoulidis, S. , 'The Laughter Festival as a Community
Integration Rite in Apuleius' Metamorphoses', *Space in the
Ancient Novel, 1*, 177-88.
- Frangoulidis (2008)** : Frangoulidis, S. , *Witches, Isis and narrative: approaches to magic
in Apuleius' " Metamorphoses"* (Vol. 2). Walter de Gruyter.
- Fredouille (1975)** : Fredouille, J. C. , *Apulée Métamorphoses. Livre XL* , Presses
Universitaires de France.
- Gantz (1993)** : Gantz T. , *Early Greek Myth vol,1*, The Johns Hopkins University press.
- GCA (2004)** : Zimmerman, M. , et al. (eds.) , *Apuleius Madaurensis: Metamorphoses
Books IV 28-35, V and VI 1-24: the tale of Cupid and Psyche*,
Groningen: Brill.
- GCA (2007)** : Keulen, W.H. , *Apuleius Madaurensis: Metamorphoses Book I: Text,
Introduction and Commentary*, Groningen: Brill.
- GCA (2015)** : Keulen, W.H. , et al. (eds.), *Apuleius Madaurensis: Metamorphoses Books
XI (The Isis Book): Introduction and Commentary*, Groningen: Brill.
- Graverini (2012)** : Graverini, L. , *Literature and identity in the Golden Ass of Apuleius*.
(Benjamin Todd Lee, Trans.) The Ohio State University
Press. (original work published 2007)
- Griffith (1975)** : Griffiths, J. G. , *The Isis-book:(Metamorphoses, Book XI)* (Vol. 39). Brill.
- Habink (1990)** : Habinek, T. , 'Lucius' Rite of Passage', *Materiali E Discussioni per
L'analisi Dei Testi Classici*, (25), 49-69.

- Hanson (1989)** : Hanson, J. A. , *Apuleius: Metamorphoses, 2 vols*, Loeb Classical Library.
- Harrison (2000)** : Harrison, S. J. , *Apuleius: a Latin sophist*, Oxford University Press. (Reprinted 2008)
- Harrison (2012)** : Harrison, S. J. , 'Interpreting the Anteludia (Apuleius, Metamorphoses 11.8)', *Trends in Classics* 4(2), 377-387.
- James (1987)** : James, P. , *Unity in Diversity: A Study of Apuleius' Metamorphoses*, Hildesheim-Zürich-New York: Olms.
- Jones (2014)** : Jones, C. , 'Apuleius, Corinth, and Two Epigrams from Nemea', *Zeitschrift Für Papyrologie Und Epigraphik* (192), 115-120.
- Jones (2017)** : Jones, C. , *Apuleius: Apologia, Florida, De Deo Socratis*, Loeb Classical Library.
- Kenny (2003)** : Kenney, E. , 'In the Mill with Slaves: Lucius Looks Back in Gratitude', *Transactions of the American Philological Association* , 133(1), 159-192.
- Keulen (2003)** : Keulen, W. H. , 'Comic invention and superstitious frenzy in Apuleius' Metamorphoses: The figure of Socrates as an icon of satirical self-exposure', *The American Journal of Philology*, 124(1), 107-135.
- Keulen (2009)** : Keulen, W. H. , 'Roman fiction and its audience: seriocomic assertions of authority', *Readers and Writers in the Ancient Novel*, 12, 197-217.
- Kunihara (2013)** : 国原吉之助, 吳茂一 『黄金の驢馬』, 岩波書店
- Libby (2011)** : Libby, B. B. , 'Moons, Smoke, and Mirrors in Apuleius' Portrayal of Isis', *American Journal of Philology*, 132(2), 301-322.
- Macleod (1967)** : Macleod, M. D. , *Lucian: Lucian VIII* , Loeb Classical Library.
- Mason (1978)** : Mason, H. J. , 'Fabula Graecanica: Apuleius and his Greek Sources', Hijmans and van der Paardt (edd.), 1-15.
- May (2006)** : May, R. , *Apuleius and Drama: The Ass on Stage*, Oxford University Press.
- May (2013)** : May, R. , *Metamorphoses, or, The golden ass: Book 1*, Aris & Phillips.
- McCreight (1993)** : McCreight, T. D. , 'Sacrificial Ritual in Apuleius' Metamorphoses' *GCN*, 5, 31-61.
- Montiglio (2007)** : Montiglio, S. , 'You Can't Go Home Aga in Lucius' Journey in Apuleius' Metamorphoses Set against the Background of the Odyssey', *Materiali E Discussioni per L'analisi Dei Testi Classici*, 58, 93-113.
- Murgatroyd (2004)**: Murgatroyd, P. , 'Thelyphron's Story (Apul." Met." 2.21-30)', *Mnemosyne*, 57 (4), 493-497.

- OLD (1968)** : Glare, P. G. W. , *Oxford Latin dictionary*, Clarendon.
- Penwill (1975)**: Penwill, J. L. , ‘Slavish pleasures and profitless curiosity: fall and redemption in Apuleius' *Metamorphoses*’, *Ramus*, 4(1), 49-82.
- Perry (1920)** : Perry, B. E. , *The Metamorphoses ascribed to Lucius of Patrae: its content, nature, and authorship*. GE Stechert.
- Perry (1926)** : Perry, B. E. , ‘An Interpretation of Apuleius' *Metamorphoses*’, In *Transactions and Proceedings of the American Philological Association*, 57, 238-260.
- Sandy (1973)** : Sandy, G. N. , ‘Foreshadowing and Suspense in Apuleius' "Metamorphoses"', *The Classical Journal*, 68 (3), 232-235.
- Sandy (1974)** : Sandy, G. N. , ‘Serviles Voluptates in Apuleius' *Metamorphoses*’, *Phoenix*, 28(2), 234-244
- Scobie (1975)** : Scobie, A. , *Apuleius Metamorphoses (Asinus aureus): a commentary* (Vol. 54). Hain.
- Scobie (1978)** : Scobie, A. , ‘The Structure of Apuleius' *Metamorphoses*’, *Ben HJIMANS.*, R. Th. van der Paardt (edd.) , *Aspects of Apuleius' Golden Ass. A Collection of Original Papers, Groningen*, 43-61.
- Slater (2003)** : Slater, N. W. , ‘Spectator and spectacle in Apuleius’. *MNEMOSYNE-LEIDEN-SUPPLEMENTUM*, 85-100.
- Smith (1972)** : Smith, W. , ‘The Narrative Voice in Apuleius' *Metamorphoses*’, *Transactions and Proceedings of the American Philological Association*, 103, 513-534.
- Schlam (1971)**: Schlam, C. C. , ‘The scholarship on Apuleius since 1938’, *The classical world*, 64(9), 285-309.
- Tatum (1969)** : Tatum, J. , ‘The Tales in Apuleius' *Metamorphoses*’, *Transactions and Proceedings of the American Philological Association*, 100, 487-527.
- Tatum (1979)** : Tatum, J. , *Apuleius and the Golden Ass*, Cornell University Press.
- Tilg (2014)** : Tilg, S. , *Apuleius' Metamorphoses : A study in Roman fiction*. Oxford University Press.
- Todaka (2013)** : 内田次信, 戸高和弘, 渡辺浩司, 『偽預言者アレクサンドロス』, 京都大学学術出版会
- Vander Poppen (2008)**: Vander Poppen, R. E. , ‘A Festival of Laughter: Lucius, Milo, and Isis Playing the Game of Hospitium’, *Paideia at Play: Learning and Wit in Apuleius, AN Suppl*, 11, 157-174.

- Walsh (1970)** : Walsh, P. G. , *The Roman novel: the 'Satyricon' of Petronius and the 'Metamorphoses' of Apuleius*, Cambridge University Press.
- Watson (2014)** : Watson, N. , 'Dreams and Superstition: A Reinterpretation of Satire in Apuleius' *Metamorphoses* 11', *Ancient Narrative*, 11, 133-158.
- Winkler (1985)** : Winkler, J. J. , *Auctor and Actor : A Narratological Reading of Apuleius' Golden Ass*, University of California Press.
- Zimmerman (2002)** : Zimmerman, M. , 'Latinising the Novel. Scholarship since Perry on Greek 'models' and Roman (re-) creations', *Ancient Narrative*, 2, 123-142.

信州大学大学院人文科学研究科 院生会組織

院生会長(1名)

院生会統括(院生会の意見総括、院生総会開催、大学院委員会との連絡、各行事幹事、連絡事項管理)

会計(1名)

院生会費管理(会費徴収、物品購入、収支報告)

シンポジウム委員(1~2名)

シンポジウム運営(シンポジウム連絡、原稿集作成・配布)

院生会雑誌『人文科学研究』編集委員(1名)

『人文科学研究』編集(雑誌作成、投稿受付)

- 任期はそれぞれ一年間(4月—3月)とする。
- 役員は基本的に M2 から選出する。
- 次年度役員を選出は適宜行う。
- 役員選出は立候補及び推薦による。
- 各役職の兼務は各年度の院生会員の人数に応じて認める。ただし、会長と会計は兼務できない。
- 休学や留学等の長期の不在やその他のやむを得ない事情を有する場合、各役員の交代を認める。
- 役員構成及び、各役員の業務内容は以上の通りであるが、各年度の状況に合わせた変更は認められる。

平成 30 年度 信州大学大学院人文科学研究科 院生会活動記録

平成 30 年度院生会役員
院生会長 對馬康平
会計 伊藤智弘
書記 任意
シンポジウム委員 南英明、劉心奕
広報 任意
雑誌編集委員 佐野克明

.....
7月14日 第一回院生総会 【 於 院生室 】

議題 1. 院生会組織説明

議題 2. 大学院シンポジウムの説明

- ・ M1 に向けて、シンポジウムの概要説明

議題 3. 前年度会計報告

- ・ 同年度予算案

議題 4. 大学院委員会への質問・要望

- ・ 特になし
-

9月21日 信州大学人文科学研究科大学院前期シンポジウム 【 於 人文ホール 】

プログラム

▽9:00-9:10 研究科長挨拶、投票方法説明、第一発表者準備

▼9:10-9:40 對馬 康平 半実在論 (semirealism) を擁護する

▼9:45-10:15 LIU XINYI 羅洪先の思想変遷について

▼10:20-10:50 藤澤 翔 Seeking an Effective Pedagogy of English Perfectives

▼10:55-11:25 佐野 克明 A Cognitive Linguistic Approach to Progressives

Leading to a Better Education For Japanese EFL Learners

▼11:30-12:00 伊藤 智弘 「字鏡集」の基礎的研究

▼12:05-12:35 南 英明 『変身物語』研究

▽12:40-14:00 昼食、懇談会、投票、優秀発表表彰、大学院委員会委員長挨拶

.....
2月9日 信州大学人文科学研究科大学院後期シンポジウム【 於 人文ホール 】

プログラム

▽9:00-9:10 研究科長挨拶、投票方法説明、第一発表者準備

▼9:10-9:40 茂原 奈保子 ヨーゼフ・ボイス研究—ボイス像再考

▼9:45-10:15 田中 大暉 長野県内の木遣りについて 唄の種類とその分布に関する一考察

▼10:20-10:50 中畑 ひかり 『修験指南鈔』の研究

▼10:55-11:25 佐野 克明 A Cognitive Linguistic Approach to Progressives

Leading to a Better Education for Japanese EFL Learners

▼11:30-12:00 伊藤 智弘 「字鏡集」の基礎的研究

▽12:00-13:20 昼食、懇談会、投票、優秀発表表彰、大学院委員会委員長挨拶

人文科学研究科 第 16 号

令和 2 年 3 月 31 日 発行

編集者 信州大学人文科学研究科院生会

発行者 信州大学人文科学研究科委員会

〒390-8621 松本市旭 3 丁目 1 番 1 号 信州大学人文科学研究科内
